

仙台市文化財調査報告書第148集

鴻ノ巣遺跡

—第6次発掘調査報告書—

1991年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第148集

鴻ノ巣遺跡

—第6次発掘調査報告書—

1991年3月

仙台市教育委員会

序 文

日頃より仙台市の文化財保護行政に多大のご協力を賜り、誠に感謝にたえません。

現在、仙台市内には約700箇所の遺跡が知られており、宮城野区に所在する鴻ノ巣遺跡もその一つです。この遺跡は七北田川の南岸に東西に広がり、西側を東北本線が、また東側を東北新幹線が通っています。古代、中世は国府多賀城への街道が付近を通り、大きな集落を形成していくだろうと推定されるところでもあります。

今回、この遺跡において宅地造成が行われることになり、発掘調査を実施しましたが、鴻ノ巣遺跡を巡る歴史の一端を具体的に見る機会になりました。今まで行われた発掘調査の成果と合わせて、徐々にこの遺跡の実態に迫りつつあるものと確信しております。

発掘調査によって得られた多くの成果は、地域の歴史を知るうえで貴重な資料ですので、今後の仙台市における街づくり、学校教育などの中に、充分に活かしていきたいと考えております。

最後になりましたが、調査と報告書作成にご指導、ご協力くださいました各位に対しまして、心より感謝申し上げます。

平成3年3月

仙台市教育委員会

教育長 東海林 恒英

凡　　例

1. 本書で使用した國土地理院発行の地形図には図名・縮尺を明記した。
2. 本書の土色の記述は『新版 標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄 1973) によった。
3. 本書の図中および本文中の北はすべて真北である。
4. 本調査においては以下の遺構略号を使用した。

S D 溝跡

S E 井戸跡

S K 土坑

S X 性格不明の遺構

5. 本書においては以下の遺物記号を使用した。

B 弥生土器

C 土師器（非ロクロ）

D 土師器（ロクロ）

E 須恵器

G 平瓦

I 陶器

J 磁器

K 石器・石製品

L 木製品

N 鉄製品

6. 土器実測図の中心線は、個体の残存率がほぼ1/2以上を実線、1/2以下1/4以上を一点鎖線、1/4以下を破線で表した。スクリーン・トーン貼り込みは黒色処理を示している。

例　　言

1. 本報告書は、宅地造成に伴う鴻ノ巣遺跡の発掘調査報告書であり、すでに公表された広報紙等に優先するものである。
2. 本報告にかかる発掘調査・整理作業および報告書刊行に要した費用は、開発者　信三実業株式会社が負担した。
3. 報告書刊行のための整理作業は、工藤哲司・工藤信一郎の補佐を得て、荒井　格が行なった。
4. 関連科学については、種子などの鑑定を星川清親氏・庄司駒男氏（東北大学農学部）、樹種の同定を鈴木三男氏（金沢大学教養部）・能城修一氏（農林水産省森林総合研究所）、石器の使用痕分析を山田しょう氏（東北大学埋蔵文化財調査室）、プラント・オパール分析を古環境研究所に依頼した。
5. 石器の石材鑑定は蟹澤聰史氏（東北大学教養部）にお願いした。
6. 金属製品のX線撮影は梅村聖一氏（東北歴史資料館）にお願いし、金属製品の分類は平間亮輔・渡部　紀とともに行なった。
7. 陶器・磁器の鑑定は佐藤　洋が行なった。
8. 発掘調査および整理作業・報告書作成に際し、次の方々・機関より指導・助言を賜わった（敬称略）。
星川清親・庄司駒男（東北大学農学部）、鈴木三男（金沢大学教養部）、能城修一（農林水産省森林総合研究所）、佐久間光平・山田しょう（東北大学埋蔵文化財調査室）、千葉孝弥・相沢清利（多賀城市埋蔵文化財センター）、山田晃弘・梅村聖一（東北歴史資料館）、古川一明・岩見和泰・吾妻俊典（宮城県文化財保護課）、東北大学埋蔵文化財調査室、東北歴史資料館
9. 本文の執筆および編集は荒井　格が担当した。
10. 本調査の諸記録・実測図面・写真（モノクロ・スライド）および出土遺物は、仙台市教育委員会が一括保管している。

本文目次

序文	
凡例	
例言	
第I章 遺跡の位置と環境	1
第II章 調査に至る経緯	6
第III章 調査要項	7
第IV章 調査の方法と概要	8
1. 試掘調査	8
2. 本調査	8
第V章 基本層序	10
第VI章 検出遺構と出土遺物	13
1. 第II層出土遺物	13
2. 第III a 層上面検出遺構	14
3. 第III b 層上面検出遺構	18
4. 第III層出土遺物	20
5. 第IV層上面検出遺構	24
6. 第VI層上面検出遺構	41
7. 第VII a 層上面検出遺構	44
第VII章 自然科学的分析	45
1. プラント・オパール分析	45
2. 種子等炭化物の鑑定結果報告	51
3. 鴻ノ巣遺跡第6次調査出土木製品の樹種	57
4. 鴻ノ巣遺跡出土の礫の光沢面について	58
第VIII章 考察とまとめ	63
1. 第II層出土陶器・磁器について	63
2. 第III層出土陶器・磁器について	64
3. SX 1 性格不明遺構について	65
4. 第IV層上面検出遺構内出土陶器・磁器について	66
5. 第IV層上面検出ピット出土の光沢面のある礫について	67
6. 第IV層上面検出遺構出土土器について	68

7. 第VII層水田跡および第VII a 層水田跡について	70
8. プラント・オパール分析結果について	72
注	74
参考・引用文献	75
写真図版	77

図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	3
第2図 鴻ノ巣遺跡発掘調査地点位置図	5
第3図 調査区設定図	9
第4図 基本層序模式図	10
第5図 調査区北壁断面図	11
第6図 第II層出土遺物	13
第7図 第III a 層上面遺構配置図	14
第8図 S D 1 a、1 b、2溝跡平面図	15
第9図 S D 1 a、1 b、2溝跡断面図	15
第10図 S D 3 a 溝跡平面図	16
第11図 S D 3 a 溝跡出土遺物	16
第12図 S D 3 b 溝跡平面図	17
第13図 S D 3 a、3 b 溝跡断面図	18
第14図 S D 3 b 溝跡出土遺物	18
第15図 第III b 層上面遺構配置図	18
第16図 S D 4 溝跡平面図	19
第17図 S X 1 性格不明遺構平面図	19
第18図 S D 4 溝跡、S X 1 性格不明遺構断面図	19
第19図 S X 1 性格不明遺構出土遺物	20
第20図 S X 2 性格不明遺構平面図・断面図	20
第21図 第III層出土遺物(1)	21
第22図 第III層出土遺物(2)	22
第23図 第III層出土遺物(3)	23
第24図 第IV層上面遺構配置図	24
第25図 S D 5・S D 8 溝跡平面図・調査区東壁断面図	25

第26図	S D 5 溝跡平面図	25
第27図	S D 6 溝跡平面図・断面図	27
第28図	S D 7 溝跡平面図・断面図	28
第29図	S D 9 溝跡出土遺物	29
第30図	S E 1 井戸跡平面図	30
第31図	S E 1 井戸跡平面図・断面図	31
第32図	S E 2 井戸跡平面図	31
第33図	S E 2 井戸跡出土遺物	31
第34図	S E 2 井戸跡平面図・断面図	32
第35図	S K 2 土坑平面図・断面図	33
第36図	S K 2 土坑出土遺物	33
第37図	S K 3、S K 4 土坑平面図・断面図	34
第38図	S K 5 土坑平面図・断面図	34
第39図	S K 3、S K 4 土坑出土遺物	35
第40図	S K 6 土坑平面図・断面図	36
第41図	S K 8 土坑平面図・断面図	36
第42図	S K 9 土坑平面図・断面図	36
第43図	第IV層遺物出土状況平面図	37
第44図	Pit 出土遺物(1)	38
第45図	Pit 出土遺物(2)	39
第46図	Pit 出土遺物(3)	40
第47図	第IV層上面出土遺物	41
第48図	第VI層水田跡平面図	42
第49図	第VI層水田跡田面標高測点値	43
第50図	第VII a 層水田跡平面図	44
第51図	第VII a 層出土遺物	44
第52図	土層断面図と分析資料の採取箇所	48
第53図	イネのプランツ・オパールの検出状況	48
第54図	おもな植物の推定生産量と変遷	48
第55図	縁状痕の方向と顕微鏡写真撮影箇所	61
第56図	第II層出土陶器・磁器産地別出土量	63
第57図	第II層出土陶器・磁器器種別出土量	63

第58図 第III層出土陶器・磁器の年代幅	64
第59図 第III層出土陶器・磁器産地別出土量	64
第60図 第III層出土陶器・磁器器種別出土量	64
第61図 第III層出土常滑産陶器器種別出土量	64
第62図 第III層出土鉢・甕産地別出土量	65
第63図 第III a層・第III b層上面検出遺構合成平面図	66
第64図 第IV層上面検出遺構内出土陶器・磁器の年代幅	67
第65図 第IV層上面検出遺構内出土陶器・磁器産地別出土量	67
第66図 第IV層上面検出遺構内出土陶器・磁器器種別出土量	67
第67図 第IV層上面検出遺構出土坏の底径と口径	69
第68図 第IV層上面検出遺構出土坏の器高と口径	69
第69図 第IV層上面検出遺構出土坏のプロフィール	70

表 目 次

第1表 鴻ノ巣遺跡次敷別調査概要	6
第2表 第VI層水田跡属性表	43
第3表 プラント・オバール分析結果	46
第4表 稲穀生産量および稲作期間の推定値	47

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

鴻ノ巣遺跡は宮城野区岩切字鴻ノ巣に所在し、JR仙台駅から北東方向約7.3kmに位置している。範囲は東西約1km、南北約320m、面積約32万km²である。遺跡は、仙台港から福島県まで約10kmの幅でのびる宮城野海岸平野を名取川・阿武隈川とともに形成した七北田川南岸の自然堤防上に立地している。標高は7~10mであり、微地形的には七北田川沿いが高く南西方向に向かって徐々に低下している。七北田川との比高差は約3mである。

鴻ノ巣遺跡の周辺では、古墳時代よりも古い時代の明瞭な生活痕跡はほとんど確認されていない。わずかに縄文時代あるいは弥生時代の遺物が出土するのみである。それに対して古墳時代以降の遺物・遺構は、これまでの調査によって数多く検出されている。以下、鴻ノ巣遺跡を含め周辺の歴史的環境を概観する。

古墳時代

鴻ノ巣遺跡の七北田川対岸の自然堤防上には新田遺跡があり、その東側には山王遺跡が隣接している。古墳時代前期塩釜式期の遺構としては、新田遺跡から土坑が数基確認されているだけであるが、中期南小泉式期になると多くの遺物・遺構が検出されるようになる。新田遺跡からは石製模造品とともに土師器が出土しており、山王遺跡からは竪穴住居跡などが確認され、石製模造品やその原石・未製品などをはじめとする多量の遺物が出土している。^(註1) 竪穴住居跡の中には石製模造品を作っていたと考えられる住居跡もある。さらに、幅約3mで「コ」の字形にめぐら溝跡（東西約40m）なども確認されている。^(註2)

一方、鴻ノ巣遺跡の西南西方向約1.8kmの丘陵上にある燕沢遺跡からは前期の竪穴住居跡が確認されている。^(註3)

本遺跡では、前期の土師器が土坑などから出土しているが、細片が多く復元できるものは少ない。中期の遺構としては竪穴住居跡・周溝墓などが地点を異にして確認されている。^(註4)

後期栗田式期の遺構としては、新田遺跡からその中央付近に約200点もの土師器を据えた浅いくぼみが確認されており、祭祀遺構と考えられている。^(註5)

西側の丘陵地帯の麓には善応寺・台屋敷・入生沢・東光寺などの横穴墓群が見られる。

古代

鴻ノ巣遺跡の東北東方向約3kmの低丘陵上には陸奥国府と鎮守府が置かれた多賀城跡があり、その周辺の自然堤防や丘陵などに立地する新田遺跡・山王遺跡・市川橋遺跡・高崎遺跡などからは数多くの遺構や遺物が発見されている。新田・山王・市川橋遺跡で確認された平安時代の道路跡には、多賀城跡外郭南辺の方向と一致するものと、多賀城跡中軸線の方向と一致するものとがあり、平安時代頃にはすでに多賀城周辺に計画的な地割りが存在していた可能性がある。

考えられている。^(註8)さらに、奈良時代の道路跡はまだ検出されていないが、竪穴住居跡や掘立柱建物跡などの方向に規則性があることから、計画的な地割りは奈良時代にまできかのほる可能性が指摘されている。新田・山王・市川橋・高崎遺跡からは中国産陶磁器・灰釉陶器・綠釉陶器や飴帯・石帶などの官人階級の所持品と見られる遺物が出土しており、多賀城に深い関わりをもつ人々が居住していたものと考えられる。

燕沢遺跡からは平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が確認されている。遺跡の性格としては、多賀城創建期以前および創建期に比定される瓦や平安時代の漆紙文書などが出土していることから、寺院跡あるいは官衙遺跡と考えられている。^(註9)

鴻ノ巣遺跡の西方向約1.5kmの岩切畠中遺跡では奈良時代と平安時代の竪穴住居跡などが確認されている。^(註10)

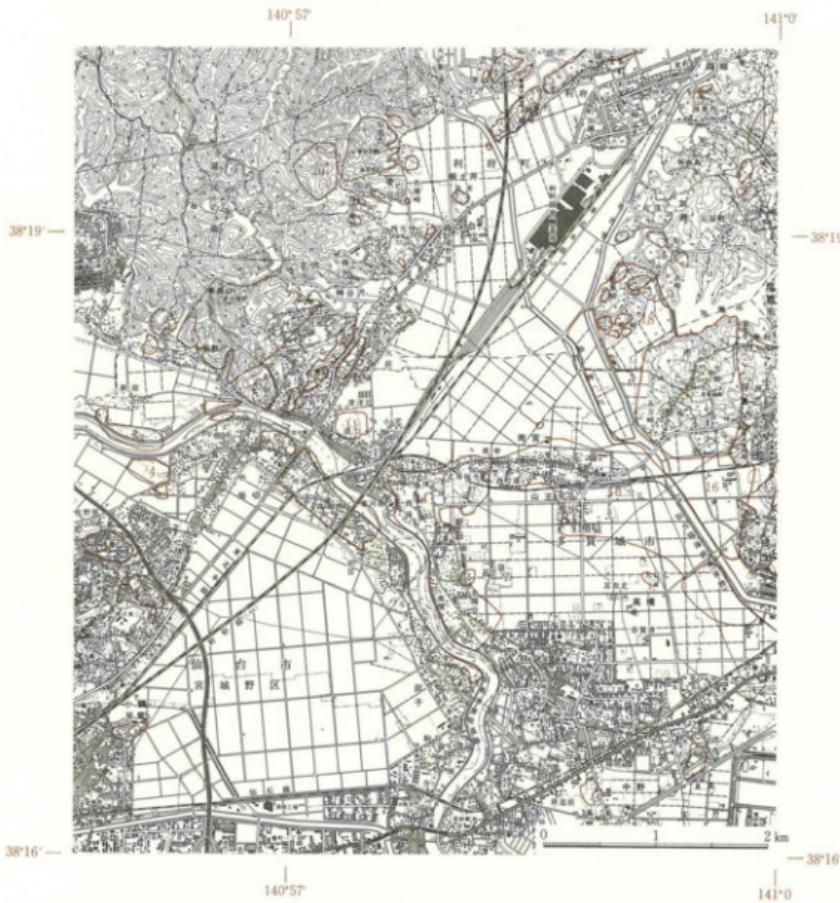
以上のように周辺の遺跡では数多くの遺物・遺構が発見されているが、本遺跡からは奈良時代に属すると考えられる柱列状遺構1列、平安時代の溝跡・土坑などが確認されているのみで、古代における土地利用状況については不明な点が多い。^(註11)

中世

文治五年(1189)、鎌倉幕府による全国支配と、その基盤である軍事権門としての幕府の地位をより確固としたものにすることを目的として奥州侵略が行なわれた(文治五年奥州合戦)。奥州侵略は、日本全国の在地領主に軍勢の催促をせることによって鎌倉殿への忠誠度をはかるためのものでもあった。これによって幕府は、日本全国すべての在地領主を完全に指揮統制下に置くことを達成したのである。翌建久元年(1190)、奥州側の抵抗のひとつとして起こった大河兼任の乱に加担した陸奥国留守所の長官(「本・新留守」)はその職を追われることになる。かわって陸奥国留守職に任命されたのが伊沢家景である。陸奥国留守職とは、幕府による障奥回衛の直接的掌握のために國務をとりしきる現地の最高責任者である。伊沢家景はのちに留守氏を称し、その子孫は陸奥国府周辺の地を所領として、鴻ノ巣遺跡の北西方向約1.5kmに位置する岩切城を居城とした。中世の陸奥国府(多賀国府)の所在地は明らかにされていないが、近年、文献の検討や周辺遺跡の発掘調査成果などから、岩切地区が国府域に含まれるのではないかとの考えも示されている。^(註12)

岩切城の麓には東光寺遺跡がある。「東光寺」は留守氏の菩提寺であり、遺跡としては中世の城館・板碑群・石窟仏群として理解されてきた。近年の調査によって中世寺院跡の遺構が確認され、また集落跡でもあったことが明らかとなっている。^(註13)

新田遺跡からは多量の遺物とともに溝をめぐらせた屋敷跡が数ヶ所で確認されている。山王遺跡からも堀をめぐらせた屋敷跡が確認されており、留守氏と関連のある者が居住していた可能性が考えられている。また、新田・山王遺跡内にも板碑があり、その数は20基をこえる。^(註14)



番号	遺跡名	種別	立地	時代・時期	番号	遺跡名	種別	立地	時代・時期
1	溝ノ集遺跡	集落跡	自然堤防	古墳～中世	11	洞ノ口遺跡	包含地	自然堤防	平安
2	岩切城跡	城館	丘陵	中世	12	高瀬沢遺跡	包含地	丘陵	縄文・古代
3	大正沢遺跡	包含地	自然堤防	平安	13	燕沢遺跡	官衙 寺院跡?	丘陵斜面	縄文～平安
4	岩切畠中遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～近世	14	新田遺跡	包含地	自然堤防	古墳～中世
5	新宿圓遺跡	包含地	自然堤防	平安	15	山王遺跡	包含地	自然堤防	古墳～平安
6	東光寺遺跡	城館	丘陵斜面	中世	16	市川横道跡	包含地	丘陵・古墳	縄文～平安
7	今市遺跡	包含地	自然堤防	平安～中世	17	多賀城跡	国府跡	丘陵・冲積平野	奈良・平安
8	若宮前遺跡	城館	丘陵斜面	縄文・古墳・平安～近世	18	八幡崎B道跡	集落跡	分離丘陵	縄文～古墳・平安
9	羽黒前遺跡	包含地	丘陵	中世～近世	19	音谷館跡	城館	丘陵	中世
10	化粧坂城跡	城館	丘陵	中世	20				

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

本遺跡からは2地点で溝で方形に区画された屋敷跡が確認されており、中国産の青磁、常滑・
涅槃産や地元産の陶器、舟形の木製品などが出土している。^(註18)留守文書に見られる「冠屋市庭
(場)」・「河原宿五日市庭(場)」は、中世には冠川とよばれた七北田川沿いにあったと考えられ
ており、本遺跡はその有力な候補地のひとつにあげられている。^(註19)

以上のように、本遺跡を含む岩切周辺では、中世の遺物・遺構が密集して確認されており、
中世における陸奥国の政治・経済・文化を考える上で重要な地域となっている。

これまで述べてきたように、鴻ノ巣遺跡の周辺には、古墳時代以降の人々の生活痕跡が数多く残されている。本遺跡は、竪穴住居跡や周溝墓に見られるように、古墳時代中期にはすでに居住の場あるいは墓域として利用されていたことがわかる。また中世においては、国府域に含まれる可能性が指摘されている岩切地区にあること、溝で区画された屋敷跡などの遺構が検出され多量の遺物が出土していることなどから、冠屋市場あるいは河原宿五日市場のいづれかと考えられており、中世史を研究する上でも非常に重要な遺跡となっている。

調査次数の設定

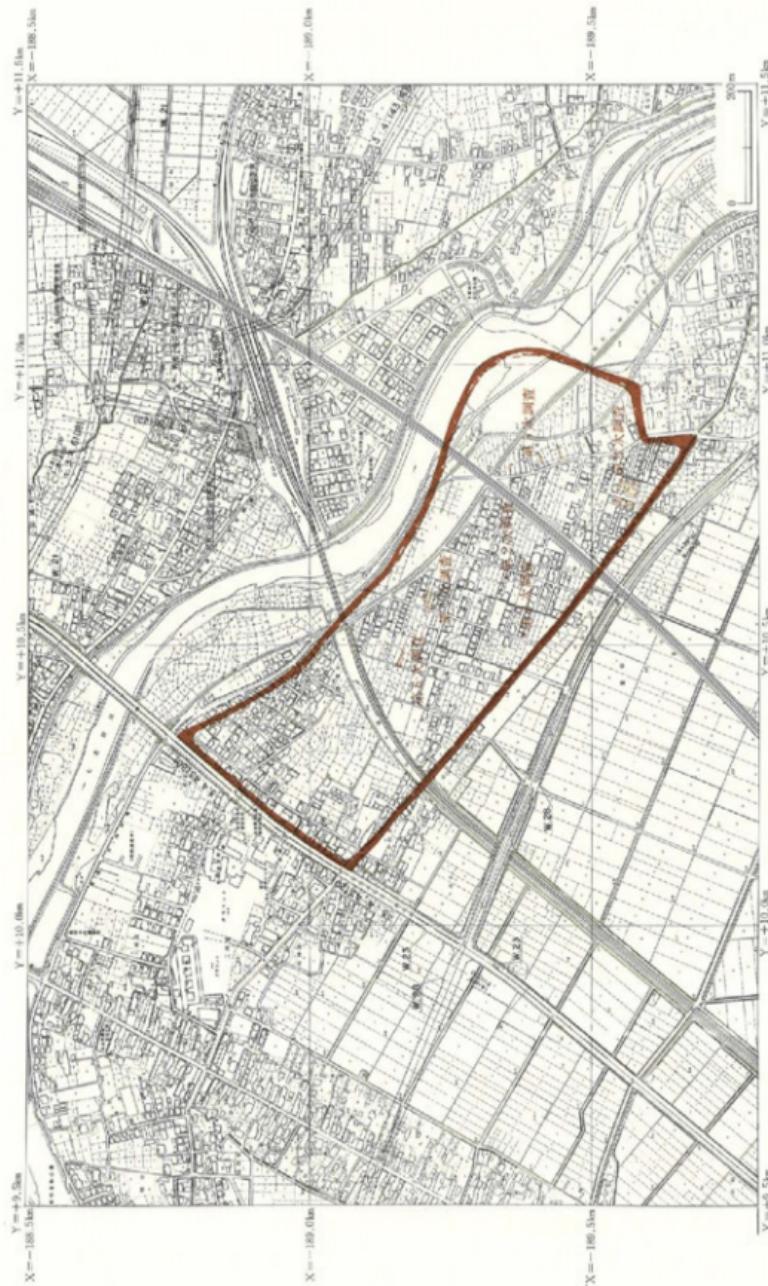
昭和48年の宮城県文化財保護課による東北新幹線建設に伴って行なわれた調査以来、鴻ノ巣遺跡内における発掘調査は數回実施されており、その中には仙台市教育委員会が主体となって行なった調査もいくつか含まれている。また、鴻ノ巣遺跡の所在する地域は、仙台駅まで電車で10分という交通の利便性によりこれからも宅地造成などに伴う発掘調査が充分に予想される場所もある。したがって、今後、発掘調査が増加した場合、今回の調査地点も含め調査成果や調査地点などに混乱を生じる可能性が考えられる。そこで、これまで仙台市教育委員会が主体となって実施した調査について調査次数を与え、整理しておくこととした。

調査次数の設定にあたっては次の3点を原則とした。

1. 昭和55年に実施した調査を第1次調査とし、それ以後は調査の実施された順に次数を与える。
2. 試掘調査の結果によって本調査へ移行した場合、試掘調査と本調査は同一の調査次数とする。
3. 仙台市教育委員会以外の機関が調査主体となって実施した発掘調査については、今回設定する調査次数には含めない。

以上を原則として調査次数を設定すると、今回の調査は第6次調査にあたる。第1表には、第1次調査から第6次調査までの調査概要を示した。

第2図 湾ノ端造跡発掘調査地点位置図



調査次数(調査年度)	時代・時期	検出遺構	出土遺物
第1次(昭和55年)	平安時代	溝跡、土坑	土塗器(表札ノ入式)、赤褐色土器、青色滑(島青石)、中世陶器、青磁、瓦(古代)、上部品(土器)、金製品(刀子)、古鏡、木製品(箱、井戸外付)
	平安時代以降	溝上窓跡、	
	中世	掘立柱建物跡(15棟)、土坑、溝跡、	
第2次(昭和56年)		溝跡、	
第3次(昭和56年)		溝跡、	
第4次(昭和57年)	古墳時代前期	土坑、	無土器、土崩器(痕跡式)、南小泉式、仕口式、青杉ノ入式)、赤褐色土器、泥質器、中世陶器、青白磁、吉田器、近世陶器、瓦(古代)、右腰袋造品、右腰袋(監造・模)、鉄製品(刀子)、木製品(蓋・舟形など)、馬の頭
	古墳時代中期	周溝墓(1基)、溝跡、	
	平安時代～中世	土坑、溝跡、	
	中世	掘立柱建物跡(5棟)、井戸跡、	
第5次(昭和58年)	時期不明	竪穴式土坑跡?	土壙器(底小泉式、開分下腹式～表札ノ入式)、表札ノ入式)、赤褐色土器、泥質器、中世陶器、瓦(古代)、筒口、石製品(有孔石錠系、鐵石)、鐵製品(刀子・鍔・鉤・蓋)、鐵斧
	古墳時代中期	豎穴式土坑(3基)、土坑、	
	奈良時代	柱列状遺構1列、	
	平安時代	溝跡、土坑、無土泥構、	
第6次(平成1～2年)	平安時代以降	溝跡、	無土器、土崩器(南小泉式、青杉ノ入式)、赤褐色土器、泥質器、中世陶器、青白磁、白磁、近世陶器、瓦(山代)、石器、右腰袋(底石)、古鏡、金製品(刀子・鍔)、鉄斧、木製品(箱)
	古墳時代中期	水田跡、	
	平安時代	溝跡、土坑、	
	中世	溝跡、井戸跡、土坑、燒土痕跡、ビット、鐵芯不規造輪(水田跡?)、	
第7次(平成1～2年)	中世以降	溝跡、	

第1表 鴻ノ巣遺跡(C-135) 次数別調査概要

第II章 調査に至る経緯

鴻ノ巣遺跡(仙台市文化財登録番号 C-135)は仙台市宮城野区岩切字鴻ノ巣に所在し、七北田川南岸の自然堤防上に立地する遺跡である。

鴻ノ巣遺跡では、昭和48年に実施された宮城県文化財保護課による東北新幹線建設に伴う発掘調査以来、数度の調査が行なわれている。これまでの調査の結果、古墳時代前期(塙釜式期)の溝跡、中期(南小泉式期)の豎穴住居跡・周溝墓、奈良時代の柱列状遺構、平安時代の溝跡・土坑、中世の掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡などが検出されており、それに伴って多くの遺物が出土することが明らかとなっている。

平成元年6月、信三実業株式会社によって遺跡範囲内での宅地造成計画が明らかにされたため、協議を経て試掘調査を実施した。その結果、現表土より20～40cm下で平安時代の遺物を多量に含む層が確認され、さらにその下層から溝跡・ビットなどの構造が検出されたため、本調査の実施が必要であると判断された。この試掘結果をもとに信三実業株式会社と再度協議を行ない、年度内に事前の発掘調査に着手することとなった。

調査に使用する重機・現地事務所などは開発者側が直接準備することとし、それ以外の必要事項の起案・決裁、契約締結の後、12月5日に調査に着手した。

第III章 調査要項

遺跡名	鴻ノ巣遺跡（仙台市文化財登録番号 C-135）					
所在地	仙台市宮城野区岩切字鴻ノ巣44の1ほか					
調査主体	仙台市教育委員会					
調査担当	仙台市教育委員会 社会教育部 文化財課 調査係 試掘調査 田中則和					
本調査	佐藤 謙 加藤正範 田中則和 熊谷幹男 太田昭夫 篠原信彦 佐藤甲二 吉岡恭平 工藤哲司 工藤信一郎 平間亮輔 中富 洋 佐藤 淳 渡部 紀 荒井 格					
調査期間	試掘調査 平成元年6月22日 本調査 平成元年12月5日～12月27日 平成2年3月8日～3月31日					
調査面積	245m ²	調査対象面積	1674m ²			
調査参加者	斎藤彰裕 浅理千賀 阿部利大 板橋祝子 伊藤 優 達藤英治 片根義幸 加藤 久 黒瀬クラコ 小林みよ子 後藤幸子 在川宏志 佐々木 匡 佐々木義昭 佐藤和夫 佐藤弘子 佐藤良次 篠原良子 柴田 明 庄子カツイ 庄子徳治 鈴木春江 田中一史 玉手美喜男 永井考仁 永野次郎 半澤 忍 山崎光雄 横川 健					
整理担当	荒井 格	補佐	工藤哲司	工藤信一郎		
整理作業	阿部早苗 石井茂久 大泉照美 小野寺貴子 鈴木明美					

第IV章 調査の方法と概要

1. 試掘調査

信三実業株式会社との協議を経て、平成元年6月22日、遺構・遺物の有無を確認するため3ヶ所のトレンチを設定し精査を行なった。層位は表土を含め4層まで確認され、3層からは土師器を中心として相当量の遺物が出土し、遺物包含層であることが明らかとなった。また、3層および4層上面からは溝状の遺構やピットなどが確認された。この結果に基づいて本調査の必要があると判断した。

2. 本調査

平成元年12月5日、対象地域内の道路予定部分を中心に調査区を設定し、表土（1層）を重機で除去したのちII層上面で遺構の有無を確認した。その後、IIIa層上面まで人力によって掘り下げ、遺構検出作業を行なった。IIIa層上面検出遺構の掘り込み・記録化を終えた後、人力でIIIb層上面まで掘り下げ、遺構検出作業を行なった。以下、順次同様な作業を繰り返し、それより下位では遺構・遺物が存在しないと考えられる層の上面までの精査を行なった。

今回の調査で遺構が確認されたのは、IIIa層・IIIb層・IV層・VI層およびVIIa層各層の上面である。

測量にあたっては、道路予定部分の北西端に任意の座標原点を設け、測量基準線を予定道路中心線と平行な方向に設定した。数値は東および南方向へ行くにしたがい増加するようにし、それぞれE-○、S-○として表示している。また、この座標系は任意のものであることから調査地点の正確な位置を求めるため、三角測量によってA地点(S-6, E-3)、B地点(S-6, E-42)の2地点に平面直角座標系第X系による座標数値を与えた。その数値は以下のとおりである。

A 地点 X=-189154.236 Y=10467.957

B 地点 X=-189166.618 Y=10504.908

調査区における任意の座標軸は、第X系座標軸に対して東へ18°31'19"偏している。

水準測量の基準は、一等水準点を基に移設した水準測量杭を調査区外の南東に設置して使用した。基準値は8.192mである。

平面図・断面図は1/20を原則とし、特に必要と認められた遺構および遺物の出土状況については、1/10で作製した。

なお、調査実施中に遺構の密度が予想よりも高いことが明らかとなり、下層には水田土壌と思われる層が確認されたため、平成元年内に調査を終了することは不可能と判断された。そこ

で一旦12月27日で調査を中断し、平成2年3月8日に再開した。器材撤収を含むすべての作業が終了したのは3月31日である。



第3図 調査区設定図

第V章 基本層序

今回の調査において確認できた基本的な層位は、第I層から第XI層までの大別11層、細別16層である。第4図にその模式図を示した。模式図右側にはプラント・オパール分析によって得られた試料1グラムあたりのイネのプラント・オパールの個数を、0、2,500個以下、2,500~5,000個、5,000個以上の4種類に分けて示した。一般的には、試料1グラムあたり約5,000個以上のイネのプラント・オパールが検出された場合、そこで稻作が行なわれていた可能性が高いと判断されている。古環境研究所によるプラント・オパール分析の結果は第VII章に掲載した。

以下、各層の土色・土性・層厚・分布などの概略を述べる。

第I層 表土 (旧耕作土)。10Y R4/3にぶい黄褐色シルト。層厚15cm前後で調査区内全域に分布する。土師器・須恵器・陶器などをわずかに含んでいる。

第II層 10Y R4/4褐色砂質シルト。層厚15cm前後で一部(調査区南東隅)を除き調査区内のほぼ全域に分布する。層中からは土師器・須恵器・陶器・磁器・磁石・鉄製品・鐵滓などが出土している。

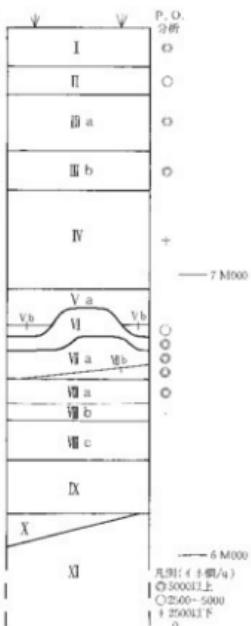
第III a層 10Y R4/3にぶい黄褐色砂質シルト。層厚20cm前後で調査区内全域に分布する。層の上面で溝跡を検出した。

第III b層 10Y R4/2灰黄褐色砂質シルト。第III a層に類似するが粗砂をより多く含んでいる。層厚10cm前後で調査区内全域に分布する。層の上面で溝跡・性格不明の落ち込みなどを検出した。

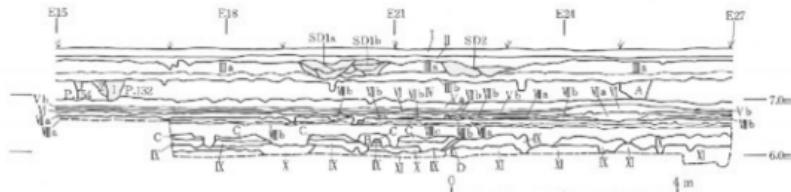
第III a層・第III b層中からは、土師器・須恵器・陶器・磁器・磁石・鉄製品・瓦などが出土している。試掘調査における遺物包含層(3層)は、この第III a層・第III b層に相当する。

第IV層 10Y R4/3にぶい黄褐色粗砂。層の上部に直径5~20mmの小礫を多く含んでいる。層厚40cm前後で調査区内全域に分布する。層の上面で井戸跡・土坑・溝跡・ビットなどを検出した。遺物は層上面から土師器・須恵器・陶器などがわずかに出土しているのみであり、層中からはまったく出土しない。なお、これまでの調査ではこの層の上面を造構確認面としてとらえていたものと思われる。

第Va層 10Y R6/3にぶい黄橙色粘土。調査区内全域に分布する。層厚は10~20cmで下層の第VI層で検出された大畦畔の位置でもっとも薄くなる。遺物は出土していない。



第4図 基本層序模式図



層位	土色	土性	備考
Pt. 132-1	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	IV層を全体的に小ブロック状に含む。直径2mm~1cmの小礫を全体的に多く含む。
Pt. 132-2	10YR2/3 暗褐色	砂質シルト	IV層をブロックに含み、直徑2~5mmの小礫を全体的にまばらに含む。
Pt. 154	10YR2/3 に近い黄褐色	砂質シルト	10YR2/3 黒褐色土質シルトを粒状に含む。炭化物片を含む。
A	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	直徑2~5mmの小礫を全体的に多く含む。IV層をブロック状に含む。
B	10YR2/1 黒褐色	粘土	10YR5/4 に近い黄褐色を小ブロック状に部分的に含み、直徑2mm前後の小礫を全体的にまばらに含む。
C	10YR4/2 淡黃褐色	粘土質シルト	10YR5/3 に近い黄褐色砂を軸中心に多く含む。
D	10YR4/2 淡黃褐色	粘土質シルト	

第5図 調査区北壁断面図 (E15~E27)

第Vb層 10YR5/2灰黄褐色粘土。層厚5cm前後ではほぼ調査区内全域に分布しているが、第VI層で検出された大畦畔の位置には分布しない。層中よりロクロを使用していない土師器片が3点出土している。いずれも小片で全体の器形は不明であるが、そのうちの1点は壊の破片である。

第VI層 2.5Y4/1黄灰色粘土。層厚5cm前後で調査区内全域に分布する。層下面には若干の凹凸が認められる。水田土壌であり、大畦畔・小畦畔によって区画された水田跡を検出した。検出した水田区画は、部分的なものも含め18区画である。層中よりロクロを使用していない土師器甕の破片が2点出土している。

第VIIa層 10YR5/2灰黄褐色粘土。層厚5~10cmで調査区内全域に分布する。層下面には顕著な凹凸が認められる。水田土壌であり、大畦畔を1条検出した。層上面よりロクロを使用していない土師器鉢が、層中より土師器甕の破片が出土している。

第VIIb層 7.5YR4/2灰褐色粘土。層厚4~8cmで調査区東半部にのみ分布する。西半部は第VIIa層水田跡に伴う耕作によって失われているものと思われる。遺物は出土していない。

第VIIIa層 10YR3/1黒褐色粘土。平均層厚10cm前後で調査区内全域に分布する。遺構は検出されなかったが、プランツ・オパール分析の結果では試料1グラムあたりイネのプランツ・オパールが14,300個という高い密度で検出されており、この場所で稻作が行なわれていた可能性がさわめて高いとされている。第VIIIa層以下からは遺物は出土していない。

第VIIIb層 10YR4/2灰黄褐色粘土。層厚5cm前後で調査区内全域に分布する。

第VIIIc層 10YR3/1黒褐色粘土。層厚20~40cmで調査区内全域に分布する。

第IX層 5GY4/1暗オリーブ灰色粘土。第IX層以下はグライ化した層になる。

第X層 7.5G Y4/1暗緑灰色シルト質砂。

第XI層 10Y R5/2灰黄褐色砂。粗砂と細砂が互層をなす。

時間的な制約のため調査区内全域の平面的な精査ができたのは第VI層上面までである。第VI層以下はE-27列以西で第VIIa層までの除去を行なった。それよりも下層については、約24m²(E-15~27列、S-4・5列の部分、12×2 m)を層位ごとに掘り下げ、精査を行なった。

第VI章 検出遺構と出土遺物

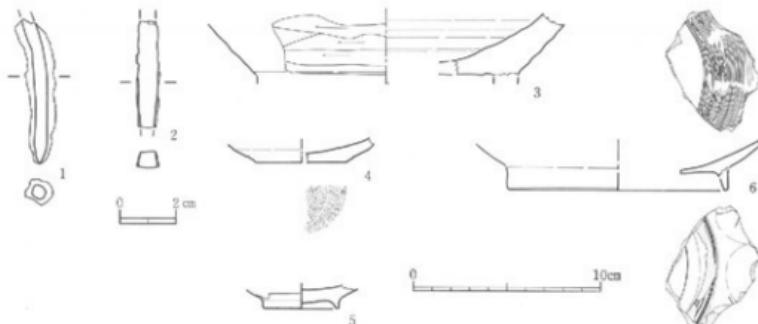
今回の調査によって発見した遺構は、溝跡8条、井戸跡2基、土坑7基、性格不明遺構2基、ピット168、2時期の水田跡である。また、遺物は遺構が検出されなかった層中からも出土している。

調査の結果、SK1土坑はピット1に、SK7土坑はSE2井戸跡へ変更したためSK1およびSK7は欠番となっている。

以下、層位ごとに検出遺構と出土遺物について述べる。

1. 第II層出土遺物

第II層中からは土師器壺・甕片、須恵器壺片、陶器片、磁器片、鉄釘、鉄滓、砥石などが出土している。第6図1・2は鉄釘である。ともに一部を欠損している。3は渥美産と思われる高台付の片口鉢の底部である。13世紀前半以前と考えられる。4は15世紀の瀬戸産の緑釉皿(?)である。5は相馬産の碗である。6は18世紀以降の肥前産の型打皿である。写真40-9・12は肥前産の染付皿(18世紀代)、10は同じく皿もしくは碗と思われる。12はいわゆる「くらわんか手」とよばれている皿である。11は片切形のみられる中国産(同安窯系か)の青磁碗と思われる(12~13世紀)。



番号	種別	登録番号	残存長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	写真図版
1	鉄釘	N-1	51.0	9.6	10.1	6.4	45-2
2	鉄釘	N-2	37.7	8.6	7.7	4.4	45-3
3	陶甕						
4	緑釉皿						
5	陶甕	I-3					
6	型打皿	J-1					

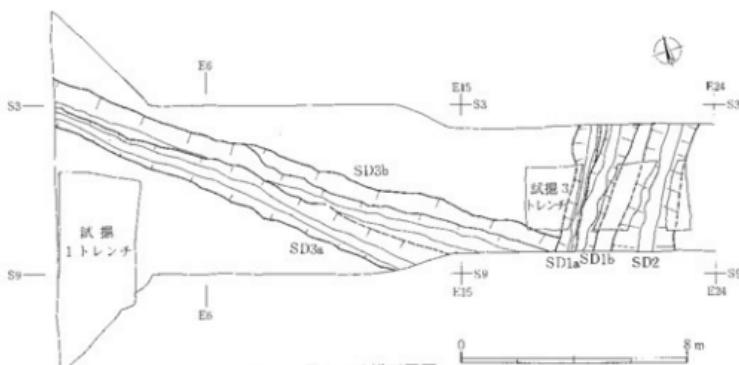
番号	種別	器形	登録番号	外観調査				法量 (cm)	残存	写真図版
				口縁部	全体部	底部	側面部			
3	陶甕	I-1		下端へラケツリ	ナゲ	—	ロクロ (3.2)	—	—	41-1
4	緑釉皿	I-2		ロクロ	回転系切り	—	ロクロ (1.4)	4.8	41-2	
5	陶甕	I-3		沃袖 (貫入あり)	沃袖 (貫入あり)	(1.3)	—	4.1	40-12	
6	型打皿	J-1		—	—	単付	染付 (2.7)	11.2	40-8	

第6図 第II層出土遺物

以上のように古代から近世までの遺物が混在していることから、第II層には近世あるいはそれ以降の時期が与えられよう。

2. 第III a 層上面検出構

第III a 層上面では溝跡 3 条が検出されている。



第7図 第III a 層上面遺構配置図

SD 1 溝跡は確認段階では 1 条の溝跡と判断したが、掘り込み作業の結果、新旧 2 時期の切り合いのある溝跡であることが判明した。新しい溝跡を SD 1 a 溝跡、古い溝跡を SD 1 b 溝跡として記述する。

SD 1 a 溝跡 上端幅 75~92cm、下端幅 8~27cm、深さ 20~33cm で、底面はほぼ平坦であるが北から南へ向かって徐々に低下している。断面形は開いた U 字形を呈する。方向は N-30°-E である。検出分の総長は 4.7m であるが、さらに南北へ続いていると考えられる。堆積土は褐色ないし灰褐色の砂である。

SD 1 b 溝跡、SD 3 b 溝跡を切っている。

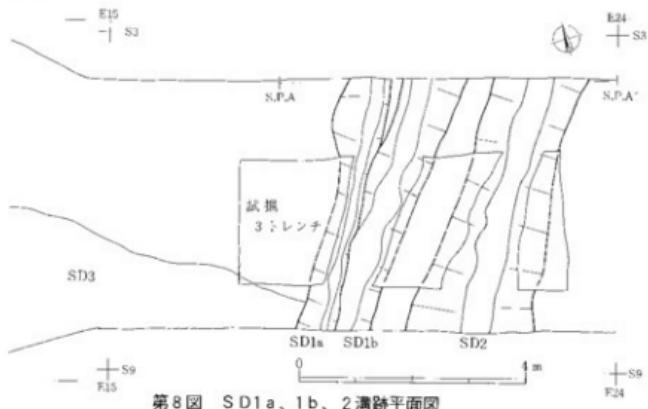
SD 1 b 溝跡 上端幅 90~105cm、下端幅 22~50cm、深さ 20~28cm で、底面はほぼ平坦であるが、SD 1 a 溝跡と同様に北から南へ向かって徐々に低下している。断面形は扁平な逆台形を呈する。方向は N-38°-E である。検出分の総長は 5.0m であるが、さらに南北へ続いていると考えられる。堆積土はにぶい黄褐色・灰黄褐色・褐色の砂である。

SD 1 a 溝跡に切られている。

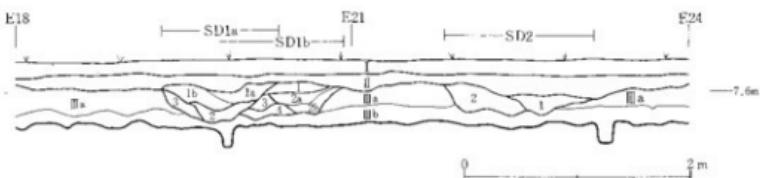
前述のように確認段階では SD 1 a 溝跡と SD 1 b 溝跡を 1 条の溝 7 跡と判断して掘り込んだため、出土遺物はどちらの溝跡に帰属するのか不明である。したがってここでは出土遺物を一括して記述することとする。SD 1 a 溝跡・SD 1 b 溝跡の堆積土中からは、土師器片、

須恵器片、陶器片が出土している。写真41-3は美濃産の鉄釉がほどこされた香炉（？）の底部である。16世紀末ないし17世紀前半頃のものと思われる。

S D 2 溝跡 上端幅148~222cm、下端幅33~59cm、深さ16~26cmで、底面には若干の凹凸があり北から南へ向かって徐々に低下している。断面形は扁平な逆台形を呈する。方向はN-33°-Eである。検出分の総長は5.3mであるが、さらに南北へ続いていると考えられる。堆積土はにぶい黄褐色の砂および暗灰黄色のシルト質砂である。堆積土中からは土師器片、須恵器片が出土している。



第8図 SD 1a, 1b, 2溝跡平面図

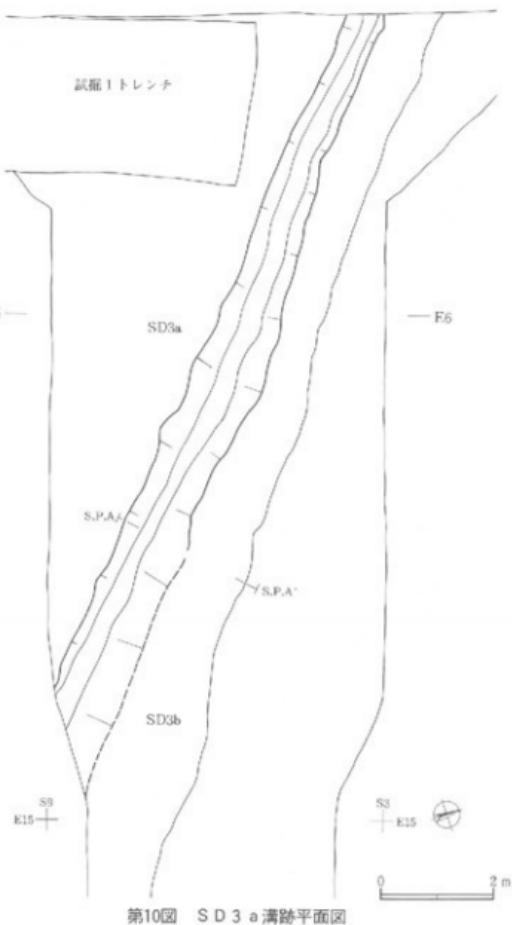
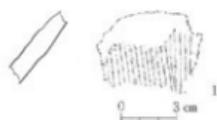


層位	土色	上性	備考
SD 1a			
Ia	7.5YR4/3 深色	砂	
Ib	7.5YR4/4 黄褐色	砂	
2	7.5YR4/2 暗褐色	砂	直径2mm前後の小礫をすばらに含む。
3	7.5YR4/3 黄褐色	砂	直径2mm前後の小礫を全体的にまばらに含み、10VR3/2 黑褐色シルトを小プロック状に含む。
SD 1b			
1	10YR5/4 にじむ黄褐色	砂	
2a	7.5YR4/4 黄褐色	砂	直径2mm前後の小礫を全体的にまばらに含む。
2b	7.5YR4/3 深色	砂	直径2mm~1cmの礫をわずかに含む。
3	10YR4/3 にじむ黄褐色	砂	
4	10YR4/2 深褐色	砂	直径2mm~3cmの礫をわずかに含む。
SD 2			
1	10YR4/3 にじむ黄褐色	砂	直径2mm前後の小礫を全体的にわずかに含む。
2	2.5YI/4 暗灰褐色	シルト質砂	直径2~5mmの小礫を全体的にまばらに含む。

第9図 SD 1a, 1b, 2溝跡断面図（調査区北壁 E18~24）

SD 3 溝跡は確認段階では堆積土が類似していたため 1 条の溝跡と判断したが、掘り込み作業の結果、新旧 2 時期の切り合いのある溝跡であることが判明した。新しい溝跡を SD 3 a 溝跡、古い溝跡を SD 3 b 溝跡として記述する。確認段階の判断に基づいて掘り込みを行なったため検出できなかった SD 3 a 溝跡の北側上端（断面観察用ベルト以東部分）については、推定線で表した。

SD 3 a 溝跡 上端 幅 60~135cm、下端 幅 20~46cm、深さ 11~25cm で、底面はほぼ平坦であるが、西から東へ向かって徐々に低下している。断面形は開いた U 字形を呈する。方向は E-42°-S である。検出分の総長は 15.0m であるが、さらに東西へ続いていると考えられる。



第10図 SD 3 a 溝跡平面図

番号	種 別	形態	登録番号	外 国 圖 彫			内 国 調 整			法 量 (cm)	残存	写真版
				口縁部	体 部	底 部	口縁部	体 部	底 部			
1	陶 器	罐体	I-11	—	ロクロ	—	—	熊目	—	4.5 5.8 1.1	41-4	

第11図 SD 3 a 溝跡出土遺物

堆積土は黒褐色の砂質シルトであり、堆積土中からは土師器坏片、陶器片が出土している。第11図は産地不明の擂鉢である。室町時代頃のものと思われる。

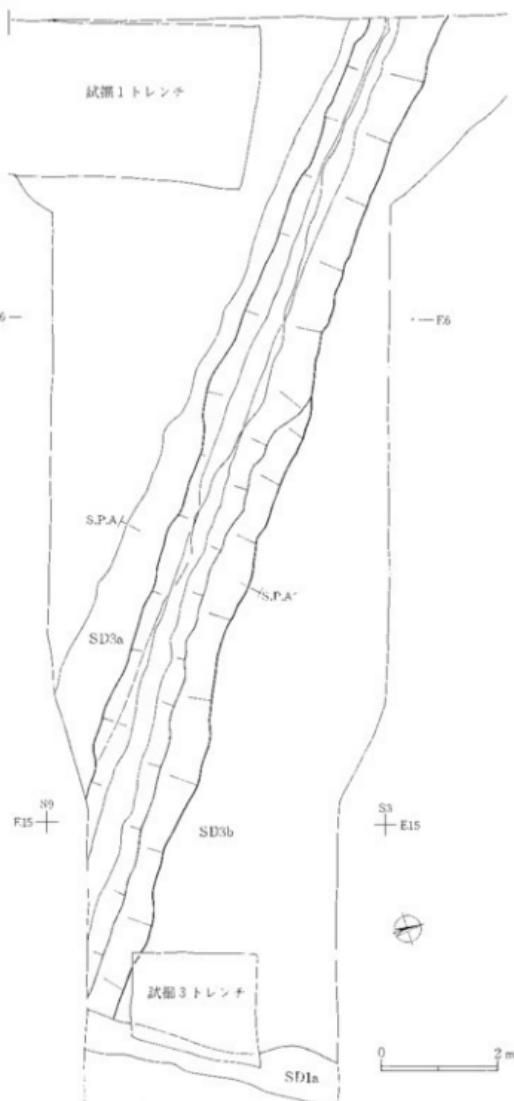
S D 3 b 溝跡を切っている。

S D 3 b 溝跡 上端幅

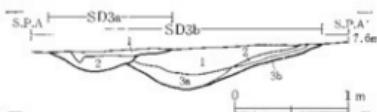
121~196cm、下端幅26~52cm、_{E6}—深さ21~44cmで、底面はほぼ平坦である。断面形は大きく開いたU字形を呈する。方向はE—37°—Sである。検出分の総長は18.95mであるが、さらに東西へ続いていると考えられる。

堆積土は褐灰色・暗褐色・黒褐色のシルト質砂などである。堆積土中より土師器坏片、須恵器坏片、陶器片、磁器片、瓦片、砥石などが出土している。第14図は砥石である。破損しているが、残されている3面はすべて使用によって磨滅している。石材は砂岩である。

S D 1 a 溝跡、S D 3 a 溝跡に切られている。



第12図 S D 3 b 溝跡平面図



層位	土色	土性	備考
SD 3 a			
1	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト	マンガン鉱をわずかに含む。
2	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	マンガン鉱を全体的に含む。
SD 3 b			
1	10YR4/2 濃灰色	砂質シルト	層下部にマンガン鉱を多く含む。
2	10YR3/3 刺褐色	シルト質砂	マンガン鉱をわずかに含む。
3a	10YR2/2 黒褐色	シルト質砂	マンガン鉱を全体的に含む。
3b	10YR3/3 明褐色	シルト質砂	マンガン鉱を全体的に含む。

第13図 SD 3a、3b 溝跡断面図



番号	種別	登錄番号	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)	石 材	寸法圖版	備 考
1	磁 石	K-9	81.0	40.9	23.2	91.6	砂 岩	43-3	

第14図 SD 3 b 溝跡出土遺物

3. 第III b 層上面検出遺構

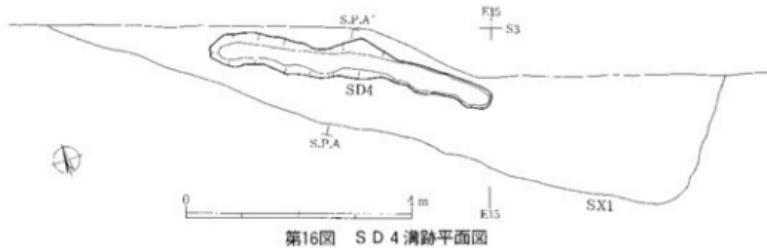
第III b 層上面では溝跡 1 条、性格不明遺構 2 基、ピットが検出されている。



第15図 第III b 層上面遺構配置図

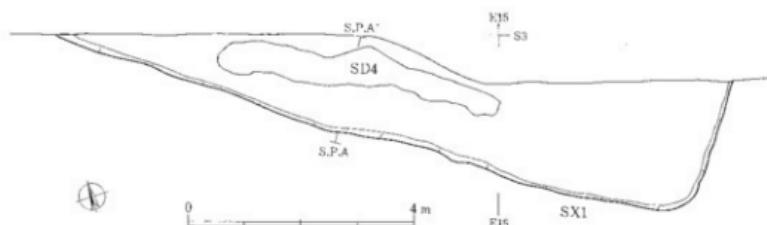
SD 4 溝跡 長さ5.1m、上幅34~70cm、下幅23~37cm、深さ3~8cmで、底面はほぼ平坦である。断面形は扁平な U 字形を呈する。方向は E - 30° - S である。堆積土は黒褐色の砂質シルトであり、堆積土中より土師器片、須恵器片がわずかに出土している。

S X 1 性格不明遺構を切っている。

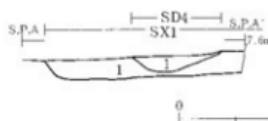


第16図 SD 4溝跡平面図

S X 1 性格不明遺構 調査区北西で確認された落ち込みである。確認長は短辺が2.6m、長辺が11.75mで、さらに北側に続いているものと考えられる。深さは約7.5~17cmである。長辺の方向はE-36°-Sである。堆積土は黒褐色の砂質シルトであり、堆積土中より弥生土器片、土師器坏・高台付坏片・甕片、須恵器坏片、陶器片、鉄釘、砥石などが出土している。第19図1は弥生土器片と思われる。細片のため器種を断定することはできないが、壺の肩部の可能性が考えられる。LR繩文が施されている。2は砥石である。破損しているが2面に使用による磨滅が認められる。磨滅面の上には多数の線状の擦痕が残されており、刃こぼれを消したり、あるいは研ぎすぎた刃先をつぶすために刃を垂直にあてた結果かと思われる。石材は頁岩である。3は鉄釘と思われるが両端を欠損している。

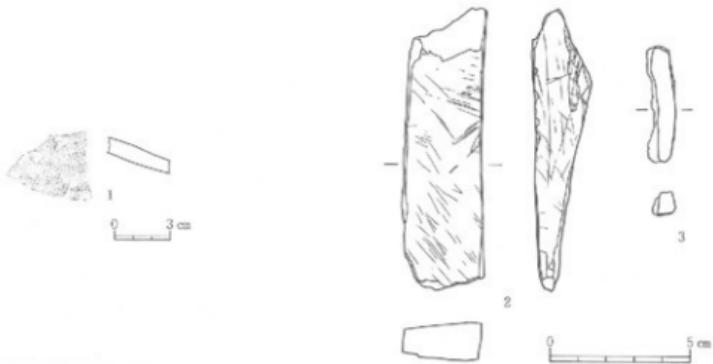


第17図 SX 1性格不明遺構平面図



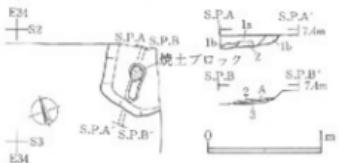
部位	土色	土性	備考
SD 4	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト	
SX 1	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	10YR3/3 黒褐色シルト質砂を小ブロック状に少兼合む。

第18図 SD 4溝跡、SX 1性格不明遺構断面図



第19図 SX 1 性格不明遺構出土遺物

S X 2 性格不明遺構 調査区北東で一部検出した土坑状の遺構である。57cm以上、62cm以上の規模で、深さは約11cmである。底面は火を受けて堅くしまっており一部に焼土のブロックがある。堆積土は焼土を小ブロック状に含む黒褐色のシルトである。堆積土中より土師器片と骨片と思われる小片が出土している。



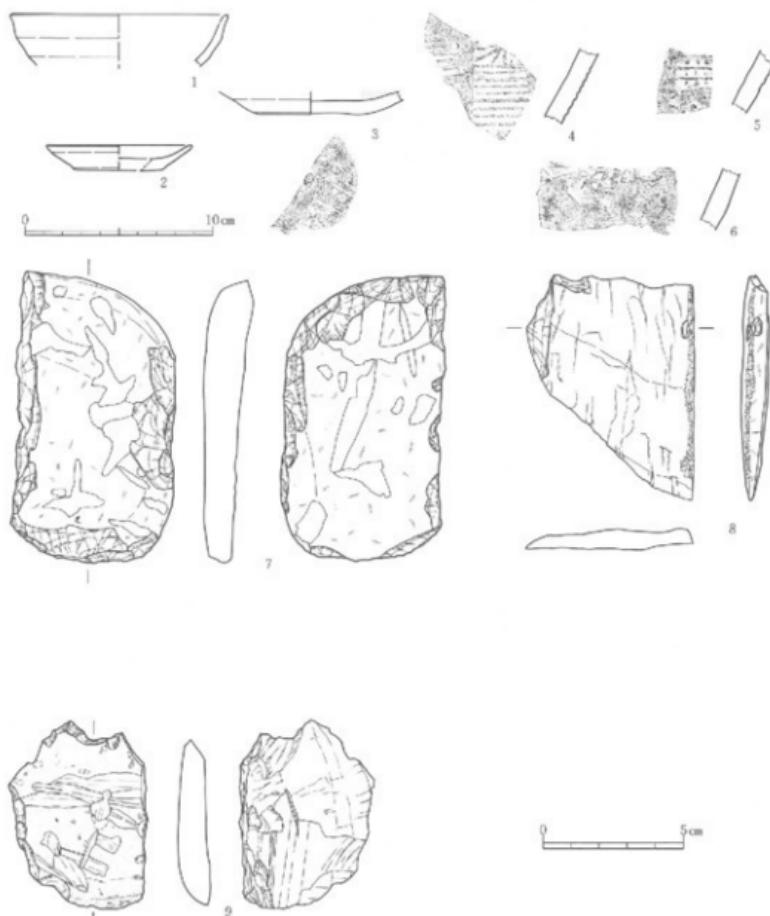
第20図 SX 2 性格不明遺構平面図・断面図

4. 第III層出土遺物

第III層は第III a 層と第III b 層とに細分されるが、層中出土遺物については細分せずに第III層として取り上げた。

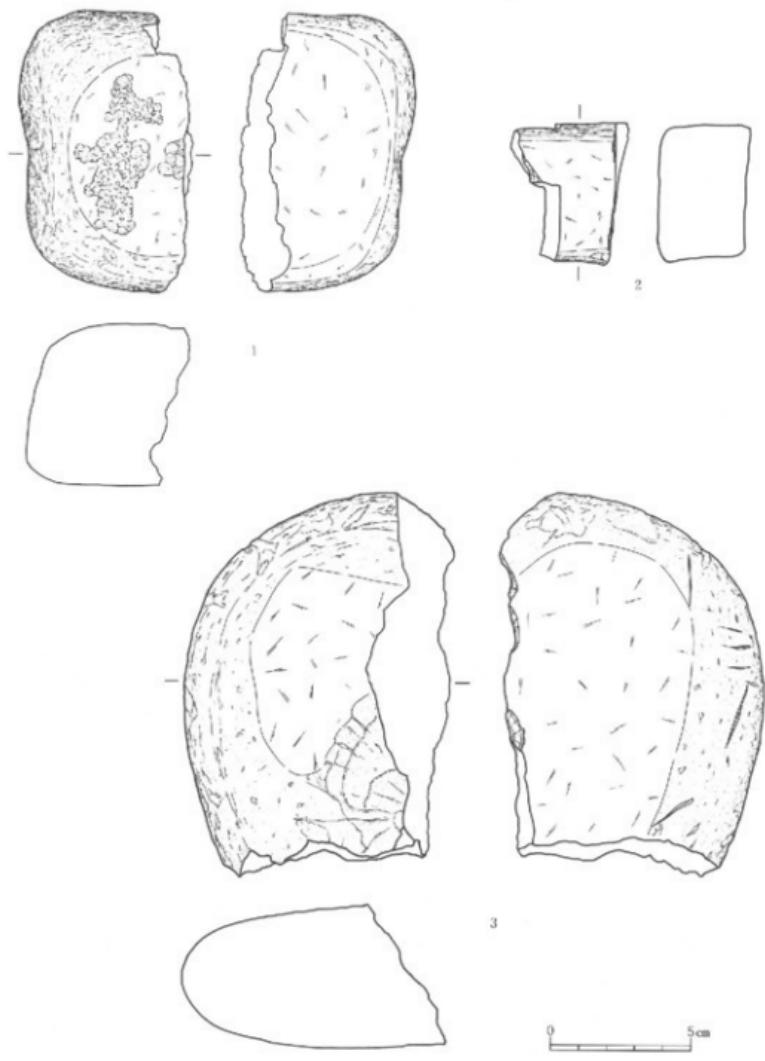
第III層からは土師器坏・高台付坏片・甕片・須恵器坏片・平瓦・丸瓦片・陶器片・磁器片・古銭・鉄釘・鉄製品・鉄滓・剝片・石器・砥石などが出土している。

第21図 1は赤焼土器坏、2は小皿、3は内面黒色処理を施した坏である。4～6は押印のみられる中世陶器片であり、すべて常滑産の甕である。7は磁石である。一部破損しているが表



番号	種別	画形	登録番号	外面調査			内面調査			法 焦(cm)	残存	写真図版
				口縁部	全体	底部	口縁部	全体	底部			
1	赤焼土器	壺	D-1	ロクロ	ロクロ	—	ロクロ	ロクロ	ロクロ	(2.8) 11.6	—	39-8
2	赤焼土器	小皿	D-2	ロクロ	ロクロ	回転目切り	ロクロ	ロクロ	ロクロ	1.4 7.8 4.6	1/5	39-7
3	土師器	壺	D-3	—	—	回転目切り	—	—	ヘラミガキ	(1.3) —	5.8	38-1,39-9
4	陶器	壺	I-5	—	押印あり	—	—	ナデ	—	タケ ミコ 厚3	—	41-6
5	陶器	壺	I-6	—	押印あり	—	—	ナデ	—	3.1 2.8 1.0	—	41-9
6	陶器	壺	I-9	—	押印あり	—	—	ナデ	—	3.3 7.5 1.0	—	41-10
番号	種別	登録番号	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重 量(g)	石 材	写真図版	機 号			
7	砾 石	K-1	101.4	56.1	14.5	143.0	砂 岩			42-8		
8	砾 石	K-2	79.5	59.1	8.2	40.8	頁 岩			42-9		
9	砾	K-3	67.5	49.0	12.9	28.1	白英安山岩質凝灰岩			42-10		

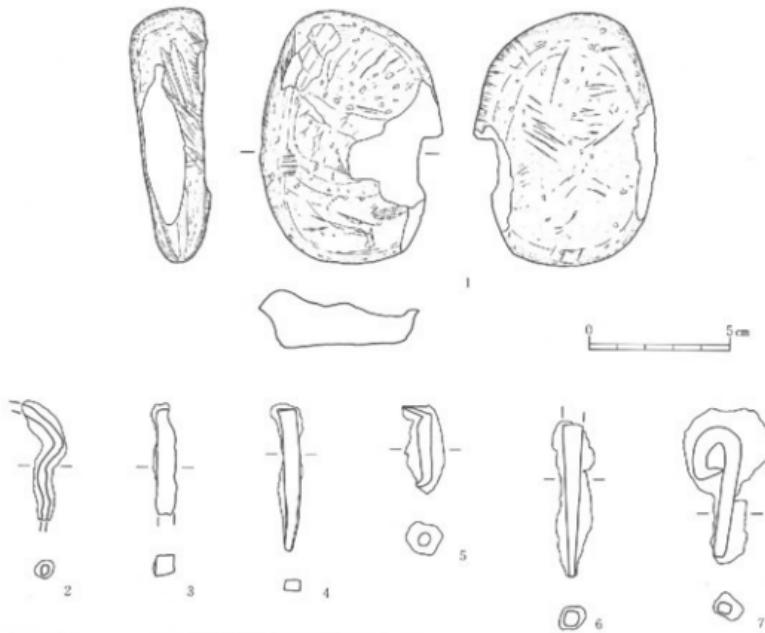
第21図 第III層出土遺物(1)



第22図 第Ⅲ層出土遺物（2）

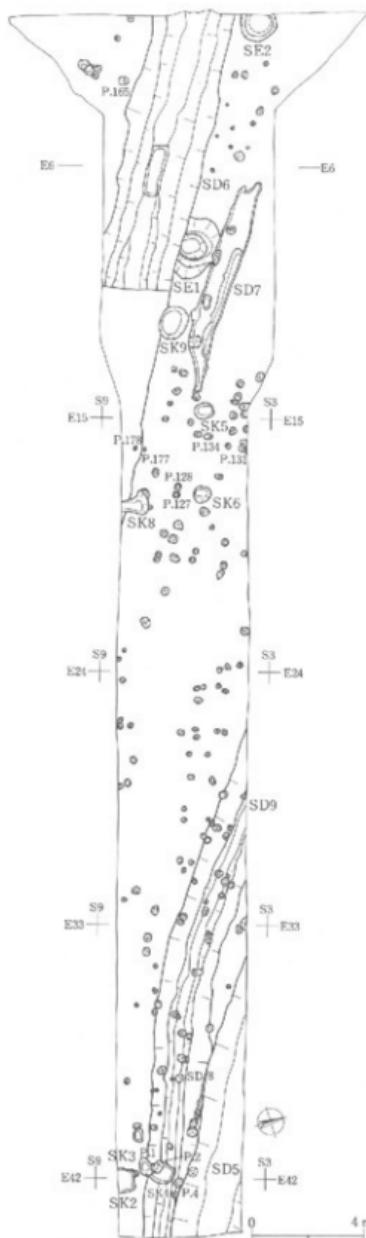
番号	種別	登錄番号	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石材	写真回数	備考
1	砸石器	K-4	98.0	51.3	58.6	564.9	輝石安山岩	42-11	磨痕、敲打痕
2	砸石器	K-7	49.1	40.5	30.7	74.2	砂岩	42-13	磨痕
3	砸石器	K-6	129.5	86.6	52.2	1002.3	安山岩	43-3	磨痕、敲打痕

裏両面とも使用によって磨滅している。石材は砂岩である。8は頁岩の扁平な礫であるが側面に磨痕と敲打痕が認められる。9には金属によるものと思われる無数のキズが表裏両面に残されている。石材は石英安山岩質凝灰岩である。第22図1は破損しているが表裏両面に使用による磨滅痕が残されている。一部に敲打痕も認められる。仙台付近では一般的にみられる石材である輝石安山岩が用いられている。2も破損しており1面に使用による磨滅痕がこされている。石材は砂岩である。3も破損している。表裏両面に使用による磨滅痕が残され側縁部にはところどころに線状のキズ（擦痕）が認められる。石材は安山岩である。第23図1には表裏両面および側面に擦痕が認められる。刃こぼれを消したり、あるいは研ぎすぎた刃先をつぶしたりした結果によるものであろうか。3・4・6は鉄釘である。4がもっとも残存状況が良好で頭部から尖端部分まで残されている。3・6はともに一部を欠損している。2・5・7は鉄製



第23図 第Ⅲ層出土遺物（3）

番号	種別	登錄番号	最大長（mm）	最大幅（mm）	最大厚（mm）	重量（g）	石材	写真説明	備考
1	理	K-5	89.4	63.9	25.6	133.2	石英安山岩	42-12 摩耗あり	
2	鉄製品	N-3	42.2	9.4	8.3	4.0		写真説明	
3	鉄釘	N-5	39.8	7.8	8.2	4.3		45-6	
4	鉄釘	N-6	52.4	10.8	7.1	5.4		45-7	
5	鉄製品	N-7	30.6	13.3	12.4	5.6		45-8	
6	鉄釘	N-8	55.5	14.4	11.1	10.8		45-9	
7	鉄製品	N-9	55.0	30.0	20.3	32.2		45-10	



第24図 第IV層上面遺構配置図

品であるが用途は不明である。

写真41-5は常滑産の鉢の底部である(13~14世紀頃)。7・8はともに常滑産山茶碗窯系の鉢口縁部である。13世紀前半以前と思われる。11は中国産の白磁の合子と考えられる。13世紀代であろう。12は中国産(同安窯系)の青磁碗である。12~13世紀頃のものと思われ漆による接着痕が認められる。写真45-5は古鏡であるが文字の判読はできなかった。

以上のように第III層出土遺物には古代から中世にかけての遺物が含まれている。しかし、近世まで下る遺物は1点も出土していないことから、第III層は中世の層と考えられる。出土遺物には中世前半のものが多い。

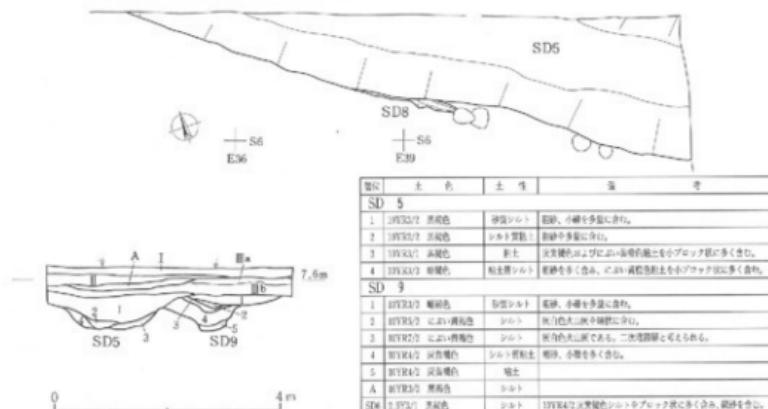
5. 第IV層上面検出遺構

第IV層上面では溝跡4条、井戸跡2基、土坑7基、ピット167が検出されている。

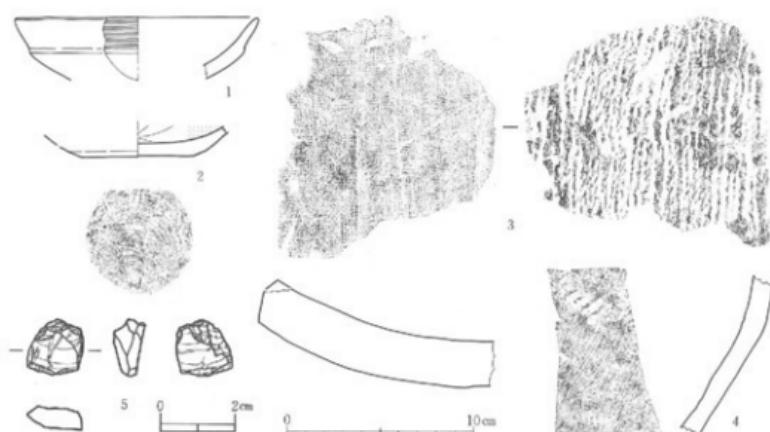
S D 5 溝跡 調査区北東端で検出された溝跡である。上端幅260cm以上、下端幅102~126cm、深さ49~60cmで、底面はほぼ平坦であるが西から東へ向かって徐々に低下している。断面形はやや扁平な逆台形を呈する。方向はE-28°-Sである。検出長は10.4mであるが、さらに東西へ続いていると考えられる。堆積土は上層が黒褐色の砂質シルト、下層が暗褐色の粘土である。堆積土中より土師器壺・甕片、須恵器片、平瓦片、陶器片、剝片などが出土している。第26図1は土師器壺である。古墳時代後期栗原式期に属すると考えられる。2は内面黒色処理を施された土師器壺である。底部は回転糸切り無調整である。3は平瓦である。凹面には布目窓、凸

面には縦方向の縫合がみられる。4は源美産の壺の肩部であり押印が観察される。5は剝片である。石材は玉髓を用いている。

SD 8溝跡、SD 9溝跡を切っている。



第25図 SD 5、SD 8溝跡平面図・調査区東壁断面図



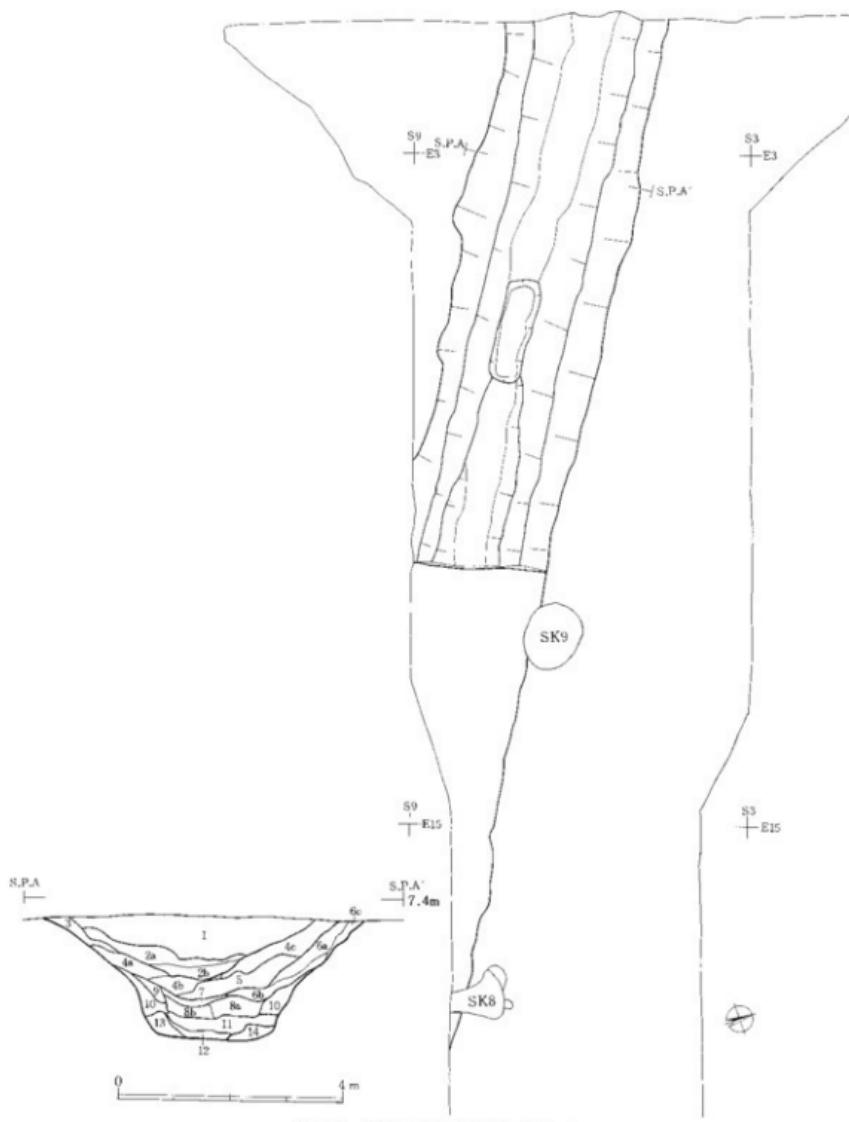
番号	種別	形状	登録番号	外観			内部			調査			法基(cm)	残存	写真図版
				上縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器種	口径	底径			
1	土器部	环	C-2	ココナデヘラケヅリ	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	—	(3.4)	13.0	—	1/8	39-3	
2	土器部	环	D-16	—	クロコ	回転赤切り	—	—	—	ヘラミガキ	(1.6)	—	5.7	49-2	
3	瓦	平瓦	G-1	凸面	溝目	タタキ	—	—	—	タテ	3コ	厚さ	—	40-7	
4	陶器	壺	I-12	—	ヘラナデ	—	—	—	—	—	11.5	12.8	2.6	41-14	
5	剥片	K-10	—	14.6	13.9	6.9	—	—	—	石材	写真図版	機考	43-1		

第26図 SD 5溝跡出土遺物

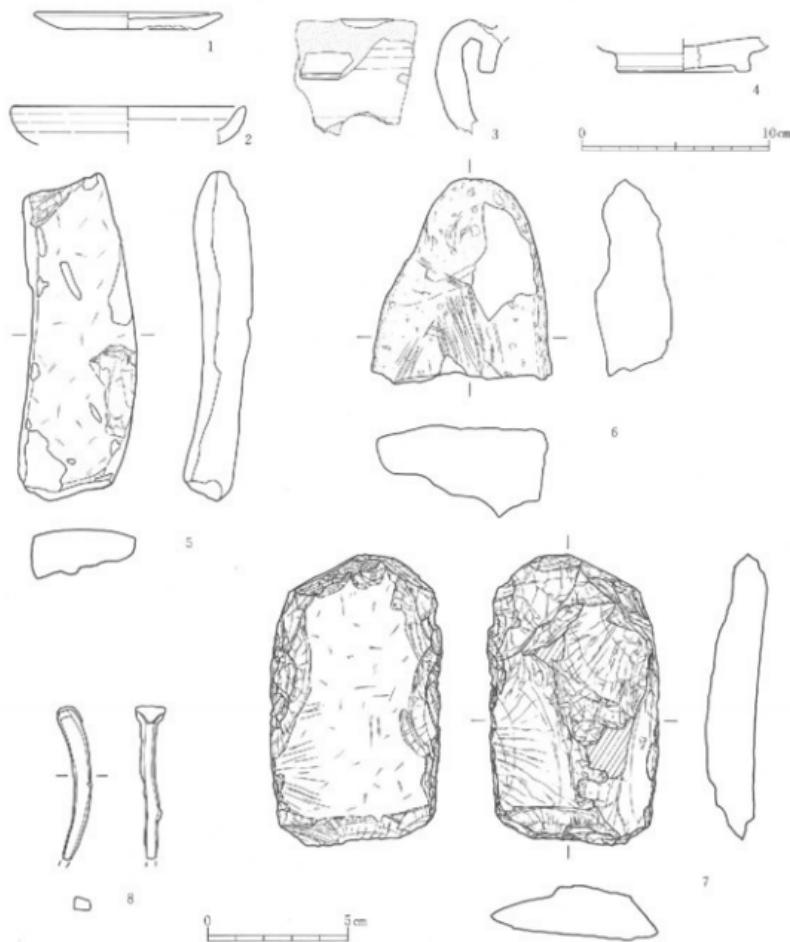
S D 6 溝跡 調査区南西部で検出された溝跡である。上端幅260~319cm、下端幅59~80cm、深さ101~124cmで、底面はほぼ平坦であるが、わずかに西から東へ向かって低下している。今回検出した底面のほぼ中央部に長さ約185cm、幅約60cm、深さ5~10cmの隅丸長方形状の落ち込みがある。溝跡の断面形はやや扁平な逆台形を呈する。方向はE-31°-Sである。検出長は17.8mであるが、さらに東西へ続いていると考えられる。堆積土は黒褐色・暗褐色・オリーブ黒色の粘土質シルト・砂質シルトなどである。堆積土中より土師器坏・小皿・壺片・須恵器坏片・瓦片・陶器片・磁器片・石器・古錢・鉄釘・鉄製品・鉄滓などが出土している。第28図1はカワラケ小皿である。2はロクロ使用の赤焼土器？坏である。口縁部をわずかに残している。3は常滑産の甕の口縁部である。14世紀代であろう。4は龍泉窯系の青磁碗の底部である。13世紀のものと考えられる。5は砥石である。石材は珪化木であり1面にのみ磨痕が認められる。6は研ぎすぎた刃をつぶしたり、刃こぼれを消した結果によるものと思われる線状のキズ（擦痕）が認められる砾である。石材は石英安山岩である。7は表裏両面が打撃によって整形されしており、整形後、砥石として使用したためか1面に顕著な磨面が認められる。石材は北上山地産と考えられる粘板岩を使用している。8は鉄釘である。尖端部を一部欠損するものの、それ以外は残存している。頭部は折り返されている。写真42-1は12世紀ないし13世紀と考えられる青白磁である。瓶あるいは水注の耳か突起と思われる。窓は不明である。2は中国産の白磁皿と思われる。13世紀あるいはそれ以前のものであろう。3是中国産の青磁皿である。13世紀代と考えられる。5是在地の陶器である。13世紀中頃あるいはそれ以前のものと思われる鉢の

SD6溝跡 土層記注表

番号	土色	土性	参考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR6/4に高い濃褐色シルトを小ブロック状に少量含む。 壁下部に薄透けに少量含む。
2a	10YR2/1 黒褐色	粘土質シルト	10YR2/1濃褐色シルトを微粒状に全般的に含む。壁下部に薄透け状態が認められる。壁全体に少量含む。
2b	10YR2/1 黒色	粘土質シルト	10YR6/4に高い濃褐色シルトを粒状に少量含む。壁を部分的に少量含む。
3	10YR3/1 に低い黄褐色	シルト	10YR2/1濃褐色シルトを小ブロック状に多量に含む。壁を全面的にわずかに含む。
4a	2.5Y2/1 黒褐色	粘土	10YR6/4に高い濃褐色シルトを粒状にわずかに含む。厚化象を全体的に多量に含む。壁を部分的にわずかに含む。
4b	10YR3/1 黑褐色	粘土	厚化象を厚段位に少量含む。壁を部分的にわずかに含む。
4c	10YR2/2 黑褐色	粘土質シルト	10YR6/4に高い濃褐色シルトを表面に厚段位に少量含む。厚化象を全体的に厚段位に少量含む。壁を全体的に少量含む。
5	7.5YH2/1 黒	粘土質シルト	10YR6/4に高い濃褐色シルトを全般に小ブロック状に多量に含む。7.5YH2/3濃褐色シルトを表面に起因的に多量に含む。壁を厚段位に少量含む。壁を部分的に少量含む。
6a	10YR2/2 黑褐色	粘土質シルト	10YR6/4に高い濃褐色シルトを形状に少量含む。壁を全般に少量含む。
6b	10YR2/1 黑褐色	砂質シルト	10YR6/4に高い濃褐色シルトを小ブロック状に含む。壁を上面に少量含む。
6c	10YR2/2 黑褐色	シルト質粘土	10YR6/4に高い濃褐色シルトを小ブロック状に少量含む。壁を全般に少量に含む。
7	10YR1/2 黑褐色	粘土	厚化象を少量含む。
8a	2.5Y2/2 黑褐色	砂質シルト	厚化象を全体的に多量含む。
8b	2.5YV1/1 線オリーブ灰	粘土	厚化象を全体的に少量含む。
9	10Y3/2 黑褐色	砂質シルト	壁を少量含む。
10	10YR2/2 黑褐色	砂質シルト	厚化象を全体的に少量含む。壁を部分的にわずかに含む。
11	10Y3/1 オリーブ灰	砂質シルト	10Y3/1濃褐色シルトを少量含む。
12	5 Y3/1 オリーブ灰	粘土	
13	2.5Y3/1 オリーブ灰	砂質シルト	厚化象を少量含む。
14	7.5GV1/1 細砂灰	砂質シルト	



第27図 SD 6 溝跡平面図・断面図



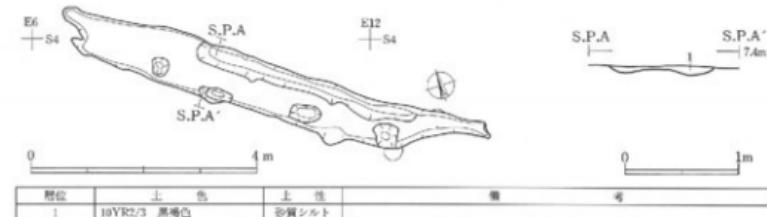
第28図 SD 6溝跡出土遺物

番号	種別	形態	登録番号	外面観察				内部観察				法算(cm)			現存	写真回数
				上縁部	体部	下縁部	口縁部	体部	底部	器溝	口徑	底径				
1	カワラケ	皿	D-17	ロクロ	ロクロ	不規	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	0.9	10.0	6.9	1/5	40-3	
2	透燃土器?	环	D-18	ロクロ	ロクロ	—	ロクロ	ロクロ	—	(2.6)	12.4	—	1/6	40-4		
3	陶器	甌	I-13	ナデ	ナデ	—	ナデ	ナデ	—	—	—	—	—	42-4		
4	青玉	刀	J-8	—	—	—	—	—	—	(1.8)	7.2	—	—	42-6		
番号	種別	登録番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	底風(度)	石材	写真回数	参考							
5	靴石	K-11	114.6	38.9	21.0	99.8	珊瑚木	43-4								
6	鍬	K-12	77.2	63.1	35.9	120.2	石灰安山岩	43-6	鉢板あり							
7	砥石	K-13	102.7	59.8	19.1	162.7	粘板岩	43-7								
8	鉄刀	N-11	54.5	11.1	8.2	4.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

底部である。6は13世紀代の龍泉窯系の青磁碗である。7も同じく龍泉窯系の青磁割花文碗である。12世紀ないしは13世紀代であろう。写真45-11は古錢である。文字の判読はできなかつた。

S E 1 井戸跡を切っており、S K 8 土坑・SK 9 土坑に切られている。

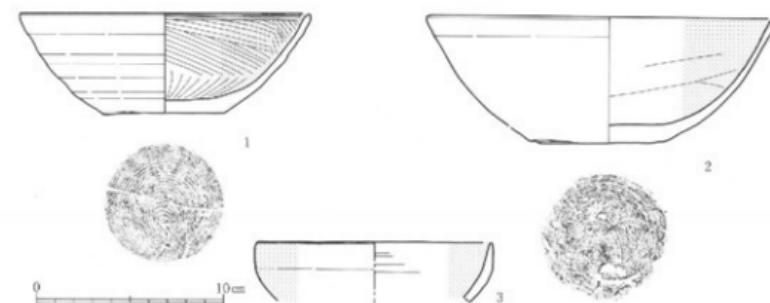
S D 7 溝跡 調査区北西部で検出された溝跡である。長さ7.9m、上端幅80~106cm、下端幅64~90cm、深さ2~7cmで、底面は凹凸が著しい。断面形は大きく開いたU字形を呈する。方向はE-36°-Sである。堆積土は黒褐色の砂質シルトである。堆積土中より土師器坏片、陶器片がわずかに出土している。



第29図 S D 7 溝跡平面図・断面図

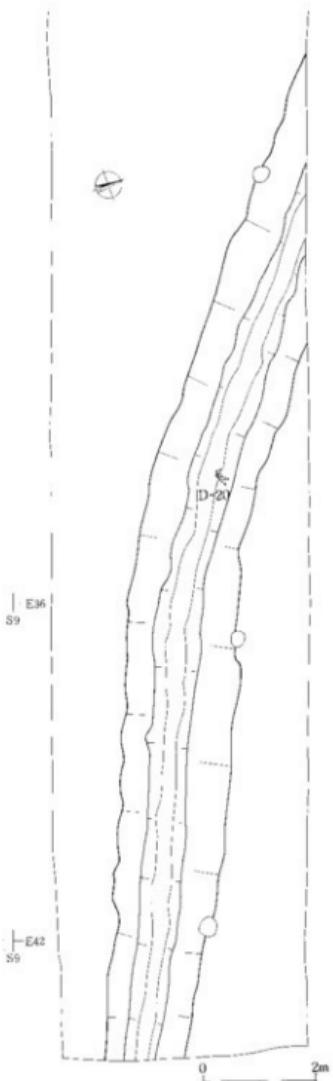
S D 8 溝跡 調査区北東部で検出された溝跡である。上端幅10~17cm、下端幅4~11cm、深さ約3cmで、底面はほぼ平坦である。断面形は開いたU字形を呈する。方向はE-31°-Sである。検出長は2.3mであるが、他の遺構に切られ、わずかに残存しているのみである。堆積土は灰黄褐色シルトのブロックを多く含む黒褐色シルトである。遺物は出土していない。

S D 5 溝跡・ピット13に切られている。



第30図 S D 9 溝跡出土遺物

番号	種別	岩影	登録番号	外		内		法 律 (cm)	口徑 底径	残存 写真回数
				上面	底面	底部	側面部			
1	土師盤	环	D-20	クロコ	ロクロ	圓弧形切りへラミガキ	へラミガキへラミガキ	5.3	15.4 6.4	3/4 38-2
2	土師盤	环	D-21	ロクロ	ロクロ	圓弧形切りへラミガキ	へラミガキへラミガキ	6.8	18.4 6.6	1/3 38-3
3	土師盤	环	C-5	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	(3.2)	12.4	39-4

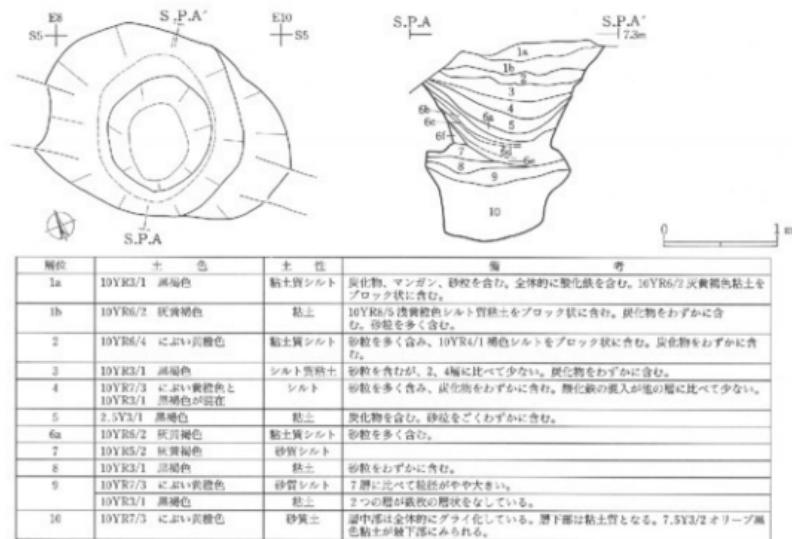


第31図 SD 9 溝跡平面図

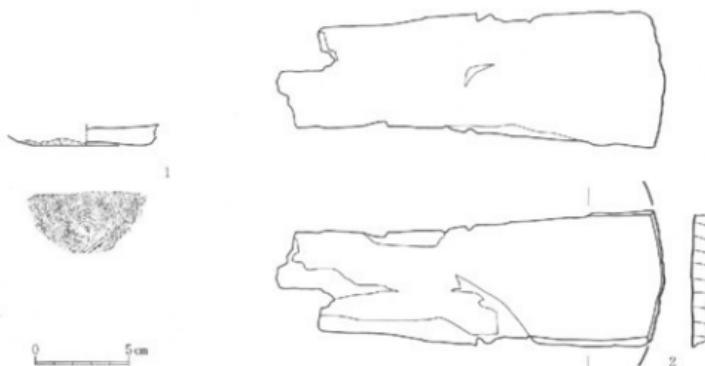
SD 9 溝跡 調査区北東部で検出された溝跡である。上端幅140~206cm、下端幅20~40cm、深さ58~69cmで、底面はほぼ平坦である。断面形は逆台形を呈している。壁面の立ち上がりは急激であるが、中位より上部はゆるやかな傾斜になっている。SD 9 溝跡はE 36付近で湾曲しており、方向はE 36より東ではE-22°-S、E 36より西ではE-39°-Sである。検出長は18.3mであるが、さらに東西へ続いていると考えられる。堆積土は上部が暗褐色・にぶい黄褐色の砂質シルト、下部が灰黄褐色の粘土である。堆積土中位のにぶい黄褐色シルトには灰白色火山灰がブロック状にみられる。灰白色火山灰よりも上位の堆積土中からは土師器坏・甕片が出土しており、下位からは土師器坏・皿・壺片・須恵器坏片・瓦片などが出土している。第30図1は土師器坏で、内面はヘラミガキの後、黒色処理が施されており、外面上にはロクロ痕跡が認められる。底部は回転糸切り無調整である。2も土師器坏で、内面はヘラミガキの後、黒色処理が施されている。外面上は摩滅しているがロクロ痕跡が確認できる。底部は回転糸切り無調整である。1・2ともに灰白色火山灰をブロック状に含む層よりも下位から出土している。3は灰白色火山灰より上位から出土した内外面とともに黒色の非ロクロ土師器坏である。口縁部から体部にかけての破片で、口縁部および内面はヘラミガキ調整、体部外面上はヘラケズリ調整がなされている。

SD 5 溝跡・SD 8 溝跡・SK 3 土坑・SK 4 土坑および多数のピットに切られており、さらに堆積土中に灰白色火山灰を含むことから、第IV層検出遺構のなかではもっとも古い遺構と考えられる。

SE 1 井戸跡 調査区西側中央部で検出された井戸跡である。短軸163cm、長軸231cmの不整椭円形の



第32図 S.E.1 井戸跡平面図・断面図



番号	種別	图形	層位	登録番号	外 壁 調 整			内 壁 調 整			法 直(cm)	残存	写真回数
					口縁部	体 部	底 部	口縁部	体 部	底 部			
1	須恵器	环	3層	E-5	—	下端 手持ち	手取	—	—	ロクロ (1.1)	6.2	40-6	
2	木製品	6b層	L-1		206.3	72.3	9.6	スギ	狂目	45-1		曲物もしくは桶の底板か蓋板	

第33図 S.E.1 井戸跡出土遺物

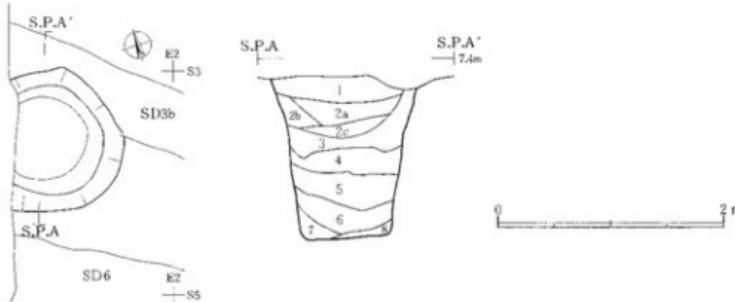
素掘りの井戸跡で、深さは179cmである。壁は徐々にすぼまり、中位より下は崩落のためオーバーハング状になっている。底面はゆるやかに窪んでいる。堆積土は黒褐色・灰黄褐色・ぶい黄橙色の粘土・粘土質シルト・砂などであるが、砂層は下部に多く見られる。堆積土中より土管器片、須恵器片、木製品、焼けた礫などが出土している。第33図1は須恵器片の底部である。回転糸切りによる底部切り離しの後、体部下端を手持ちヘラケズリしている。2は柾目取りの木製品で、曲物や桶などの底板あるいは蓋板の破片と考えられる。樹種はスギである。

S D 3 b溝跡・S D 6溝跡・S D 7溝跡に切られている。

堆積土の水洗選別を行なった結果、大麦や米粒などの穀類が得られた。詳細については東北大学農学部星川清親氏、庄司駒男氏による鑑定結果（第VII章2）を参照されたい。

S E 2井戸跡 調査区西壁際で検出された井戸跡である。直径約125cmの不整円形と思われる素掘りの井戸跡で、深さは145cmである。壁は垂直気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、直径約75cmの不整円形を呈する。堆積土は上層がオリーブ褐色・暗灰黄色のシルト質砂、中層が黒褐色・暗緑灰色のシルト質粘土など、下層が黄褐色の粗砂とオリーブ灰色の粘土である。堆積土の中層以上にはさまざまな土質の大小のブロックが多量に認められ、人為的な堆積と考えられる。遺物は出土していない。

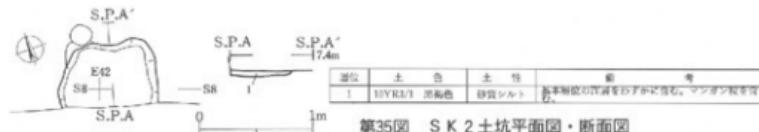
S D 3 b溝跡に切られている。



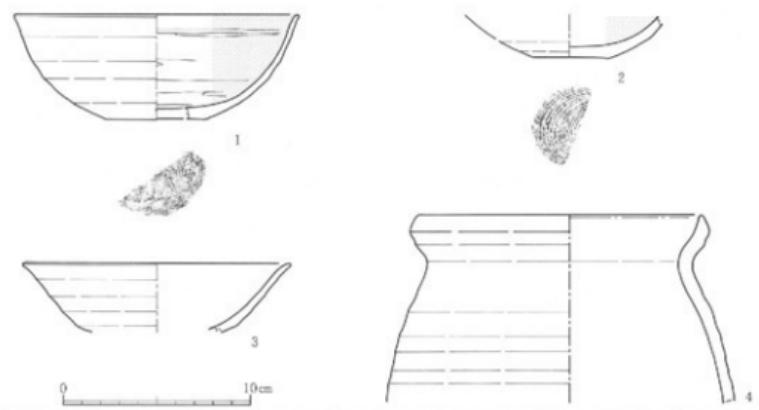
層位	土色	土性	備考
1	2.5Y4/4 オリーブ褐色	シルト質砂	2.5Y3/6 黄褐色砂をブロック状に含む。 基本層位のIV層からV層をブロック状に全体的に多く含む。
2a	2.5Y4/2 暗灰褐色	シルト質砂	1層より砂質である。2.5Y3/6 黄褐色砂をブロック状に含むが1層より少ない。
2b	2.5Y4/2 暗緑黄色	シルト質砂	2.5Y3/2 暗緑黄色砂をブロック状に含む。
2c	2.5Y4/2 黒褐色	シルト質砂	2.5Y3/2 黒褐色砂である。
3	2.5Y5/2 暗灰褐色	砂	2.5Y5/4 黄褐色砂および2.5Y5/6 黄褐色砂をブロック状に含む。 基本層位のIV層からV層をブロック状に全体的に多く含む。
4	10YR2/2 黒褐色	シルト質粘土	基本層位のV層からIX層を全体的に小ブロック状にまばらに含む。
5	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	基本層位のV層からIX層までをブロック状に全体的に多く含む。
6	10CY3/1 动搖灰色	シルト質粘土	基本層位のV層からIX層までを小ブロック状に全体的に多量に含む。
7	10YR5/8 黄褐色	粗砂	層の堆積方向にK3/0暗緑色粘土を厚さ2mm~5mmで数枚含む。
8	2.5Y4/1 緩オリーブ灰色	粘土	層上部に基本層位の粗砂からIX層までを小ブロック状に含む。

第34図 S E 2井戸跡平面図・断面図

S K 2 土坑 調査区南東部で検出された土坑である。90cm×60cm以上の規模で、深さは5cmである。調査区南壁際で部分的にしか検出できなかつたため詳細は不明である。堆積土は黒褐色の砂質シルトである。堆積土中より土師器壺・壺片が出土している。第36図1は土師器壺で、内面はヘラミガキの後、黒色処理が施されており、外面にはロクロ痕跡が認められる。底部は回転糸切り無調整である。2も土師器壺である。底部がわずかに残存している。内面はヘラミガキの後、黒色処理が施されており、外面にはロクロ痕跡が確認できる。底部は回転糸切り無調整である。3は赤焼土器壺である。底部は欠損している。内外面ともにロクロ調整されている。4は土師器壺である。口縁部から体部にかけての破片で、内外面ともにロクロ調整されている。



第35図 SK 2 土坑平面図・断面図



番号	種 別	因 形	登録番号	外 面 調 紗		内 面 調 紗			法 無 (cm)	残 存	写 真 図 版		
				1種類	部 庫 部	口縁部	体 部	底 面					
1	土 壺	壺	D-4	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	5.6	15.2	5.2	1/5 38-4
2	土 壺	壺	D-5	—	ロクロ	回転糸切り	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	(2.3)	—	4.1	38-5, 39-10
3	赤焼土	壺	D-6	ロクロ	ロクロ	—	ロクロ	ロクロ	—	(3.7)	14.3	—	39-13
4	土 壺	壺	D-7	ロクロ	ロクロ	—	ロクロ	ロクロ	—	(10.1)	15.0	—	39-12

第36図 SK 2 土坑出土遺物

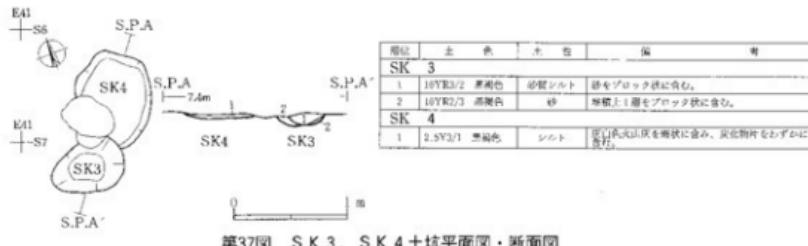
S K 3 土坑 調査区東端中央部で検出された土坑である。短軸47cm、長軸66cmの不整楕円形で、深さは12cmである。断面形は開いたU字形を呈する。底面はゆるやかに窪んでいる。堆積土は黒褐色の砂質シルトと砂である。堆積土中より土師器壺・壺片、須恵器壺片などが出土し

ている。第38図1は土師器壺である。底部を欠損している。内面はヘラミガキ調整され、外面にはロクロ痕跡が認められる。再酸化を受けている。2は須恵器壺である。底部は小さく、回転糸切り無調整である。

SD 9溝跡・SK 4土坑を切り、ピットに切られている。

SK 4土坑 調査区東端中央部で検出された土坑である。短軸70cm、長軸80cm以上の圓丸長方形を尾すると考えられ、深さは4cmと非常に浅い。底面はほぼ平坦である。堆積土は黒褐色のシルトで、わずかに灰白色火山灰を小ブロック状に混入している。堆積土中より土師器壺・壺片、須恵器壺、刀子などが出土している。第38図3は須恵器壺である。底部は回転糸切り無調整である。4は赤焼土器壺である。内外面ともにロクロ調整され、底部は回転糸切り無調整である。底部を上にして刀子にかぶせた状態で出土している。5・6は土師器壺でともに口縁部および体部の大部分を欠損している。内面はヘラミガキ調整の後、黒色処理が施され、外面にはロクロ痕跡が認められる。7は須恵器壺で、底部は回転糸切り無調整である。8は刀子である。保存状態は良好ではないが、欠損部はわずかで切先と茎尻・刃部を除きほぼ残存している。4の赤焼土器壺がかぶせられた状態で出土している。

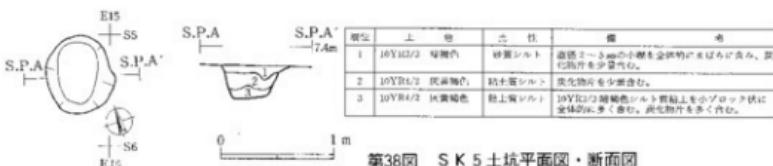
SD 9溝跡を切り、SK 3土坑・ピットに切られている。



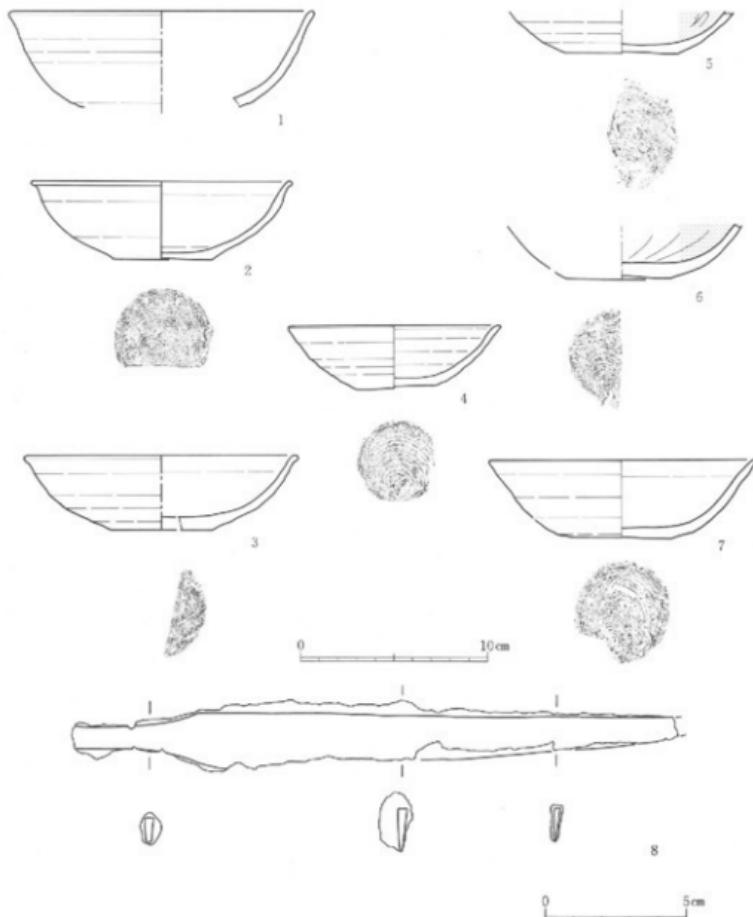
第37図 SK 3、SK 4土坑平面図・断面図

SK 5土坑 調査区中央部やや西よりで検出された土坑である。短軸60cm、長軸70cmの不整橢円形で、深さは31cmである。断面形は逆台形を呈する。底面はゆるやかに窪んでいる。堆積土は上層が暗褐色の砂質シルト、下層が灰黄褐色の粘土質シルトである。遺物は出土していない。

15

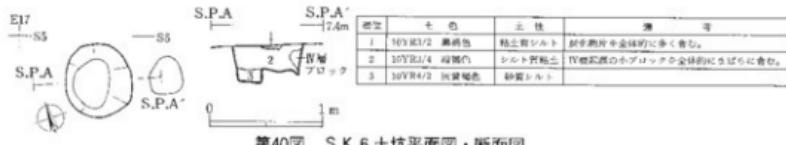


第38図 SK 5土坑平面図・断面図



第39図 SK3、SK4土坑出土遺物

S K 6 土坑 調査区中央部やや西よりで検出された土坑である。短軸59cm、長軸65cmの不整円形で、深さは33cmである。断面形は逆台形を呈する。底面には凹凸が認められる。堆積土は黒褐色・暗褐色・灰黄褐色の粘土質シルト・シルト質粘土・砂質シルトである。堆積土中より土師器環片・須恵器片などが出土している。



第40図 SK 6 土坑平面図・断面図

S K 8 土坑 調査区中央部南壁際で検出された土坑である。86cm×97cm以上の規模で、深さは22cmである。調査区南壁際で部分的にしか検出できなかったため詳細は不明である。堆積土は黄灰色・褐灰色・ぶいい黄褐色の粘土質シルト・砂である。遺物は出土していない。

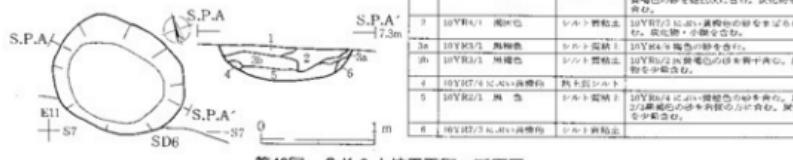
S D 6 溝跡を切っている。



第41図 SK 8 土坑平面図・断面図

S K 9 土坑 調査区西側中央部で検出された土坑である。短軸97cm、長軸120cmの梢円形で、深さは31cmである。断面形はやや開いたU字形を呈する。底面はゆるやかに窪んでいる。堆積土は黒褐色・褐灰色・黒色の粘土質シルト・シルト質粘土である。堆積土中より土師器片・須恵器片などが出土している。

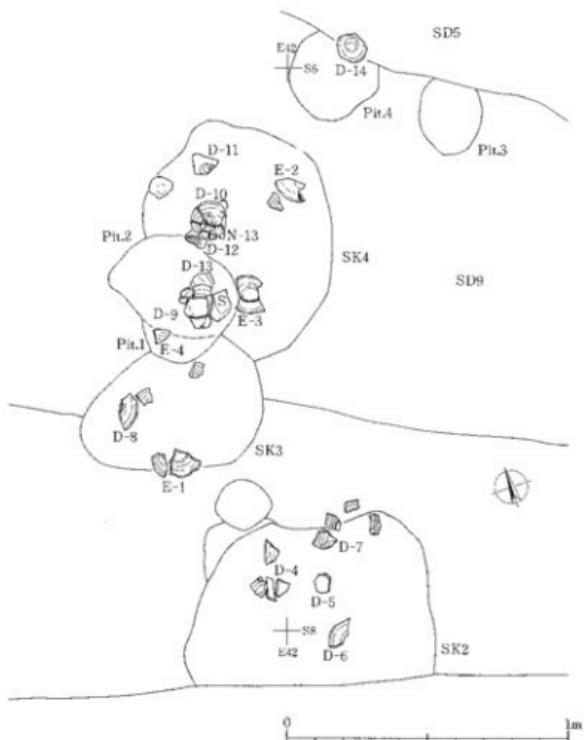
S D 6 溝跡を切っている。



第42図 SK 9 土坑平面図・断面図

ピット出土遺物 第44図から第46図は、ピットから出土した登録遺物である。

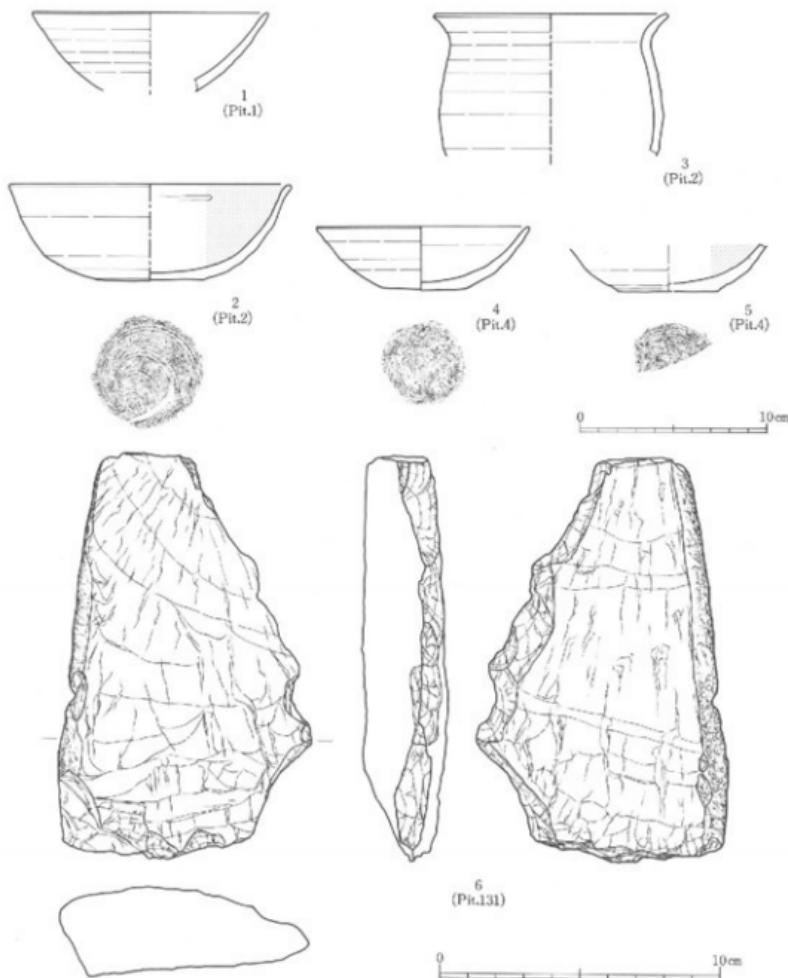
第44図1はピット1から出土した須恵器環の口縁部から体部にかけての破片である。底部は欠損している。2・3はピット2から出土した遺物で、2は土師器環である。内面はヘラミガ



第43図 第IV層遺物出土状況平面図

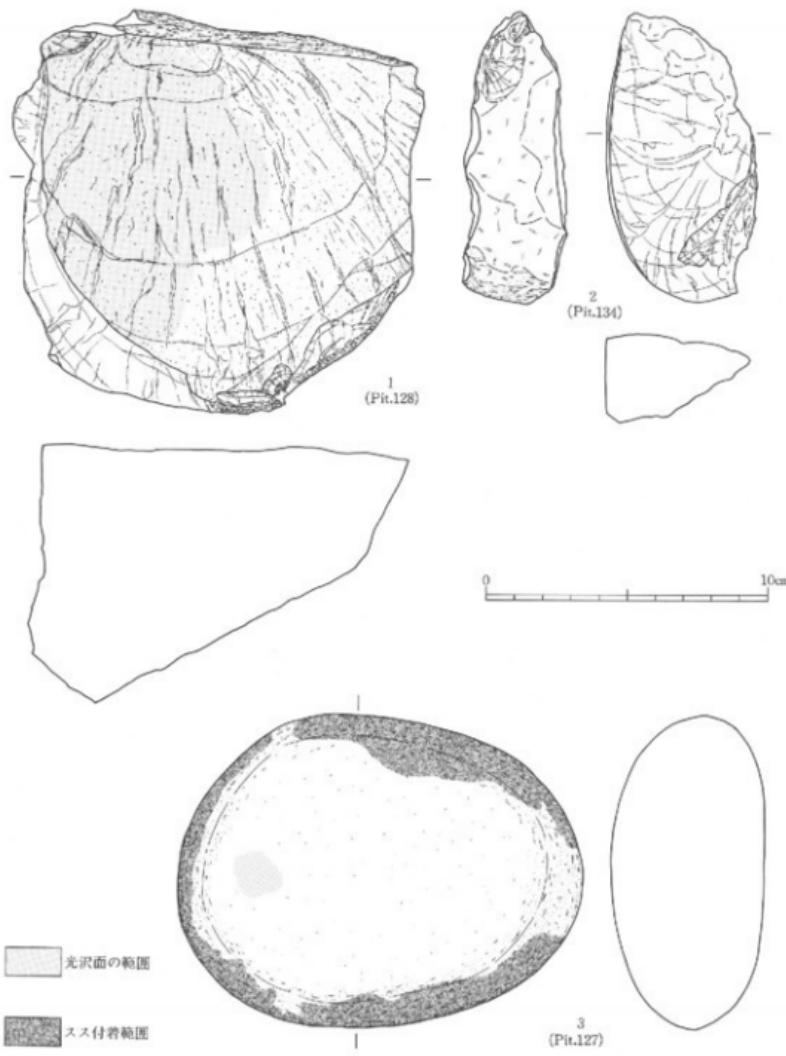
キの後、黒色処理が施されており、外面にはロクロ痕跡が認められる。底部は回転糸切り無調整である。3は土師器壺の口縁部から体部にかけての破片である。内外面ともロクロ調整である。4・5はピット4から出土している。4は赤焼土器壺である。内外面ともにロクロ調整されており、底部は回転糸切り無調整である。5は土師器壺の底部から体部にかけての破片である。内面はヘラミガキ調整の後、黒色処理が施されており、外面にはロクロ痕跡が認められる。底部は回転糸切り無調整である。6はピット131から出土した遺物である。表裏両面が打撃によって整形されており、片側辺には敲打痕が認められる。石材は砂岩を用いており北上山地産かと思われる。

第45図1はピット128より平坦面を上にして出土した遺物である。一部、打撃によって整形されており、平坦面に光沢面が認められる。石材は砂岩である。2はピット134から出土した破損



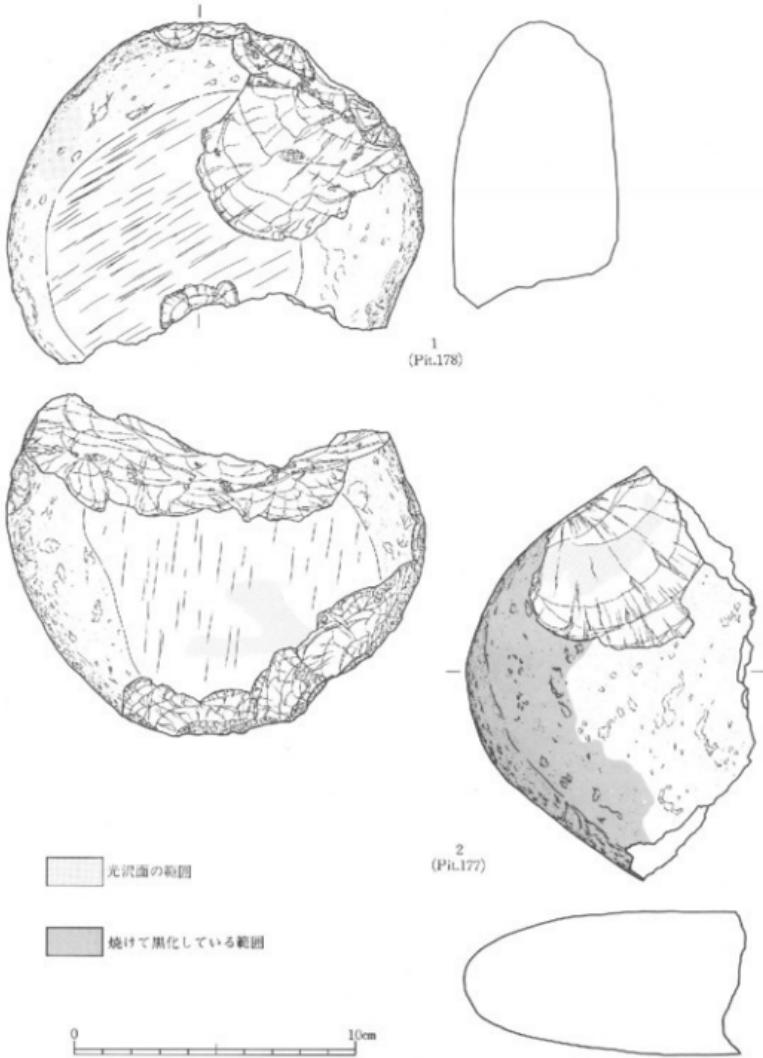
番号	種	別	器形	造	構	登録番号	外 面 調 整		内 面 調 整			法 幅 (cm)	残存	写真図版		
							口縁部	体 部	詰 底 部	口縁部	体 部	底 部				
1	柔	底	盤	環	Pit.1	E - 4	ロクロ	ロクロ	—	ロクロ	ロクロ	—	(4.3) 12.6	—	40-5	
2	土	師	削	环	Pit.2	D - 9	ロクロ	ロクロ	利鉗系切り	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	5.1	15.1 5.9	4/5	38-12
3	土	師	削	要	Pit.2	D - 13	ロクロ	ロクロ	—	ロクロ	ロクロ	—	(7.6) 12.5	—	40-1	
4	赤	熟	土	削	Pit.4	D - 14	ロクロ	ロクロ	利鉗系切り	ロクロ	ロクロ	ロクロ	3.5	11.4 4.5	4/5	38-13
5	土	師	削	环	Pit.4	D - 15	—	ロクロ	利鉗系切り	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	(2.4) —	— 5.3	39-11	
6	石	磨	刃	造	Pit.131	K - 16	143.1	—	87.0	27.3	412.9	砂 研	43-9	—	—	

第44図 Pit出土遺物（1）



第45図 Pit 出土遺物 (2)

番号	種 別	通 横	登録番号	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石 材	写真回数	備 考
1	石 磬	Pit.128	K-15	146.2	144.1	86.4	2386	砂 岩	44-1	光沢面あり
2	磁石?	Pit.134	K-14	101.5	52.7	33.8	248.8	安山岩	43-8	
3	鉛	Pit.127	K-19	143.2	109.1	54.4	1218	平花崗岩	44-4	光沢面あり



番号	種	洞	遺	坑	登録番号	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (kg)	石	材	写真回数	備考
1	縞	石	透	Pit.178	K-18	144.2	134.9	58.9	1269	石英安山岩	41-3	透模、光沢面あり	
2	縞			Pit.177	K-17	146.2	102.6	53.0	919	石英安山岩	44-2	光沢面あり	

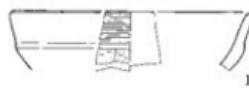
第46図 Pit出土遺物 (3)

している礫である。砾石として使用されたためか、表皮面と破損した側面の一部に磨痕が認められる。石材は安山岩で、直径1cmほどの大きな斜長石の斑晶が特徴的である。3はピット127から出土している。スグが多量に付着しており、1と同様な光沢面が一部に認められる。石材はアブライト（半花崗岩）であり、付近にはあまりみられない石材である。

第46図1はピット178より出土している。打撃によって整形されている。表裏両面に磨痕が認められ、一部に光沢面が認められる。2はピット177より出土しており、打撃によって整形がなされている。火を受けたものと思われ、焼けて黒化している。一部に光沢面が認められる。

第45図1・3、第46図1・2に認められる光沢面については、東北大学埋蔵文化財調査室山田しょう氏に顕微鏡観察を依頼した。詳細については第VII章4を参照されたい。

第47図掲載遺物は、第IV層上面での遺構検出作業中に出土した遺物である。土師器壺の口縁部から体部にかけての破片であり、内面はヘラミガキ調整がなされ、外面は口縁部にヨコナヂ、体部にヘラケズリ調整が施されている。



第47図 第IV層上面出土遺物

番号	種別	番形	登録番号	外面調査			内面調査			法量(cm)			写真回版
				口縁部	休部	底部	口縁部	休部	底部	器高	口径	底径	
1	土師器	壺	C-1	ヨコナヂ ヘラケズリ	—	—	ヘラミガキ ヘラミガキ	—	—	(3.1)	12.3	—	39-2

6. 第VI層上面検出遺構

第IV層上面検出遺構の掘り込み作業を行なっている際に、遺構の壁面に水田土壤の可能性が考えられる層が第IV層よりも下層にあることが確認されたため、部分的に深掘りを実施した(E21~E27のS6以北)。その結果、第Va層の下部で第VI層の大畦畔が確認され、第VI層で水田が造られていることが判明した。

第VI層上面で検出した水田跡は大畦畔と小畦畔によって区画されている。大畦畔の確認面は自然堆積層である第Va層の下部である。小畦畔は第Vb層の下部が確認面となっている。水田跡に伴う水路は検出されていない。

第VI層が調査区全域に分布していることから、水田域は調査区全域および調査区外まで広がるものと考えられるが、今回の調査では時間的制約から部分的な検出にとどめざるを得なかつた。そのためE27以東では小畦畔の一部を確認したのみとなっており、水田面までの検出は行なえなかつた。

第VI層中より土師器の細片が出土している。非クロクロの壺の破片であることが判断できるだけで、詳細は不明である。



第48図 第VI層水田跡平面図

〈畦畔〉 畦畔は水田土壤である第VI層を盛り上げて造られており、規模の大きい畦畔（大畦畔）と、それに較べて規模の小さい畦畔（小畦畔）の2種類がみられる。大畦畔は1条のみ検出され、上端幅68~120cm、下端幅187~216cm、水田面からの高さ9~13cmの規模である。方向はN-33°-Eである。小畦畔は下端幅40~69cmで、50cm前後の規模のものが多い。水田面からの高さは1~4.5cmである。E27以西の畦畔占有率（検出した水田跡の面積に対する畦畔の占める割合）は39.8%である。

〈畦畔の配列〉 N-33°~47°-E方向の畦畔と、これにほぼ直交するN-45°~59°-W方向の畦畔によって構成されている。畦畔の交わり方は基本的には「+」状であるが、小畦畔の大畦畔への取り付き方は「T」状である。

〈水田1区画の形状と規模〉 検出区画はE27以東を含めると18区画になる。しかし、E27以東については確認できた畦畔以外の小畦畔が精査を行えば検出された可能性も考えられるため、E27以東の区画を除外すれば14区画の検出となる。この中で区画全体が明確に検出されたのは2区画だけで（⑧・⑪）、ほかはすべて区画の一部を検出しているのみであるが、区画の形状を推定することは可能である。水田区画は長方形を基調としており、大畦畔に直交する方向が長軸となっている。水田の面積は区画⑧が2.81m²、区画⑪が7.12m²である。

〈水田土壤〉 黄褐色を呈する粘性の強い粘土である。層下面に凹凸が認められることから層厚は一定せず、2~10cmである。下面に鉄分の集積層は認められない。直下層の第VIIa層上

面では第VI層の畦畔に伴う擬似畦畔Bは検出されなかった。

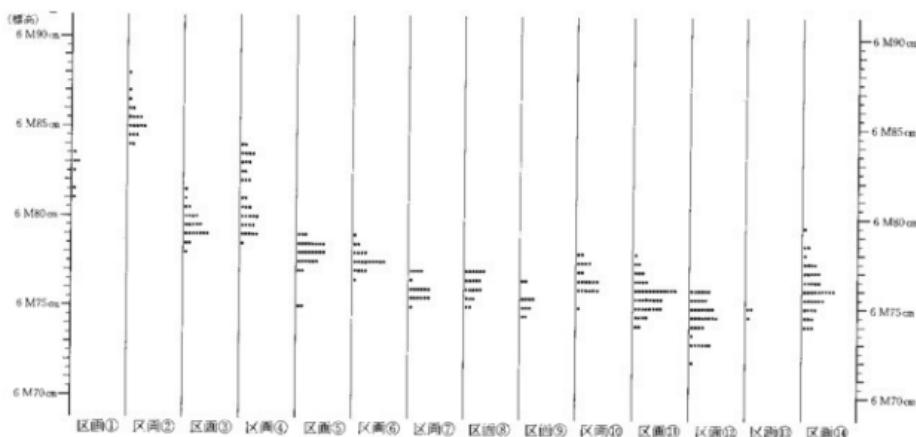
〈水田面の傾斜〉 水田面の標高は6.72~6.88mであり、全体的な傾斜としては北西から南東に向かってごくゆるやかに低下している。1区画内の高低差は0.5~5.5cmで、ほとんどが2~4cmの間である。

〈水口〉 水口は2ヶ所で検出された。1ヶ所は大畦畔に取り付く部分で、区画⑩と区画⑪の間である(下端幅約10cm)。残る1ヶ所は区画⑦と区画⑧を画する畦畔の中央やや東よりの位置である(上端幅約30cm、下端幅約10cm)。いずれも東西方向の畦畔に設けられている。

第VI層で検出された水田跡は、大畦畔の直下で第VIIa層水田跡の大畦畔が検出されたことから第VIIa層水田跡を踏襲しているものと考えられる。

区画	基地	高 瞿	底 瞿	池沼標高値	最高標高値	区画内高低差	平均標高値	第 VI 層 由 て の 高 低 差
①	0.56m以上	1.15m以上	0.36m以下	6 m 83.5cm	6 m 81.9cm	2.5cm	6 m 82.4cm	②-3.0cm, ③+2.9cm
②	1.12m	2.06m以上	2.05m以下	6 m 88.0cm	6 m 84.9cm	4.0cm	6 m 85.4cm	①+3.0cm, ④+4.3cm
③	1.56m以上	2.90m以上	3.29m以下	6 m 81.5cm	6 m 78.0cm	3.5cm	6 m 79.5cm	①-2.3cm, ④-1.6cm, ⑤+1.3cm
④	1.54m	2.42m以上	4.46m以下	6 m 84.0cm	6 m 78.5cm	5.5cm	6 m 81.1cm	②-4.3cm, ③-1.6cm
⑤	1.03m以上	6.61m以上	3.60m以下	6 m 79.0cm	6 m 75.0cm	4.0cm	6 m 77.5cm	①+0.4cm, ⑦-1.9cm
⑥	0.96m以上	3.16m以上	1.96m以下	6 m 79.0cm	6 m 76.5cm	2.5cm	6 m 77.5cm	②-1.9cm, ⑤-0.3cm, ⑧+1.4cm
⑦	1.24m以上	2.18m	1.78m以下	6 m 77.0cm	6 m 75.9cm	2.0cm	6 m 76.9cm	②-1.9cm, ④-0.2cm, ⑨-0.3cm
⑧	1.54m	2.69m	2.81m	6 m 77.0cm	6 m 75.9cm	2.0cm	6 m 76.2cm	⑥-1.4cm, ⑦+0.2cm, ⑨-0.8cm, ⑩+1.6cm
⑨	1.04m以上	1.46m	1.38m以上	6 m 76.5cm	6 m 74.5cm	2.0cm	6 m 72.4cm	⑤-0.8cm, ⑩+0.6cm
⑩	1.55m以上	3.10m以上	2.67m以下	6 m 78.0cm	6 m 75.0cm	3.0cm	6 m 76.7cm	⑪+1.0cm, ⑫-0.5cm
⑪	1.72m	4.59m	7.12m	6 m 72.0cm	6 m 74.0cm	4.0cm	6 m 75.7cm	⑦-0.3cm, ⑧-1.0cm, ⑨+1.1cm, ⑩-0.3cm
⑫	1.96m	4.78m	5.94m以上 幅2.9~0.1m	6 m 76.0cm	6 m 72.9cm	4.0cm	6 m 74.6cm	⑥-1.6cm, ⑩-1.1cm, ⑪-0.2cm, ⑫-1.6cm
⑬	0.20m以上	0.24m以上	0.05m以下	6 m 75.0cm	6 m 74.5cm	0.5cm	6 m 74.5cm	⑨-0.5cm, ⑩+0.2cm
⑭	2.83m	4.47m以上	8.12m以下	6 m 79.5cm	6 m 74.4cm	5.5cm	6 m 76.2cm	⑧-0.5cm, ⑪+0.5cm, ⑫+1.6cm

第2表 第VI層水田跡属性表 (面積の計測にはプラス標準純式プランニーメータを使用。計測値は3回の計測の平均値。)



第49図 第VI層水田跡田面標高測定点

7. 第VII a層上面検出遺構

第VII a層上面の調査は、時間的制約から E15 から E27 までの約50m²の部分でしか実施できなかったが、調査の結果、水田跡であることが確認できた。

〈遺構状況〉 大畦畔が1条検出されたのみである。第VI層で検出された水田跡の大畦畔とほぼ同じ位置にあることから、それに伴う擬似畦畔Bである可能性も考えられたが、方向が若干東にふれているため第VII a層の畦畔と判断した。畦畔の確認面は第VI層の下部である。

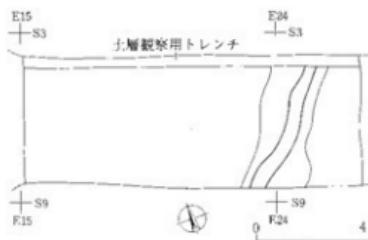
〈畦畔〉 畦畔は耕作土と同一の土壤を盛り上げて造られている。上端幅40~56cm、下端幅164~212cm、水田面からの高さ4~10cmの規模で、方向はN-41°-Eである。

〈水田土壤〉 水田土壤は灰黄褐色を呈する粘性の強い粘土である。下面に顕著な凹凸が認められるため層厚は一定せず、2~14cmである。下面に鉄分の集積層は認められない。

〈水田面の傾斜〉 水田面の標高は6.69~6.74mである。上面の傾斜は北から南へ低下しているが、直上の第VI層に伴う耕作によって削平されているため、当時の状況を示しているものか不明である。

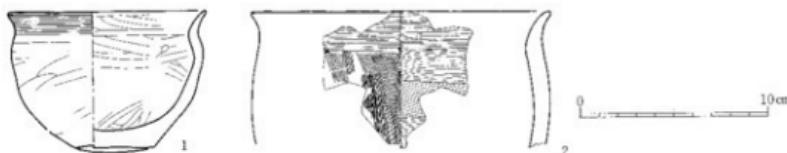
〈水口〉 水口は検出されなかった。

〈出土遺物〉 第VII a層上面から土師器鉢・甕が出土している。第51図1はロクロを使用していない土師器鉢である。口縁部がくびれて外反しており、内側に稜が形成されている。体部上半は内弯している。底部は平底である。内面は口縁部から底部までヘラミガキ調整が施され



第50図 第VII層水田跡平面図

ている。外面は、口縁部に横ナデ、体部にヘラミガキ調整が施されている。2は土師器甕の口縁部から体部にかけての破片である。体部から口縁部にかけてゆるやかに外反している。内面は口縁部がヨコナデ、体部がヘラナデ調整されている。外面は口縁部にヨコナデ、体部にハケメ調整が施されている。底部は欠損しているため不明である。



第51図 第VII層出土遺物

番号	種別	形状	き跡番号	外周調整			内周調整			柱量(cm)	現存写真図版			
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部					
1	土師器	甕	C-3	ヨコナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	7.6 (7.1)	10.4 (16.0)	4.2 —	1/3 —	38~14 —
2	土師器	甕	C-4	ヨコナデ	ハケメ	—	ヨコナデ	ヨコナデ	—	—	—	—	—	39~6

第VII章 自然科学的分析

1. プラント・オパール分析

古環境研究所

1. はじめに

この調査は、プラント・オパール分析を用いて、鴻ノ巣遺跡における耕作跡の検証および探査を試みたものである。以下に調査結果を報告する。

2. 試料

試料は、遺跡の調査担当者によって容量50cm³の採土管を用いて採取され、当研究所に送られてきたものである。第52図に、B-8区北壁地点の土層断面図と試料採取箇所を示す。試料数は計16点である。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）」をもとに、次の手順で行なった。

- (1) 試料土の絶乾 (105°C・24時間), 仮比重測定
- (2) 試料土約1gを秤, 量、ガラスピース添加 (直徑約40μm, 約0.02g)
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- (3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- (4) 超音波による分散 (300W・42kHz・10分間)
- (5) 沈底法による微粒子 (20μm以下) 除去, 乾燥
- (6) 封入剤 (オイキット) 中に分散, プレバラート作成
- (7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行なった。計数は、ガラスピース個数が300以上になるまで行なった。これはほぼプレバラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピース個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピース個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重と各植物の換算計数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾量、単位: 10⁻⁵g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算計数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、タケ亜科はゴキタケの値を用いた。その値は、それぞれ2.94 (種実量は1.03), 6.31, 0.48である (杉山・藤原, 1987)。

4. 分析結果

プラント・オパール分析の結果を第3表、および第53図、第54図に示す。なお、稻作跡の検証および探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族（ススキやチガヤなどが含まれる）、キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な5分類群に設定した。卷末に各分類群の顕微鏡写真を示す。

沿ノ東海岸 B-8 区北壁地点

資料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(粗純量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
I	0	14	1.32	14,000	26.53	0	18,700	900	900
II	14	16	1.25	3,900	7.91	900	6,900	0	900
III a	30	12	1.17	9,300	13.47	800	6,700	0	0
III b	42	12	1.20	7,500	11.12	0	13,100	900	0
IV	54	40	1.17	700	3.30	0	2,800	0	0
V a	94	14	0.87	0	0.00	0	40,800	0	0
V b	108	4	0.81	2,500	0.87	10,600	40,000	0	1,700
VI	112	4	0.88	12,800	4.66	900	18,700	0	1,900
VII a	116	6	0.88	24,200	13.16	7,700	29,100	0	0
VII b	122	4	0.87	7,700	2.76	900	14,500	0	0
VIII a	126	8	0.79	14,300	9.23	8,900	7,100	0	0
VIII b	134	4	0.80	1,700	0.54	800	8,500	800	800
VIII c	138	16	0.92	0	0.00	700	18,300	3,100	700
IX	154	20	0.97	0	0.00	1,000	13,500	0	0
X	174	10	0.99	0	0.00	0	25,300	0	0
XI	184	—	0.97	0	—	0	9,900	0	0

第3表 プラント・オパール分析結果

5. 考察

(1) 稲作の可能性について（第53図参照）

水田跡（稻作跡）の検証や探査を行なう場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1 gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稻作が行なわれていた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稻作が行なわれていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて、稻作の可能性について検討を行なった。

I層～XI層について分析を行なった結果、I層～IV層およびV b層～VIII b層でイネのプラント・オパールが検出された。このうち、I層およびII層は、現水田あるいは比較的新しい時期の水田耕作に由来するものと考えられる。III a, III b, VI, VII a, VII b, VIII aの各層では、密度がいずれも7,500個/g以上と高いことから、これらの層で稻作が行なわれていた可能性は高いと考えられる。特に、VI, VII a, VIII a層では、密度が12,800～24,200個/gと非常に高く、明瞭なピークが認められることから、稻作の可能性はきわめて高いと考えられる。また、V b層では2,600個/gとやや低い値であるが、直上のV a層ではまったく検出されないことから、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくい。したがって、同層で稻作が行なわれていた可能性を考えられる。なお、IV, VIII b層では700～1,700個/gと低い値であることから、稻作が行なわれていた可能性は考えられるものの、上層もしくは他所からの混入である危険性も否定できない。

以上のことから、同地点ではⅣa層の時期に稻作が開始され、Vb層の時期まで継続されたものと考えられる。その後、Va層の時期にはなんらかの原因で水田が放棄されたが、Ⅲb層の時期には再開されて現在に至ったものと推定される。

(2) 稲穀の生産量の推定

稻作が行なわれていた可能性が高いと判断された各層について、そこで生産された稻穀の総量（単位:t/10a）を算出した。また、当時の稻穀の年間生産量を面積10aあたり100kgとし、稻わらがすべて水田内に還元されたと仮定して、各層で稻作が営なされた期間を推定した。これらの結果をまとめて第4表に示す。

層位	稻穀生産量 (t/10a)	耕作期間 (年間)
IIIa	13.5	133
IIIb	11.1	111
VI	4.7	47
VIIa	13.2	132
VIIb	2.8	28
VIIa	9.2	92

第4表 稻穀生産量および耕作期間の推定値

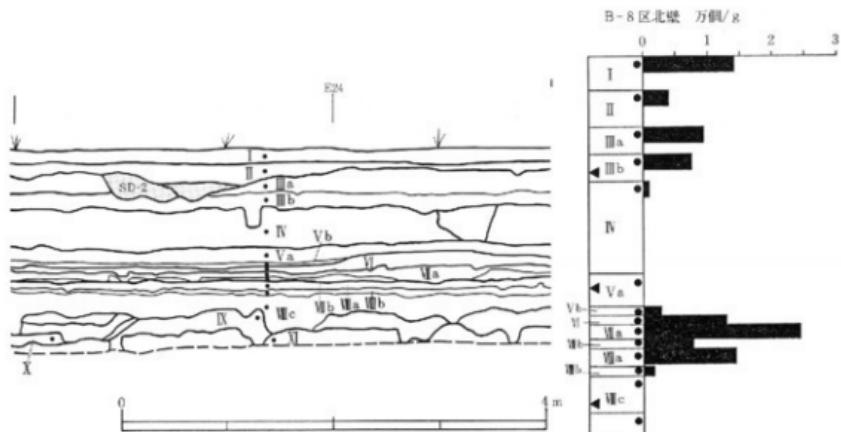
(3) 古環境の推定（第54図参照）

稻作が開始されたと推定されるVIIa層では、イネと共にヨシ属の急激な増加が認められた。このことから、同地点はⅣa層の時期になんらかの原因でヨシ属の繁茂する湿地に移行し、そこを開拓して稻作が開始されたものと推定される。

その後も、VIIa, Vb層ではイネと共にヨシ属が多く見られることから、当時の水田では雜草としてヨシ属が多く生育していたものと推定される。

参考文献

- 杉山真二・藤原宏志。1987。川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析。赤山—古環境編一。川口市遺跡調査会報告、第10集、281-298。
- 藤原宏志。1976。プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法一。考古学と自然科学、9:15-29。
- 藤原宏志。1979。プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)—福岡・板付遺跡（夜白式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ (*O.sativa L.*) 生産総量の推定一。考古学と自然科学、12:29-41。
- 藤原宏志・杉山真二。1984。プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査一。考古学と自然科学、17:73-85。



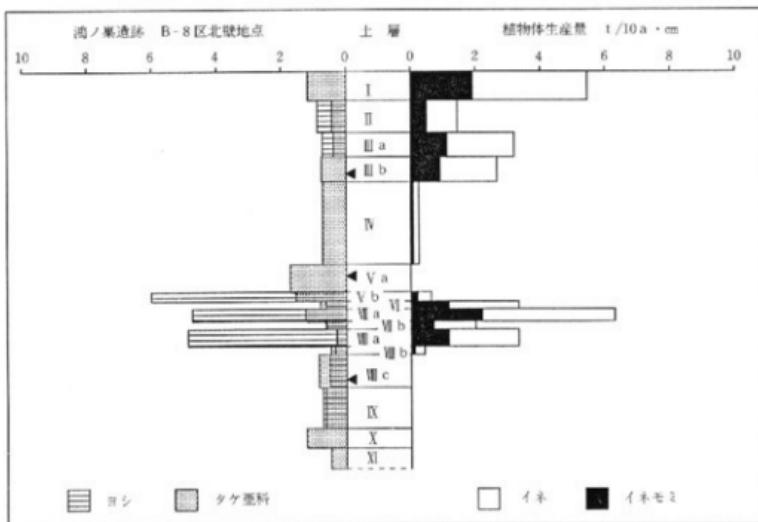
第52図 土層断面図と分析試料の採取箇所



第53図 イネのプランツ・オバールの検出状況

◆印は50cmごとのスケール

●印は分析試料の採取箇所

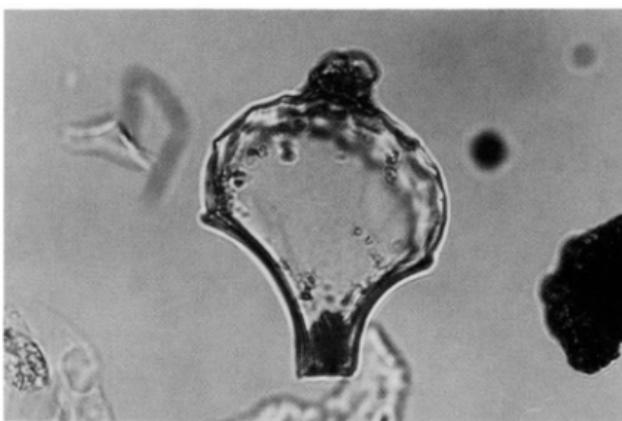


第54図 おもな植物の推定生産量と変遷

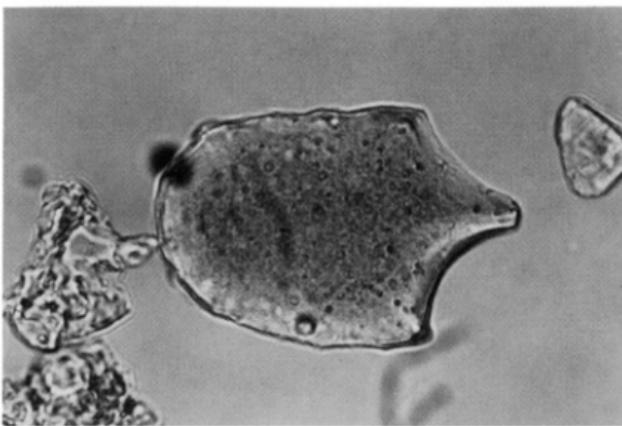
◆印は50cmごとのスケール



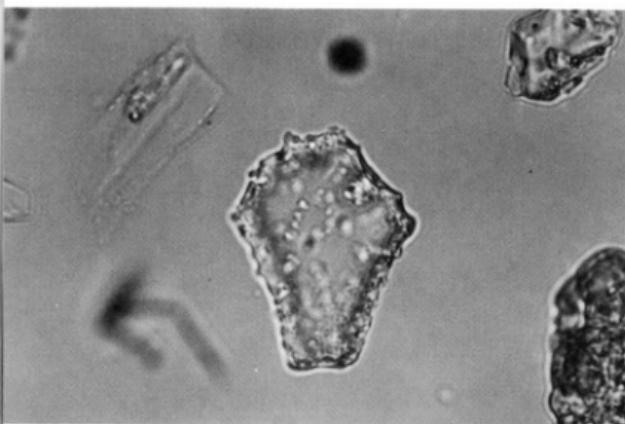
イネ ×400
B-8区 第Ⅳa層



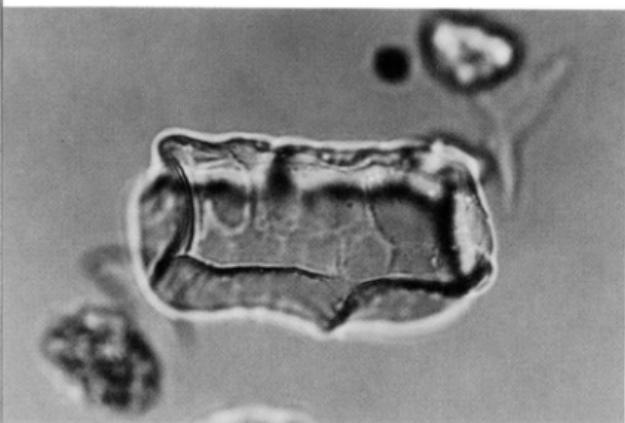
イネ ×400
B-8区 第Ⅳa層



ヨシ属 ×400
B-8区 第Ⅳa層



タケ亜科 ×400
B-8区 第V a層



キビ族(ヒエ属類似) ×400
B-8区 第V b層



海綿骨針 ×400
B-8区 第V b層

2. 種子等炭化物の鑑定結果報告

星川清親・庄司駒男（東北大学農学部）

鴻ノ巣遺跡 (C-135) 第6次調査において、SE1 (井戸跡) に堆積した土層より見出された種子等炭化物についての鑑定を、次のとおり行ったので報告する。

C-135 6次 SE 1

層	調査結果 (数字は例数)	層	鑑定結果 (数字は例数)
1a	米1 (?)、皮麦8。	6b	米2と破片1、皮麦1と破片1、雜草種子2。
1b	オズミギ (度数) 単化粒1、木片3、炭化粒2。	6c	米4のみ。
2	皮麦 (?) 2、破片1、色々の種子破片1 (不明)。	6d	米71、皮麦41、その他の破片2。
3	米3 (1ヶは完全形)、皮麦3、木破片、不明1。	6e	米2 (?)、不明3。
4	皮麦 (?) 1、不明種子2、木片2。	6f	米2、皮麦8、その他2。
5	米4、皮麦11、小明細子1、破片3。	10	米1、皮麦4、その他の3。
6a	皮麦8、破片1。	10下部	米1、皮麦3、不明2。

各層のサンプルの顕微鏡拡大写真を添える。

1a層から10層下部まで (1b層を除き)、大麦 (皮麦) や米粒が検出される。

米粒は3, 5, 6b~6fおよび10の各層に見出される。米粒の粒形は大小、太細、と変異が大きく、品質的に劣った玄米である。

大麦は1a層から認められ、それより下は1b, 6c, 6e以外の全ての層に見出される。粒数的には米よりも多數ある。全て皮麦であり、比較的小型のものである。そしていずれも皮つきのままのものである。

多くの場合、米と皮麦が混在して見出されるのが特徴である。このことから、米と皮麦を混ぜて、いわゆる麦飯として利用していたかとも考えられるが、皮麦の多くが皮つきのままであるところから(麦飯とするときには皮麦は脱穀してから米と混ぜて炊くはずである)、麦飯として利用していたものが、井戸跡内に遺棄されたとは考え難い。むしろ、皮麦や米 (玄米)などを貯蔵しておいた場所で、地面にこぼれたものを土と共に掃除して、井戸跡に捨てたと考え方が妥当であろう。

その他の若干の雑草の種子や、小さい木片が見出されるが、これはサンプルを探る際に、肉眼作業で穀粒に似た形のためにサンプルにとり入れられたものであろう。

C-135 6次 SD 6

採集された標品、1個の種子は、ウメ (長さ20mm, 幅15mm) であろう。写真を添える。

以上

R

B



SE 1 井戸跡 1 a層
R : 米粒 B : 大麦粒

B

M



SE 1 井戸跡 1 b層
M : その他(雑草種子などを含む)

B

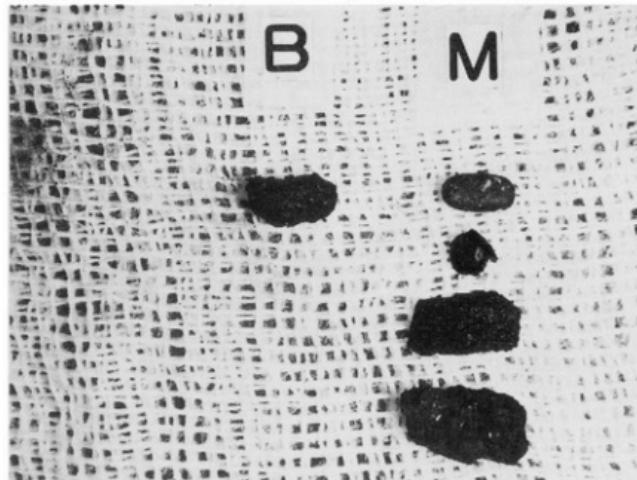
M



SE 1 井戸跡 2層

R B M

SE1井戸跡 3層



SE1井戸跡 4層



SE1井戸跡 5層

B

M

SE 1井戸跡 6 a層

R

B

M

SE 1井戸跡 6 b層

R

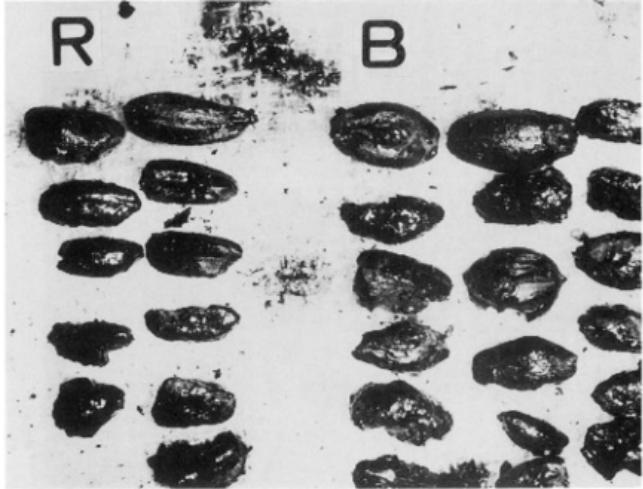


SE 1井戸跡 6 c層

R

B

SE1井戸跡 6d層



M

SE1井戸跡 6e層

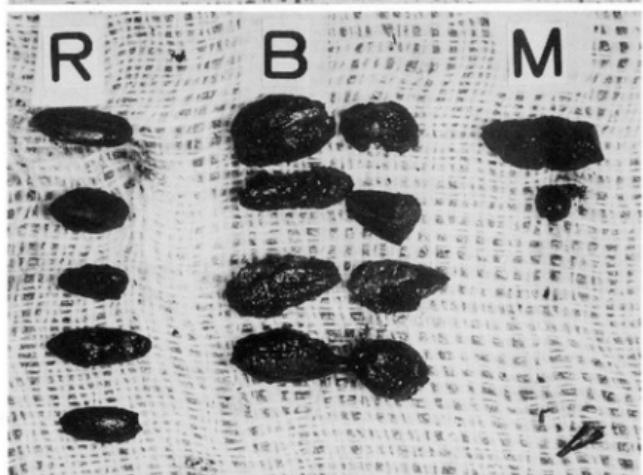


R

B

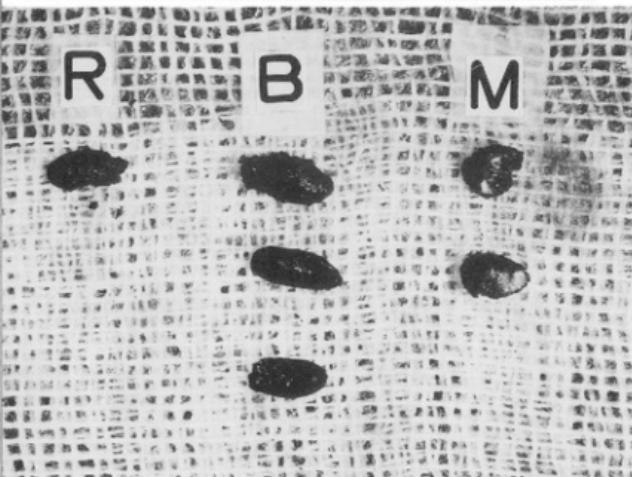
M

SE1井戸跡 6f層





S E 1 井戸跡 10層



S E 1 井戸跡 10層下部



S D 6 清跡 堆積土中

3. 鴻ノ巣遺跡第6次調査出土木製品の樹種

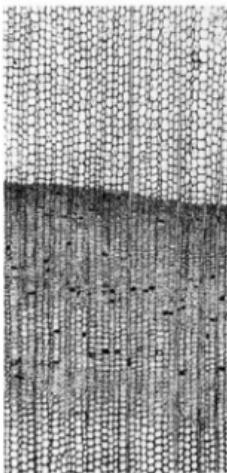
鈴木三男（金沢大・教養・生物）

能城修一（農水省森林総合研究所）

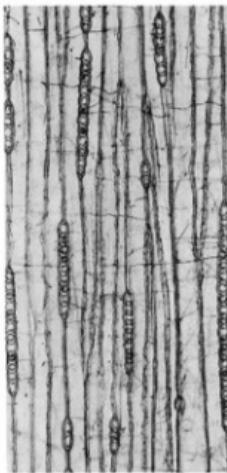
仙台市鴻ノ巣遺跡の井戸跡から第6次調査で出土した平安時代後期の板状の木製品の樹種を調査した。

この材（標本番号 MYG-748）は年輪の明瞭な針葉樹材で、樹脂道はない。早材部は幅広く、早材から晩材への移行はやや急、晩材部は量が比較的多く、厚壁で扁平な細胞からなる、樹脂細胞は晩材部に多く、やや接線方向に集まる傾向があり、その水平壁は平滑である、分野壁孔の保存は良くないが1分野あたり通常2個で、やや大きく、開孔部も広い、などの形態的特徴を持ち、これをスギ科のスギ *Cryptomeria japonica* (Linn. f.) D. Don の材と同定した。

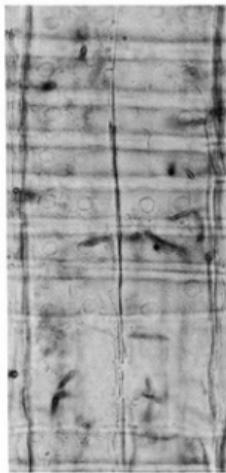
この木製品は柾目取りの板状で、縁が弧状に加工されていることから曲物や桶などの底あるいは蓋板の破片である可能性が考えられる。



木目(×40)



柾目(×100)



板目(400)

スギ(MYG-748)

4. 鴻ノ巣遺跡出土の礫の光沢面について

山田 しょう

(東北大学埋蔵文化財調査室)

1. はじめに

鴻ノ巣遺跡出土の石製品の中に肉眼で光沢面が観察されるものが4点あり、金属顕微鏡での鑑定を依頼された。いずれも平安時代～鎌倉時代の柱穴の可能性があるピットから出土している。K-15以外は扁平な円錐ないしその破片である。肉眼で光沢面は認められないが、類似した形態の1点(K-6)も併せて検査した。

2. 観察結果

金属顕微鏡による打製石器の使用痕観察と同様の方法で観察した(阿子島 1989 参照)。K-6は顕微鏡下でも光沢面は観察されなかった。他はいずれも光沢面が肉眼で観察される範囲にほぼ限定されていることが明らかになった。石質に影響され、変異はあるものの、いずれの光沢面も植物との摩擦で生じた使用痕光沢面のように、滑らかで丸みを帯びているのが特徴である。なお、計測値は p.39, 40 の表参照。石質の鑑定は蟹沢聰史先生による。

K-17

扁平な石英安山岩の円錐の破片である。平坦部は表裏とも滑らかであるが、人為的に擦ったり、磨かれた確証は無い。a面の周縁部は煤状の付着物があり、割れ面はかなり凹凸が激しいことから火を受けた可能性がある。a面上の剥離面の内部に光沢面が分布している。光沢面は丸みを帯び、全体が帶状に分布している。線状痕の方向は不明瞭である。

K-18

17と似た破損した石英安山岩の扁平な円錐である。折れ面はb面側から剥離が始まっている。端部が粗く打ち欠かれている。両面とも平坦部は滑らかに擦られている。肉眼で見える擦痕が多数見られる。擦痕はb面では方向がきれいに揃っているが、a面では方向があまり一定しない。全体としては光沢面を伴わず、a面の平坦部の一部とb面の周縁部の一部にのみK-17に似た丸みを帯びた光沢面が分布する。a面の光沢面はあまり強くない。光沢面に伴う線状痕の方向はa面では一定しているが、b面では不明瞭である。

K-19

半花崗岩の扁平な楕円形の礫で周縁部に煤状の付着物が見られる。両面とも平坦面はかなり滑らかになっているが、擦ったり磨かれた確証はない。大きな結晶の上に平坦な光沢面を生じている。やや丸みを帯びている部分がある。線状痕は全体に不明瞭だが、図の矢印に示した方

向が認められる。

K-15

砂岩の角砾で、各面の磨耗度に差があり、かつその磨耗の特徴から、最も新しい一面を除いては自然の営力で割れた面と考えられる。その一自然面上に広範囲に光沢面が分布する。光沢面は微視的には表面の微小な凹凸の高所に分布しているが、破面全体の中ではむしろ窪んだ部分に分布している。大きな結晶の上にやや丸みを帯びた光沢面を生じており、線状痕の方向は概ね一定しているが、一部()内に示した方向のものも見られる。形成されている面が自然面であることを考えると、自然の営力で生じた光沢面の可能性もある。

K-6

安山岩の扁平な円錐の破片で、平坦面は両面とも滑らかだが、擦ったり、磨かれた確証は無い。光沢面は無い。

3. 考察

上記4点の石製品に肉眼で観察された光沢面は、植物の作業によって生じる光沢面に類似していることが顕微鏡下で確認された。しかし、厳密にはこれらの石材で対照実験は行っているので断定はできない。特に光沢面が未変化部分との間に漸移的な部分を持たず、直線的な境界を示している点はシリカ質堆積岩の石器に見られる輝斑(bright spot: 山田 1986 参照)に似ており、非人為的な要因も考えられ、磨耗によって生じた使用痕光沢面と同種のものと扱えない可能性もある。仮に光沢面が植物との接触で生じたものとしても、それがどのような人間活動によるものか特定できない。磨石あるいはその台として使われたのだろうか。また光沢面のある石器が柱穴と考えられるピットからのみ出ていることから、これらは礎石であり、光沢面は柱との摩擦で生じた可能性も調査担当者の荒井格氏から提示されたが、これも対照実験が困難である。ちなみに東北大学埋蔵文化財調査室が発掘中であった仙台城二の丸の江戸時代中～後期の地中礎石3点の表面を観察してみたが、肉眼で光沢面は認められなかった。

歴史時代のものに限らず、磨石等のいわゆる礎石器の実験使用痕研究は世界的にもほとんど手をつけられていないと言って良い(Fujimoto 1988、藤本 1989、Schoumacker in press 等)。しかし最近リエージュ会議で示された使用痕研究の全体的な対象の拡大傾向が示すように(山田 1991 参照)、この分野も体系的な実験研究の中に取込まれる日は、そう遠くないかもしれない。そしてこのような歴史時代の石器の方が、あるいは用途が限定されており、かつ相対的に豊富な他の証拠との関連で機能を想定しやすいということもあり得る。

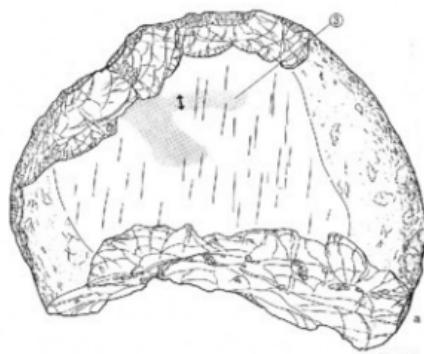
謝辞 顕微鏡の使用は斎野裕彦氏にお世話を戴いた。感謝申し上げる。

引用文献

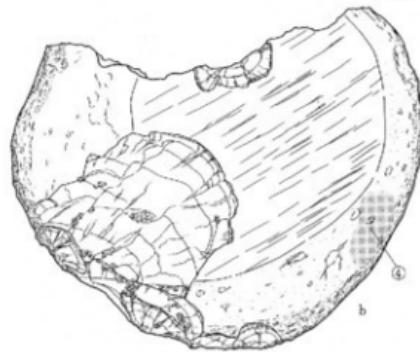
- 阿子島香 1989 「石器の使用痕」 考古学ライブラリー 56 ニュー・サイエンス社
- Fujimoto,T. 1988 Corn-polish on grinding stones.Paper presented at the international symposium "Environmental Change and Human Culture in the Nile Basin and Northern Africa until 2nd Millennium BC." Poznań, Poland.
- 藤本強 1989 「磨臼（サドル・カーン）について」 『考古学と民族誌－渡辺仁教授古稀記念論文集』：123-144. 六興出版
- Schoumacker,A. in press Apports de la technologie contemporaines et de la pétrographie pour la caractérisation des meules. *Tracéologie et fonction : les gestes retrouvés. Colloque international de Liège*, Editions ERAUL, Vol. 50-1 : 65-176.
- 山田しょう 1986 「使用痕分析」 東北大学埋蔵文化財調査室年報 2 : 50-61
- 山田しょう 1991 「'90年リエージュ「使用痕」会議に参加して」 『旧石器考古学』 43 : 51-58



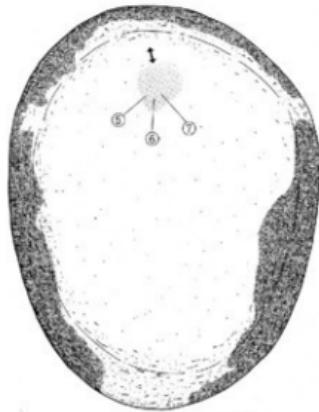
K-17



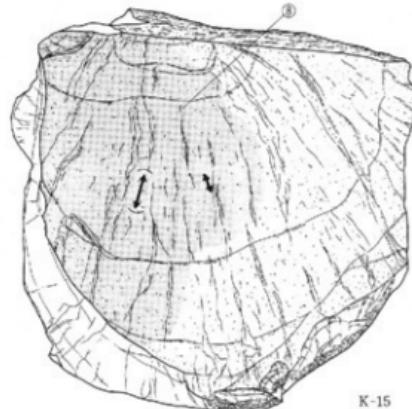
K-18



a



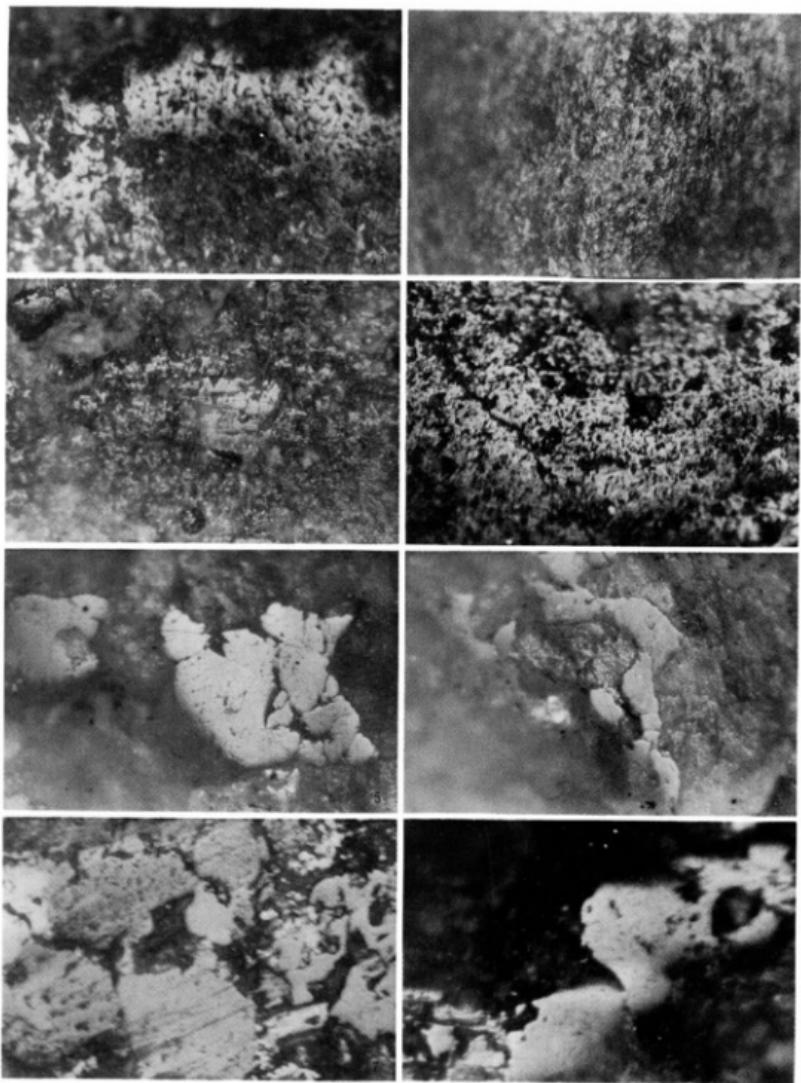
K-19



K-15



第55図 線状痕の方向と顕微鏡写真撮影箇所



光沢面の顕微鏡写真

1, 2, K-17 3, K-18a面 4, K-18b面 5~7, K-19 8, K-15

第VIII章 考察とまとめ

1. 第II層出土陶器・磁器について

第II層出土遺物には土師器片、須恵器片、陶器片、磁器片、鉄製品、砥石などがあり、古代から近世までの遺物が混在している。ここでは第II層の時期決定資料である陶器・磁器について産地別、器種別に説明を加える。

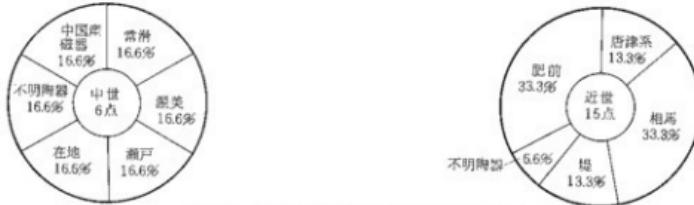
第II層出土の陶器・磁器は21点であり、時期的には中世が6点、近世が15点である。近世陶器・磁器には年代を限定できる資料はあまり多くはないが、すべて18世紀代あるいはそれ以降のものであり、17世紀代まで遡ると考えられる資料は1点も含んでいない。したがって、近世あるいはそれ以降と考えられる第II層の時期は、18世紀代よりも古くなることはない。

第56図には産地別の出土量を中世と近世とに分けて示し、第57図には器種別の出土量を同様に示した。第57図の白ヌキは磁器であり、第60図・第66図も同様である。

中世の資料は点数が少なく、さらに産地別にみても器種別にみても共通するものが1点もないため全体的な傾向を述べることはできない。

近世の資料では、相馬產・堤產陶器が46%を超えており、磁器はすべて肥前產に限られる。肥前磁器が第II層出土陶器・磁器全体に占める割合は33%を超え、その器種は不明の1点を除きすべて皿である。

なお、器種別に示した第57図中で不明としたものは、いずれも細片であるため器種を特定することができなかった資料である。



第56図 第II層出土陶器・磁器産地別出土量



第57図 第II層出土陶器・磁器器種別出土量

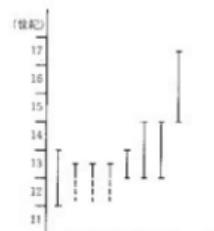
2. 第III層出土陶器・磁器について

第III層から出土した陶器片、磁器片は33点である。33点の資料の中で年代がある程度限定できるものは8点である。第58図に8点の資料の年代幅を個別に線分の長さによって示した。年代の上限を特定できない資料については破線で表している。

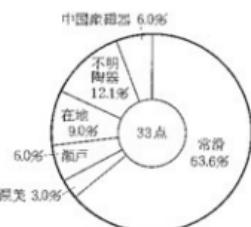
第58図からは13世紀を中心とする資料がほとんどであることが読みとれるが、15世紀から17世紀代前半頃と考えられる資料が1点出土していることから第III層の時期はそこまで下るものと考える必要がある。ただし、第III層出土遺物については、前述のように細分層である第III a層と第III b層に分けずに一括してグリッドで取り上げているため、両層にある程度の時間差があったとすれば、その中の新しい時期が与えられていることになる。したがって、可能性としては第III a層については中世後半（～近世初頭）と考えることができ、第III b層はそれ以前の時期が与えられ中世前半まで遡ると考えることができる。

第59図には第III層出土陶器・磁器の産地別の出土量を、第60図には器種別の出土量を示した。また、第61図は常滑産の陶器を器種別に示した図であり、第62図はある程度まとめた点数が出土している鉢と壺を産地別に集計した結果である。

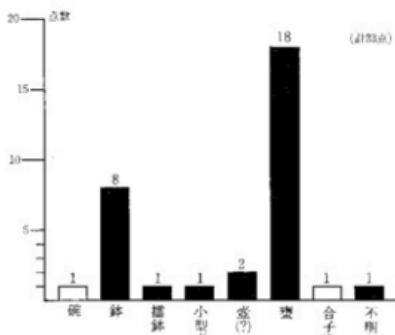
産地別にみると常滑産が圧倒的に多く、第III層出土陶器・磁器全体の63%を超えてることがわかる。それに対して在地の陶器は10%にも達していない。常滑産の陶器には鉢・小型壺・壺がみられるが、壺が76%を超えており、鉢は20%弱である。第III層出土の壺全体に対する常



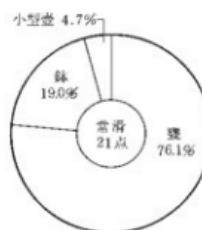
第58図 第III層出土陶器・磁器の年代幅



第59図 第III層出土陶器・磁器産地別出土量



第60図 第III層出土陶器・磁器器種別出土量

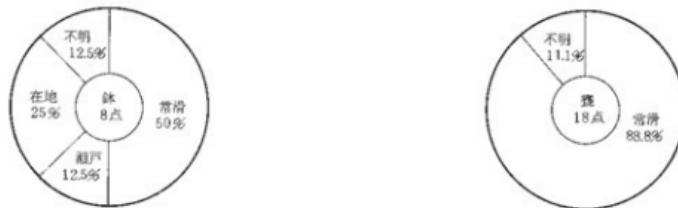


第61図 第III層出土常滑産陶器器種別出土量

滑産の割合は90%に近く、鉢に対する割合は50%である。したがって、甕のほとんどには常滑産のものが使用されており、鉢にはおもに常滑産が使用されるものの他産地の陶器も用いられていることがわかる。

第III層出土陶器・磁器全体に対する磁器の割合は6%程度であり、それほど多くは使用されていない。磁器は中国産の12~13世紀代のものである。

なお、器種別に示した第60図中で不明とした1点は、細片であるため器種を特定することができない資料である。



第62図 第III層出土鉢・甕産地別出土量

3. SX1性格不明遺構について

SX1性格不明遺構は第III b層上面で検出された遺構である。規模は長辺11.75m以上、短辺2.6m以上で、さらに調査区外へ続いていると考えられる。遺構の一部分しか検出できなかったためその性格を断定することは難しいが、検出層位、形態などから検討を加えてみたい。

検出層である第III b層と直上の第III a層は、プラント・オパール分析によれば試料1グラムあたりのイネのプラント・オパールが第III b層から7,500個、第III a層から9,300個検出されており、両層とも稻作が行なわれていた可能性が高いと判断できるとの結果が得られている（第VII章1参照）。

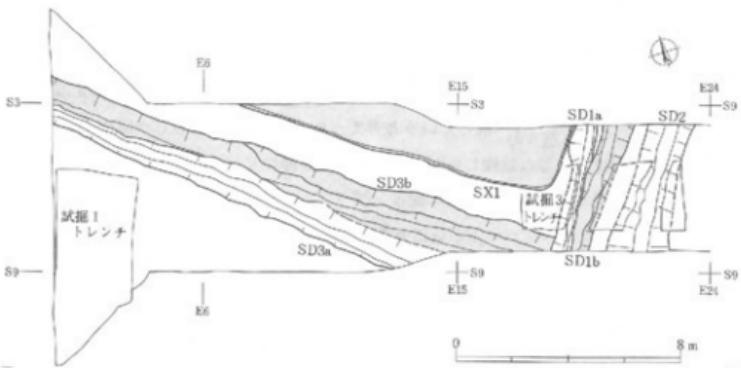
SX1性格不明遺構は、形態的には長辺、短辺ともに直線的であり、長辺と短辺の方向はほぼ直交している。検出面から底面までの深さは7.5~17cmであり、底面には凹凸がみられる。堆積土は、完全に一致するわけではないが基本層位の第III a層と類似した層相を示している。遺構全体としてみた場合は、壁の立ち上がりが急激であるため段差としてとらえられる（写真5）。このような段差については、これまで多くの調査が行なわれている富沢遺跡（仙台市太白区）すでに注目されており、水田跡の可能性が考えられる場合の一例として次のように示されている。

（水田土壤である層の）下面の段差が直線的な方向性をもち、しかも、区画の存在が想定されるもの。

以上の点からSX1性格不明遺構は掘り込まれた遺構ではなく、水田耕作の結果として残された痕跡である可能性が考えられる。その場合、前述のようにプラント・オバール分析の結果では直上層の第Ⅲa層も水田跡であった可能性が指摘されているが、SX1性格不明遺構の堆積土の層相は第Ⅲa層と若干異なっているため、第Ⅲa層よりも一時期古い水田跡が存在していたことを示すものとなる。そして第Ⅷ章-2でみたように中世の時期が与えられる。

第63図はSX1性格不明遺構と第Ⅲa層上面で検出されたSD1a・1b・2・3a・3b溝跡の平面図を合成した図である。この図からはSX1性格不明遺構の長辺とSD3b溝跡の方向が、短辺とSD1b溝跡の方向がほぼ一致していることがわかる。これはあくまでも仮定であるが、SX1性格不明遺構に対応する溝跡がSD1b・3b溝跡であり、両溝跡とSX1性格不明遺構の縁辺との間に畦畔が存在していたことが想定される。

調査面積などの問題があるため充分に確証のあるものとはいえないが、本遺跡に中世の水田跡が存在する可能性があることを指摘した。また水田跡であった場合、上層の遺構との関連から考えられる畦畔の位置の推定も行なった。今後、周辺で調査を実施する場合には、この時期の水田跡の存在を追及するための調査が必要である。



第63図 第Ⅲa層・第Ⅲb層上面検出遺構合成平面図

4. 第IV層上面検出遺構内出土陶器・磁器について

第IV層上面検出遺構の中で陶器・磁器が出土しているのはSD5・6・7溝跡、ピット165であり、出土点数は計15点である。また、第IV層上面の遺構検出作業中に3点の資料が出土している。ここでは合計18点の資料について検討を加える。

第64図は、年代がある程度限定できる資料の年代幅を線分の長さによって示した図である。

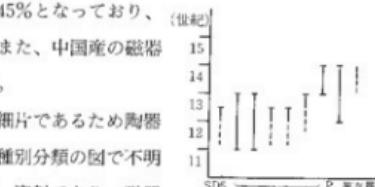
また、限界はできないが可能性として年代を推定できる資料と、上限の年代を特定できない資料については破線で表した。図に示されているように15世紀代まで下る資料は1点も含んでいないことから、これらの遺構には中世前半の時期が与えられる。

第65図には18点の資料を産地別に分類して示し、第66図には器種別の分類を示した。産地別では常滑産の陶器が最も多く全体の27%を超えており、第III層出土資料のように60%を超えるほどの量ではない。しかし、陶器に対しては45%となっており、やはり大きな割合を占めていることがわかる。また、中国産の磁器が33%を超えて出土していることが注目される。

なお、産地別分類の図で不明としたものは、細片であるため陶器とも磁器とも判別できなかった資料である。器種別分類の図で不明としたものは、陶器では細片のため特定できない資料であり、磁器では前述のように瓶あるいは水注の耳か突起と考えられる青白磁である。



第65図 第Ⅳ層上面検出遺構内出土陶器・磁器産地別出土量



第66図 第Ⅳ層上面検出遺構内出土陶器・磁器器種別出土量

5. 第Ⅳ層上面検出ピット出土の光沢面のある礫について

第IV層上面で検出したピット127・128・177・178から出土した礫(K-15, K-17, K-18, K-19)に光沢面が肉眼で確認されたため、東北大学埋蔵文化財調査室の山田しょう氏に金属顕微鏡による光沢面の観察を依頼した。これらの礫がすべて柱穴と考えられるピットから出土しているので、柱などとの摩擦で生じた可能性を考えたからである。

山田氏による観察(第VII章4参照)では、滑らかで丸みを帯びている点では植物の作業によって生じる使用痕光沢面に類似しているものの、その一方で、光沢面と未変化部分との間が直線的な境界を示していることから輝斑(bright spot)にも似ているという結果であった。輝斑は世界各地のシリカ質堆積岩製石器に共通して観察されている光沢面で、一部に形態や分布の特

微により何らかの人为的効果が含まれている可能性が示唆されているが、一般的には石器の上にランダムに分布することから自然の営力で生じたものと考えられている。

今回、光沢面が見られた礫は、砂岩、石英安山岩、半花崗岩と様々であり、光沢面の性格を納論づけるにはこれらの石材を用いた対照実験を行ない、その観察結果に拠らなければならぬ。しかし、礫石器の実験使用痕研究がほとんど行われていない現状では、まだ多くの時間が必要なようである。現段階ではその進展を期待するほかないが、このような可能性を考えた視点からの遺物観察を続けていく必要がある。

6. 第IV層上面検出遺構出土土器について

第IV層上面で検出された遺構のうち、調査区東端部の遺構（SK2土坑、SK3土坑、SK4土坑、ピット1・2・4）から土師器、須恵器、赤焼土器が出土している。SK3土坑、SK4土坑、ピット1・2・4が堆積土上部に灰白色火山灰を含むSD9溝跡を切っていることから、各遺構出土土器には灰白色火山灰降下後の時期が与えられる。灰白色火山灰の年代については、陸奥国分寺跡において、灰白色火山灰の直下の整地層に貞観12(870)年に陸奥国修理府へ配置された新羅瓦工人によって製作されたと考えられている瓦が多量に含まれていたこと、直上に承平4(934)年の七重塔焼失時と考えられる焼土層があることから、陸奥国修理府への瓦工人の配置以降、七重塔焼失以前であり、瓦の廃棄までの時間幅を考慮して10世紀前半頃とされている（白鳥 1980）。火山灰の分析では、灰白色火山灰は十和田a火山灰と同一であり、不確実しながらも『扶桑略記』にみえる延喜15(915)年の出羽國での降灰記事にあて、灰白色火山灰の降下年代を915年と推定している（町田・新井・森脇 1981、山田・井上 1990）。また、文献史料による検討では、『扶桑略記』延喜15年の降灰記事が火山灰を降らすような大噴火であったことを示しているにもかかわらず、火山の名や噴火記事が国史に記されていないのは、出羽国一の宮である大物忌神社の神体とされる鳥海山のような陸奥・出羽の地方官が直接的な統治を行なっている地城内にある火山ではなかったためとし、噴火した火山を十和田山に、降下火山灰を十和田a火山灰にあてる考えが示されている（鈴木 1982）。

ここでは、各遺構とも遺物出土量が少ないためSK2土坑出土土器も含めて一括して取り扱い、その編年的位置を検討する。

上記の遺構から出土した土師器は、すべてロクロを使用して製作されている。ロクロ使用的土師器は、東北地方南部の土師器編年では表杉ノ入式とされており（氏家 1957）、平安時代に位置付けられている。表杉ノ入式期の土器については、近年、主に壺の形態や製作技法などの検討によって編年的位置が行なわれている（白鳥 1980、丹羽ほか 1981、加藤 1981、丹羽 1983、佐々木 1984など）。細分のための要素としては、壺の口径に対する底径の割合（底

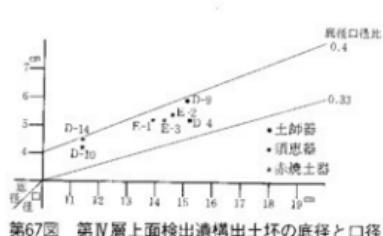
径／口径、以下「底径口径比」と呼ぶ。)を中心とした形態の変化、底部切り離し技法、底部切り離し後の再調整技法とその有無、器面調整(内面のヘラミガキ方向など)、そして須恵器、赤焼土器との共伴関係などがあげられている。これまでの検討によると、時代が下るにしたがって底径口径比は大きいものから小さいものへと、底部切り離し後の調整は再調整のあるものが主体の段階からないものが主体の段階へ、そしてないものののみの段階へと変遷するとされている。また表杉ノ入式期の末期には、須恵器が消失し、赤焼土器に大小の別が生じ、量比において赤焼土器が土師器を上回るようになるという。以上のような検討をもとに宮城県南部においては次のような変遷が考えられている。

亘理町宮前遺跡第20号住居跡(宮前第IV A群)→白石市青木遺跡第21号住居跡・大河原町台ノ山遺跡第8号住居跡→蔵王町東山遺跡土器溜→白石市家老内遺跡第2号住居跡・亘理町宮前遺跡第54号住居跡(宮前第IV B群)→仙台市安久東遺跡第2号住居跡・名取市清水遺跡第9号溝内第1土坑(清水第VII C群)→仙台市鹿島遺跡第1、4土坑(鹿島B群)→白石市植田前遺跡第1、2溝状構築

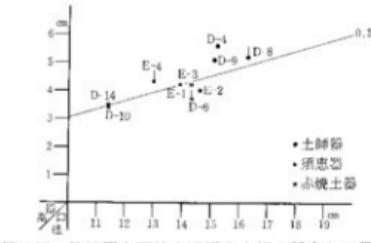
実年代については、遺構内から出土している灰釉陶器や瓦の年代、灰白色火山灰を介在して出土した遺物と文献にみられる陸奥国修理府に関する記事や陸奥国七重塔の焼失記事との関係、岩手県南部において平泉藤原氏の時期の所産とされる土器との対比などによって与えられている。しかし、灰釉陶器の年代観の変更に伴って報告段階の推定年代が変更されている土器群もあり、現段階では東山遺跡土器溜土器群に9世紀中葉、安久東遺跡第2号住居跡土器群に10世紀前半、鹿島遺跡B群土器に10世紀後葉、植田前遺跡第1、2溝状構築土器群に11世紀後半の年代が与えられている。(真山 1981、小川 1987、飯村 1990)。

本遺跡の上記遺構から出土した土師器環の底部切り離し技法はすべて回転糸切りであり、再調整は施されていない。このような土師器環を含む土器群は、これまでの検討では安久東遺跡第2号住居跡以降の土器群にあたる。

第67図は土師器環、須恵器環、赤焼土器環の底径と口径の関係を、第68図は器高と口径の関係を示した図である。破片資料で器高が不明なものは現存高で示し、それ以上という意味で上



第67図 第IV層上面検出構造出土環の底径と口径

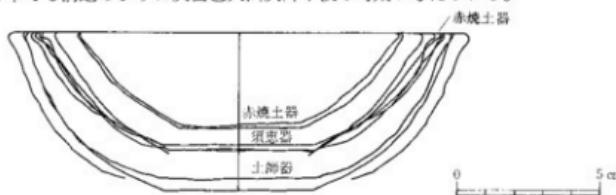


第68図 第VI層上面検出構造出土環の器高と口径

部に実線を加えて表した(例:↓)。第67図によると、土師器、須恵器、赤焼土器ともに底径口径比が0.4を下回っていることがわかる。具体的な数値では、土師器が0.34と0.39、須恵器が0.36と0.37(2点)、赤焼土器が0.37と0.39である。また第68図からは、器高、口径とともに土師器が大きい数値を示し、赤焼土器がもっとも小さく、須恵器と赤焼土器1点がその中間であることが読みとれる。すなわち、土師器、須恵器、赤焼土器には法量差があることがわかる。第69図は破片資料を含めた壺のプロフィールを表した図である。小型のものから赤焼土器、須恵器(赤焼土器1点を含む)、土師器と明瞭に分かれている。土器群のこのような傾向は、「壺は口径16~17cmの比較的大型のものが土師器に、口径13~14cmの中型のものが土師器、須恵器、赤焼土器に、口径13cmより小さい小型のものが赤焼土器にみられる。」(土岐山 1980)とされる安久東遺跡第2号住居跡土器群の様相に類似している。一方、安久東遺跡第2号住居跡よりも新しく位置付けられている鹿島B群土器では、土師器壺と赤焼土器壺の口径はほぼ同じであり、組成をみると安久東遺跡ではみられなかった赤焼土器小皿を他器種よりきわめて高い率で含んでいる。本遺跡の土器群は赤焼土器小皿を含まない。

また、東北大学埋蔵文化財調査委員会による三神峯地区原子核理学研究施設地点(TM1)の調査報告では、プロフィールと法量をもちいた遺跡間の比較が試みられており、TM1ピット25出土の土器群は安久東遺跡第2号住居跡土器群、清水第VII-C群土器と類似し、より安久東遺跡に類似するとされている(大場 1990)。その比較図(p.77・78)に本遺跡出土の土師器壺と赤焼土器壺を対比させると、土師器壺はTM1土師器II類に類似し、赤焼土器の小型のものは須恵系土器I類に、中型のものは須恵系土器II類に類似している。

以上の検討から、本遺跡の土器群は、安久東遺跡第2号住居跡土器群、清水第VII-C群土器、TM1ピット25土器群とほぼ同時期のものと考えられる。したがって10世紀前半頃に位置付けられ、その中でも前述のように灰白色火山灰降下後の時期が与えられる。



第69図 第IV層上面検出遺構出土壺のプロフィール

7. 第VI層水田跡および第VIIa層水田跡について

第VI層水田跡に伴う遺物は、ほとんど出土していない。層中よりわずかにロクロを使用していない甕と判断できる程度の土師器細片が出土しているのみである。したがって水田跡の時期については明らかにはできない。しかし、層位的には第VIIa層の直上の層であることから第VII

a 層水田跡と近接した時期であることが指摘できる。また、第VI層の大畦畔が第VII a 層水田跡の大畦畔とほぼ同じ位置にあることから、第VI層水田跡は第VII a 層水田跡を踏襲して造られた可能性が考えられる。

第VII a 層水田跡からは層上面より土師器鉢が、層中より甕片が出土している(第51図)。出土状況から考えると、甕片は層中から出土しているため耕作による下層からの巻き上げなども考慮しなければならないのに対して、鉢は層上面に貼りつくような形で出土している(写真35)ことから、第VII a 層水田跡の時期を考えるには鉢がより適しているといえる。このような鉢は、形態、調整、底部の形状などから塩釜式の新しい段階か南小泉式の古い段階のものと考えられる。したがって、ここでは、第VII a 層水田跡を古墳時代前期の終わりから中期の初め頃にかけての時期と位置付けておきたい。第VI層水田跡はその直後の時期である。

これまで古墳時代前期の水田跡は、仙台市内では、名取川と広瀬川によって形成された後背湿地に立地する富沢遺跡で検出されている(第30次調査・第35次調査)。しかし、第30次調査検出水田跡は上層の耕作によって層上部が攪拌されており、遺存状況が良好ではない。水田1区画の形状や面積が判明するものはまったくなく、地形に沿った区割り方法が想定されているのみである(太田 1991)。第35次調査で検出された水田跡も擬似畦畔Bによる部分的な検出であり、遺存状況がきわめて悪い。現段階では、仙台市内における古墳時代前期の水田跡については、その構造や区画の方法、1区画の面積・形状などはほとんど明らかではない。

古墳時代中期の水田跡は、前期水田跡と同じく富沢遺跡で検出されており(第15次調査、第35次調査)、勾配のきわめて緩やかな、ほぼ平坦に近い地形面に造られている。等高線に直交もしくは平行するようにして地形に沿って設けられた大畦畔によって大きく区画し(大区画)、それを小畦畔でいくつかのブロックに分割した(中区画)後、さらにその中を小畦畔で区画することによって最小の水田区画(小区画)が造られている(斎野ほか 1987)。水田区画は方形を基調としており、面積は最小1.1m²、最大48.5m²であるが、1~12m²のものが9割以上を占め、その中でも特に1m²から8m²に集中する傾向がある。平均面積は約5m²である。また、大小2条の水路を伴っており、ともに給水、排水両方の機能を有していたものと考えられている(平間 1991)。

本遺跡で検出された第VI層水田跡は、前述のように大畦畔と小畦畔によって区画されている。水田区画の面積は、調査面積が小さかったため確定できたものは少ないが、富沢遺跡の例と類似している(第2表参照)。しかし、中区画の存在や水路については今回の調査区内では確認することはできなかった。

以上述べてきたように、古墳時代前期の終わりから中期の初め頃にかけての時期と考えられる第VII a 層水田跡の直上の層であること、大畦畔の位置から第VII a 層水田跡を踏襲して造られ

た可能性があることなどから、第VI層水田跡は第VIIa層水田跡とそれほどの時間差を持たないものと考えられる。また、富沢遺跡で検出された古墳時代中期の水田跡と類似していることもあわせて考えると、第VI層水田跡は、古墳時代中期に属する可能性が高いと判断される。

一般的に、水田跡からの遺物出土量は少なく、また、耕作などによる遺物の移動などの要因も考慮に入れなければならないため、水田跡の時期決定は容易でない場合が多い。今回の調査においても、それは例外ではなく、前述のわずかな土器だけで時期を与えるのは望ましいことではない。しかし、本遺跡で水田跡が検出されたのは今回の調査が初めてであり、今後本遺跡で行なわれる調査へある程度の見通しと方向付けを与える意味であえて時期の推定を試みた。今後の調査によって、出土状況の良好な時期決定資料を伴って水田跡が検出されることが望まれる。

本遺跡では、古墳時代中期の遺構としては、宮城県文化財保護課による調査において竪穴住居跡が2軒検出されており（白鳥・加藤ほか1974）、また当教育委員会による第4次調査では周溝墓が1基検出されている（青沼・長島1982）。今回の調査では食料生産遺構としての水田跡が検出された。これは本遺跡の構造を考える上できわめて重要な発見である。すなわち、古墳時代における居住域、生産域、墓域のあり方が解明される可能性が示唆されたことになる。今後の調査の進展によって遺跡構造の解明がなされ、土地利用をはじめとした当時の集落の具体的な姿が明らかにされることを期待したい。

8. プラント・オパール分析結果について

プラント・オパール分析では、一般的に、試料1グラムあたりイネのプラント・オパールが5,000個以上の密度で検出された場合、そこで稲作が行なわれた可能性が高いと判断されている。今回の調査において古環境研究所に依頼した分析では、5,000個を超える密度の層は第I層、第IIIa層、第IIIb層、第VI層、第VIIa層、第VIIb層、第VIIIa層であり、中でも第VI層、第VIIa層、第VIIIa層は密度が12,800~24,200個/gと非常に高く、稲作の可能性がきわめて高いとの結果が得られている（第VIII章1参照）。ここでは、第I層は表土であるから除外し、第IIIa層から第VIIIa層について述べることとする。

第IIIa層上面ではSD1a・1b・2・3a・3b溝跡が検出され、第IIIb層上面ではSX1・2性格不明遺構が検出されている。第VIII章3で検討したように、SX1性格不明遺構は、SD1b・3b溝跡とあわせて考えると、水田耕作の結果として残された可能性のある遺構である。SD1a溝跡、SD3a溝跡は、それぞれSD1b溝跡、SD3b溝跡を切っており、SD2溝跡はSD1a・1b溝跡とほぼ平行している。このような切り合い関係と位置関係から、第IIIa層でも水田耕作が行なわれた可能性を考えることができる。また、中世の時期が与えられた第

III a 層と第III b 層の出土遺物は、前述のように第III層として一括して取り上げているが、1点・1点が細片になっているものが多く、層の上部から下部まで全体的に分布している。このような遺物のあり方は、耕作に伴う土壤の攪拌によるものと考えられる。したがって、イネのプラント・オパール密度が第III a 層が9,300個/g、第III b 層が7,500個/gであることからこの場所で耕作が行なわれた可能性があるとの指摘は、妥当性のあるものであろう。

第VI層、第VII a 層では水田跡が検出されている。その時期は第VII章7で検討したように、第VI層が古墳時代中期頃、第VII a 層が前期の終わりから中期の初め頃と考えられる。

第VII b 層ではイネのプラント・オパールが7,700個/gが検出され、第VII a 層からは14,300個/gという非常に高い密度で検出されている。前述のように、時間的制約によってわずかな面積の精査しか行なえなかつたため、両層ともに水田耕作にかかわると考えられる遺構の有無を確認することはできなかった。しかし、少なくとも第VII a 層ではイネのプラント・オパール密度に明瞭なピークが認められることから、今後の調査によって水田跡を検出できる可能性が非常に高い。そして、もし水田跡が検出されれば、その時期は第VII a 層水田跡よりも古く、古墳時代前期以前と推定され、場合によっては、今回を含めたこれまでの調査によってわずかに弥生土器も出土していることから、弥生時代まで遡る可能性も考えられる。

以上のように、本遺跡では今回検出された古墳時代前期もしくは中期の初め頃と古墳時代中期頃と考えられる水田跡のほかに、それをさらに遡る時期の水田跡と2~3時期の中世の水田跡が検出される可能性がある。さらに、プラント・オパール分析によって、イネのプラント・オパールが直上の第Va 層からはまったく検出されていないことから上層よりの混入の危険性は考えにくいため、2,600個/gとやや低い値ではあるが、第Vb 層でも耕作が行なわれていた可能性があると指摘されている。今後、本遺跡においては、これらの存在の有無を検証し、そしてその構造を把握するための調査が必要である。

今回の調査に着手したのは平成元年の12月5日であり、厳寒期の1月、2月の中斷を挟み、器材撤収も含めて完全に調査が終了したのは翌年の3月31日である。12月と3月という仙台ではけっして望ましいとはいえない調査環境にもかかわらず、これまでにない多くの調査成果を得ることができたのは、佐藤、加藤両係長をはじめとする調査後半において応援に駆けつけてくれた職員の協力によるものである。また、他の職員からも全面的なバック・アップを受け、ようやく年度最終日に調査を終了することができた。今回の調査成果は、全職員の協力によるものであることを記しておきたい。

注

- 1) 千葉孝弥ほか 1990
- 2) 千葉孝弥ほか 1990
- 3) 千葉孝弥ほか 1990
- 4) 渡部弘美・佐藤 裕 1984
- 5) 白鳥良一・加藤道男ほか 1974
- 6) 青沼一民・長島榮一 1982
- 7) 多賀城市埋蔵文化財センター 1989
- 8) 赤澤靖章 1990
- 9) 赤澤靖章 1990
- 10) 渡部弘美 1982、渡部弘美・佐藤 裕 1984
- 11) 金森安孝 1983
- 12) 結城慎一 1989
- 13) 入間田宣夫 1978
- 14) 斎藤利男 1984
- 15) 金森安孝 1990
- 16) 多賀城市埋蔵文化財センター 1989
- 17) 赤澤 靖章 1990
- 18) 工藤哲司・金森安孝 1981、青沼一民・長島榮一 1982
- 19) 斎藤利男 1984
- 20) ここで須恵器とした資料は、一般的な須恵器のように青灰色を呈するものではなく、灰白色を呈する土器である。このような土器は安久東遺跡や三神峯地区原子核理学研究施設地点(TM1)からも出土している(土岐山 1980、大場1990)。ともに須恵器として報告されており、TM1の報告では「色調は灰白を呈し、焼きのあまいものが多い」(大場 1990 p.75)と述べられている。これらの灰白色の土器が時期的に限定され、しかも器種や器形、法量などに須恵器と異なった一定のまとまりがみられるのであれば、須恵器から分離してとらえた方がより適切であると思われる。しかし、今回の資料ではその検討をなし得なかったため、これまでの報告にしたがい須恵器として取り扱った。

参考・引用文献

- 青沼一民・長島栄一 1982 「鴻ノ巣遺跡一発掘調査報告書一」 仙台市文化財調査報告書第44集
- 赤澤靖章 1990 「山王遺跡—仙塙道路建設関係遺跡八幡地区調査概報一」 宮城県文化財調査報告書第138集
- 飯村 均 1990 「〈地域〉東北」「中近世土器の基礎研究VI」 日本中世土器研究会 p.p.254~259
- 入間田宣夫 1978 「鎌倉慈富と奥羽両国」「中世奥羽の世界」 p.p.41~82
- 氏家和典 1957 「東北土師器の型式分類とその編年」「歴史」第14輯
- 太田昭夫 1991 「富沢遺跡—第30次調査報告書第1分冊一」 仙台市文化財調査報告書第149集
- 大場拓俊 1990 「a.土師器 b.須恵器 c.須恵系土器」「東北大学理蔵文化財調査年報3」 p.p.72~89
- 小川淳一ほか 1987 「五本松窯跡」 仙台市文化財調査報告書第99集
- 加藤道男 1981 「植田前遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書V」 宮城県文化財調査報告書第81集
- 金森安孝 1983 「岩切畠中遺跡一発掘調査報告書一」 仙台市文化財調査報告書第50集
- 金森安孝 1990 「東光寺遺跡第3次」「富沢遺跡第49次 東光寺遺跡第3次 青葉山A遺跡」 仙台市文化財調査報告書第142集
- 工藤哲司・金森安孝 1981 「鴻ノ巣遺跡一発掘調査報告書一」 仙台市文化財調査報告書第32集
- 工藤哲司ほか 1986 「柳生 土地区画整理事業に伴う柳生地区の遺跡分布調査と、松木遺跡の発掘調査報告書」 仙台市文化財調査報告書第95集
- 斎藤利男 1984 「莊園公領社会における都市の構造と領域—地方都市と領主制—」「歴史学研究」第534号 p.p.55~64
- 斎野裕彦ほか 1987 「富沢 仙台市都市計画道路長町・折立線建設に伴う富沢遺跡第15次発掘調査報告書」 仙台市文化財調査報告書第98集
- 佐々木和博 1984 「鹿島遺跡 竹ノ内遺跡」 宮城県文化財調査報告書第101集
- 佐藤甲二 1985 「南小泉遺跡—第12次発掘調査報告書一」 仙台市文化財調査報告書第80集
- 佐藤 洋・山田しょう 1983 「今泉城跡 名取川下流域における中世城館跡の調査一」 仙台市文化財調査報告書第58集
- 白鳥良一 1980 「多賀城跡出土土器の変遷」「研究紀要VII宮城県多賀城跡調査研究所」 p.p. 1~38
- 白鳥良一・加藤道男ほか 1974 「岩切鴻ノ巣遺跡」「東北新幹線関係遺跡調査報告書—I—」 宮城県文化財調査報告書第35集
- 鈴木恵治 1982 「文献史料からみた古代奥羽での天災」「考古風土器」第7号 p.p.42~48
- 仙台農耕文化勉強会 1990 「水田跡の基本的理識—仙台市における水田跡の検出と認定—」「第3回 東日本の水田跡を考える会・資料集一」 p.p. 3~6

- 多賀城市埋蔵文化財センター 1989 「年報」 多賀城市文化財調査報告書第20集
- 田中則和ほか 1984 「山口遺跡II -仙台市体育館建設予定地-」 仙台市文化財調査報告書第61集
- 千葉孝彦ほか 1990 「新田遺跡（第4・11次調査報告）」 多賀城市文化財調査報告書第23集
- 土岐山武 1980 「安久東遺跡」 『東北新幹線関係遺跡調査報告書-IV-』 宮城県文化財調査報告書第72集
- 丹羽・小野寺・阿部 1981 「清水遺跡」 『東北新幹線関係遺跡調査報告書-V-』 宮城県文化財調査報告書第77集
- 丹羽 茂 1983 「宮前遺跡」 『朽木橋横穴古墳群 宮前遺跡』 宮城県文化財調査報告書第96集
- 平間亮輔 1991 「富沢遺跡 第35次発掘調査報告書」 仙台市文化財調査報告書第150集
- 町田・新井・森脇 1981 「日本海を渡ってきたテフラ」 『科学』第51巻9号 p.p.562~569
- 真山 哲 1981 「東山遺跡」 『東北自動車道遺跡調査報告書V』 宮城県文化財調査報告書第81集
- 山田一郎・井上克弘 1990 「東北地方を覆う古代の珪長質テフラ“小和田一大湯浮石”の同定」 『第四紀研究』第29巻2号 p.p.121~130
- 山田しょう 1986 「⑤使用痕分析」 『東北大學埋蔵文化財調査年報2』 p.p.50~61
- 結城慎一・佐藤 洋 1985 「仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書」 仙台市文化財調査報告書第76集
- 結城慎一・中富 洋 1988 「燕沢遺跡」 仙台市文化財調査報告書第116集
- 結城慎一 1989 「仙台市岩切鴻ノ巣遺跡」 仙台市文化財調査報告書第123集
- 渡部弘美 1982 「燕沢遺跡-発掘調査報告書-」 仙台市文化財調査報告書第39集
- 渡部弘美・佐藤 裕 1984 「燕沢遺跡」 仙台市文化財調査報告書第62集

写 真 図 版

I

II

IIIa

IIIb

IV

Va

Vb

VI

VIIa

VIIb

VIIIa

VIIIb

VIIIc

IX

X

写真1
基本層序
(調査区北壁 E 23 ライン)



写真2
SD1a・1b・2溝跡全景
(南より)





写真3
SD 3a・3b溝跡全景
(東より)



写真4
SD 3a・3b溝跡断面
(東より)

写真 5
S×1 性格不明遺構全景
(東より)



写真 6
S×2 性格不明遺構全景
(南西より)



写真 7
S×2 性格不明遺構断面
(西より)





写真8
SD5溝跡全景
(東より)



写真9
調査区東壁
(SD5.9溝跡断面、西より)

写真10
SD 6溝跡全景
(東より)



写真11
SD 6溝跡断面
(東より)





写真12
S D 7 溝跡全景
(南東より)



写真13
S D 9 溝跡全景
(北西より)

写真14
S E 1 井戸跡全景
(東より)



写真15
S E 1 井戸跡断面
(東より)



写真16
S E 2 井戸跡全景
(東より)



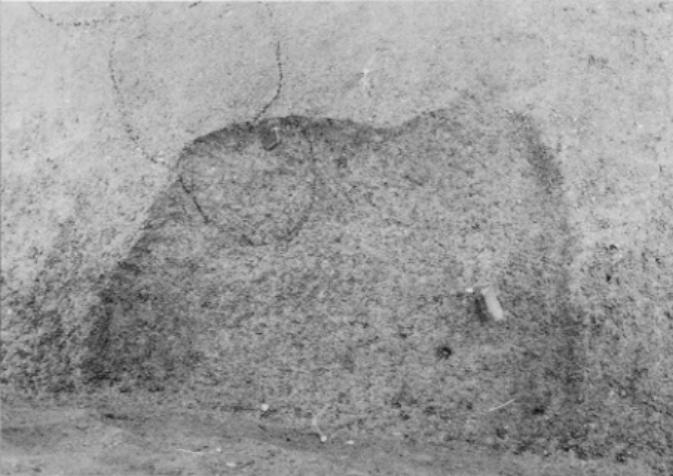


写真17
SK 2 土坑全景
(南より)



写真18
SK 3 土坑全景
(南より)

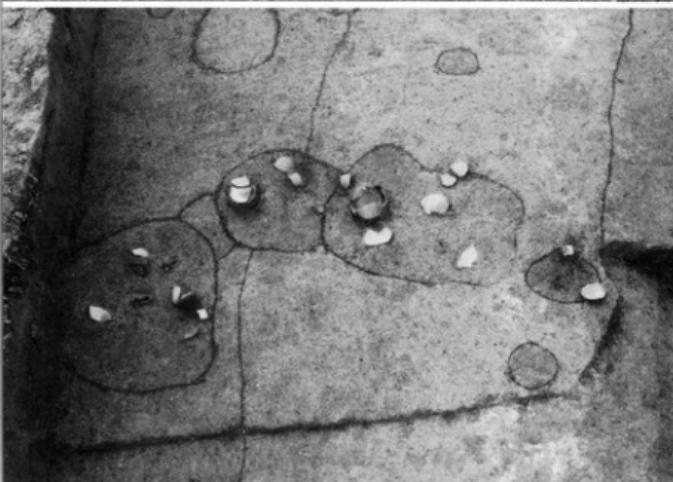


写真19
SK 2、3、4 土坑、pit 4
遺物出土状況
(東より)

写真20
SK 5 土坑全景
(西より)

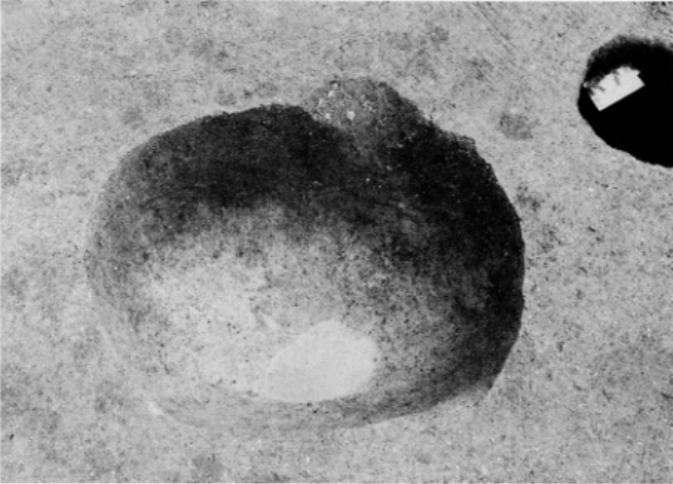


写真21
SK 5 土坑断面
(南より)

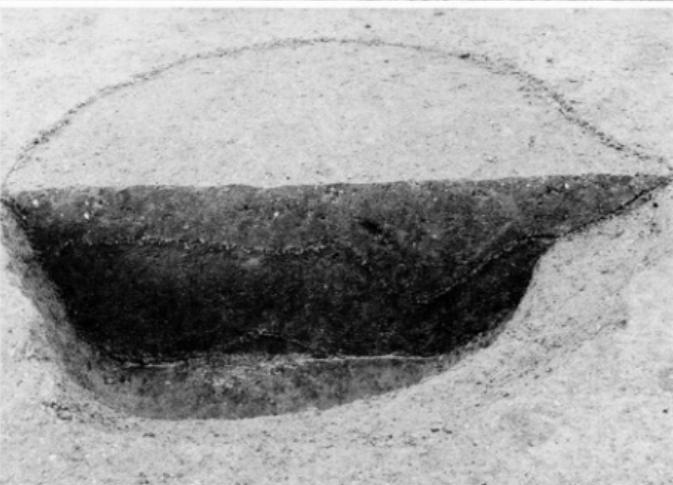


写真22
SK 6 土坑全景
(南西より)



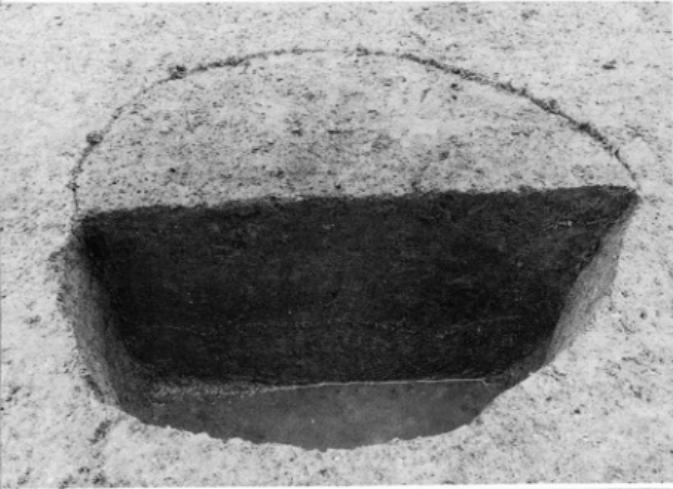


写真23
S K 6 土坑断面
(南より)



写真24
S K 8 土坑全景
(西より)

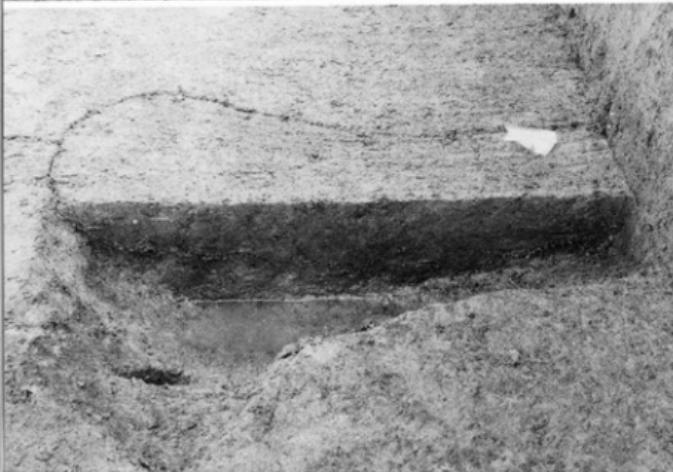


写真25
S K 8 土坑断面
(西より)

写真26
S K 9 土坑全景
(南より)



写真27
S K 9 土坑断面
(南より)

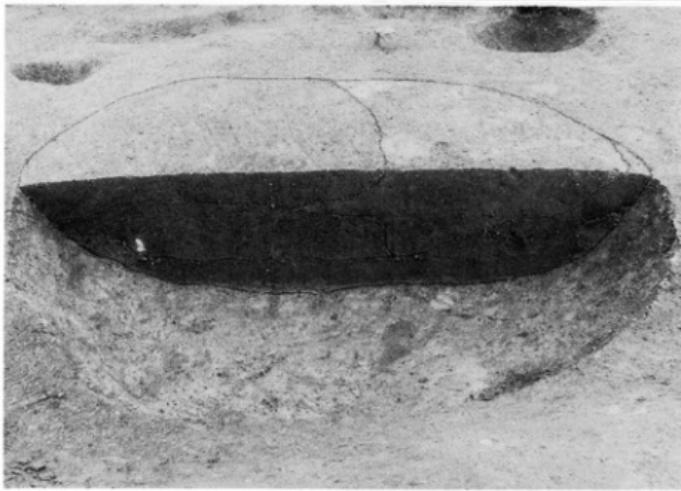


写真28
VI層水田跡大畦畔
確認状況
(北より)

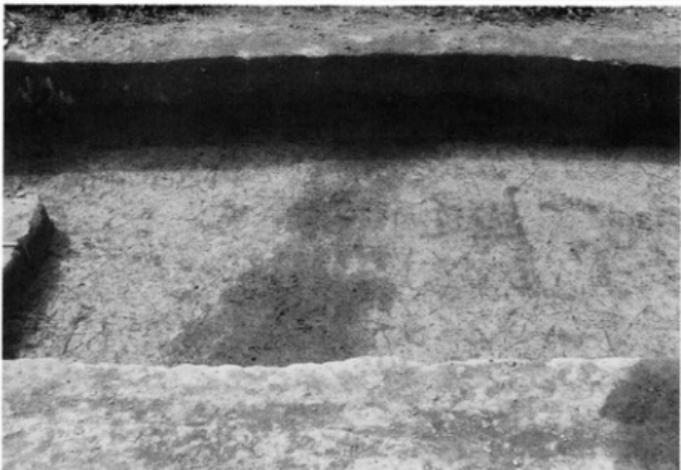




写真29
VI層水田跡小畦畔
確認状況
(北東より)



写真30
VI層水田跡全景
(E-15~27、北東より)



写真31
VI層水田跡全景
(E-15~27、北西より)

左：写真32
VI層水田跡確認状況
(E-3~12、西より)



右：写真33
IV層水田跡全景
(E-3~12、西より)

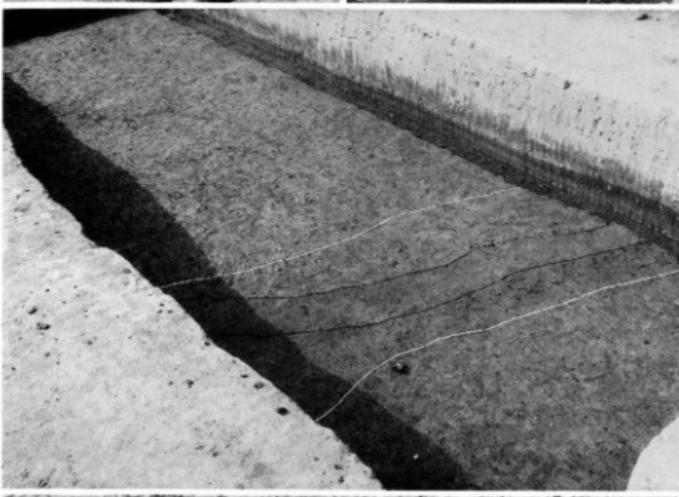


写真34
Ⅶ層水田跡全景
(南東より)



写真35
Ⅷ層遺物出土状況
(登録番号C-3)



写真36
IV層作業風景
(東より)



写真37
VI層作業風景
(東より)

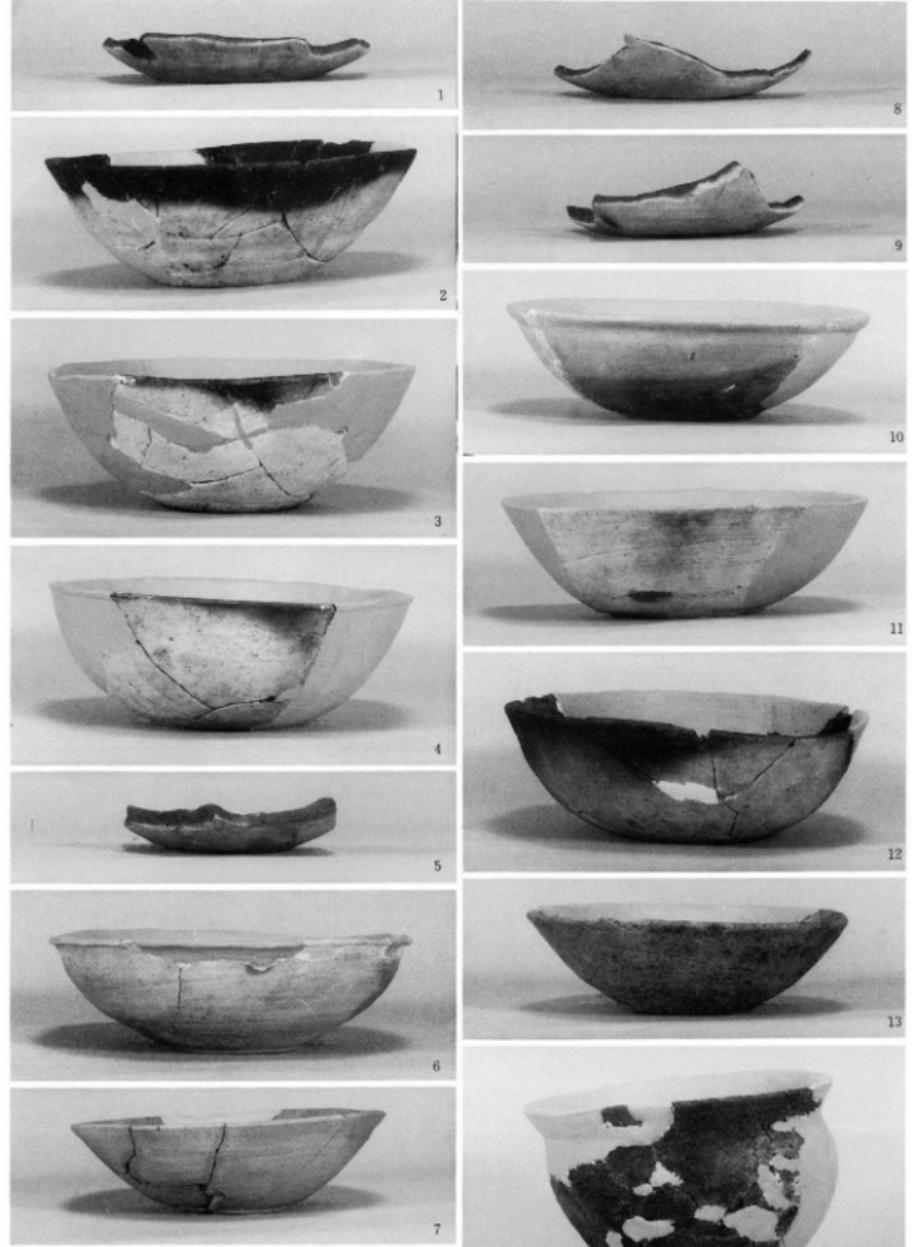


写真38 出土遺物（1）

- | | | | | | | |
|--------------|----------|-------------|---------------|--------------|----------------|---------|
| 1. D-3 土師器環 | 中 | 6. E-1 須恵器杯 | S K 3 土坑 | 11. E-3 須恵器杯 | S K 4 土坑 | |
| 2. D-20 土師器環 | S D 9 溝跡 | (灰白色火山灰より下) | 7. D-10 赤燒土器環 | S K 4 土坑 | 12. D-9 土師器環 | Pit.2 |
| 3. D-21 土師器環 | S D 9 溝跡 | (灰白色火山灰より下) | 8. D-11 土師器環 | S K 4 土坑 | 13. D-14 赤燒土器環 | Pit4 |
| 4. D-4 土師器環 | S K 2 土坑 | | 9. D-12 土師器環 | S K 4 土坑 | 14. C-3 土師器跡 | 埴輪上面 91 |
| 5. D-5 土師器環 | S K 2 土坑 | | 10. E-2 須恵器杯 | S K 4 土坑 | | |

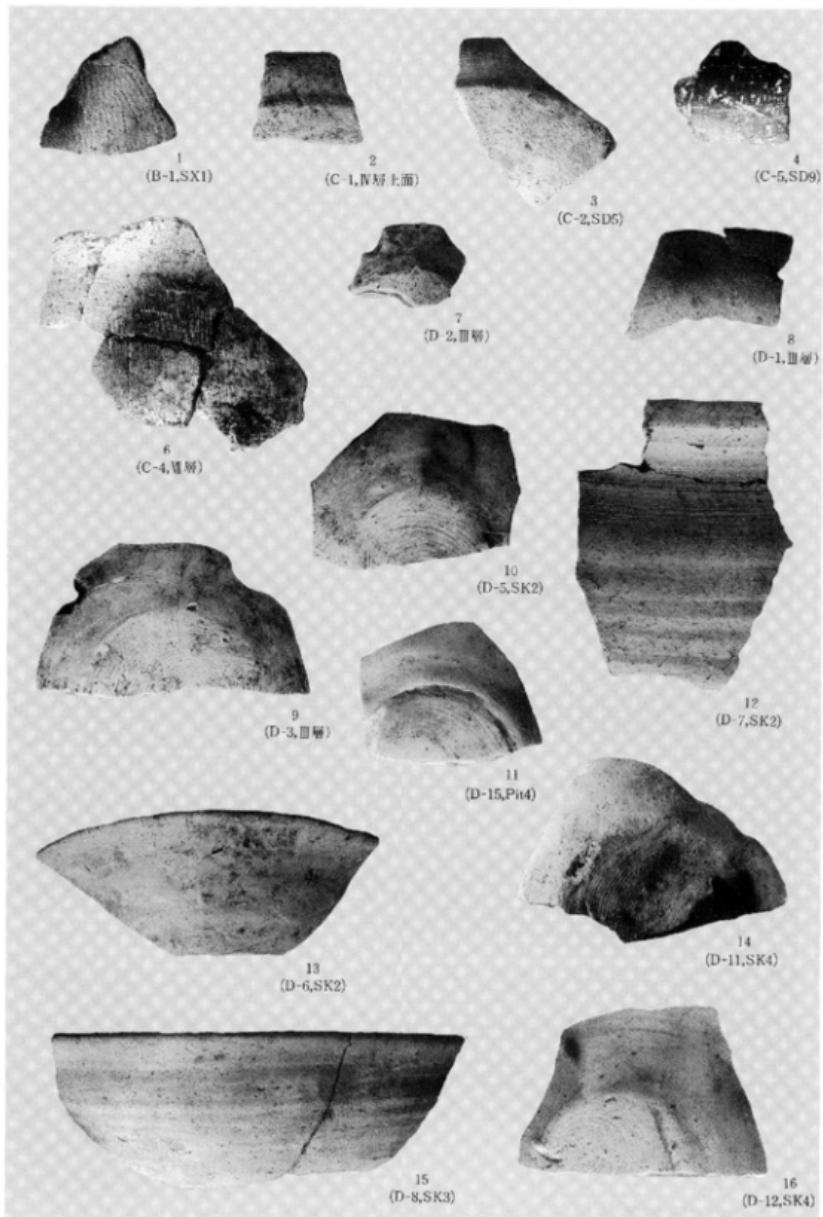


写真39 出土遺物 (2)

Scale : 約3cm

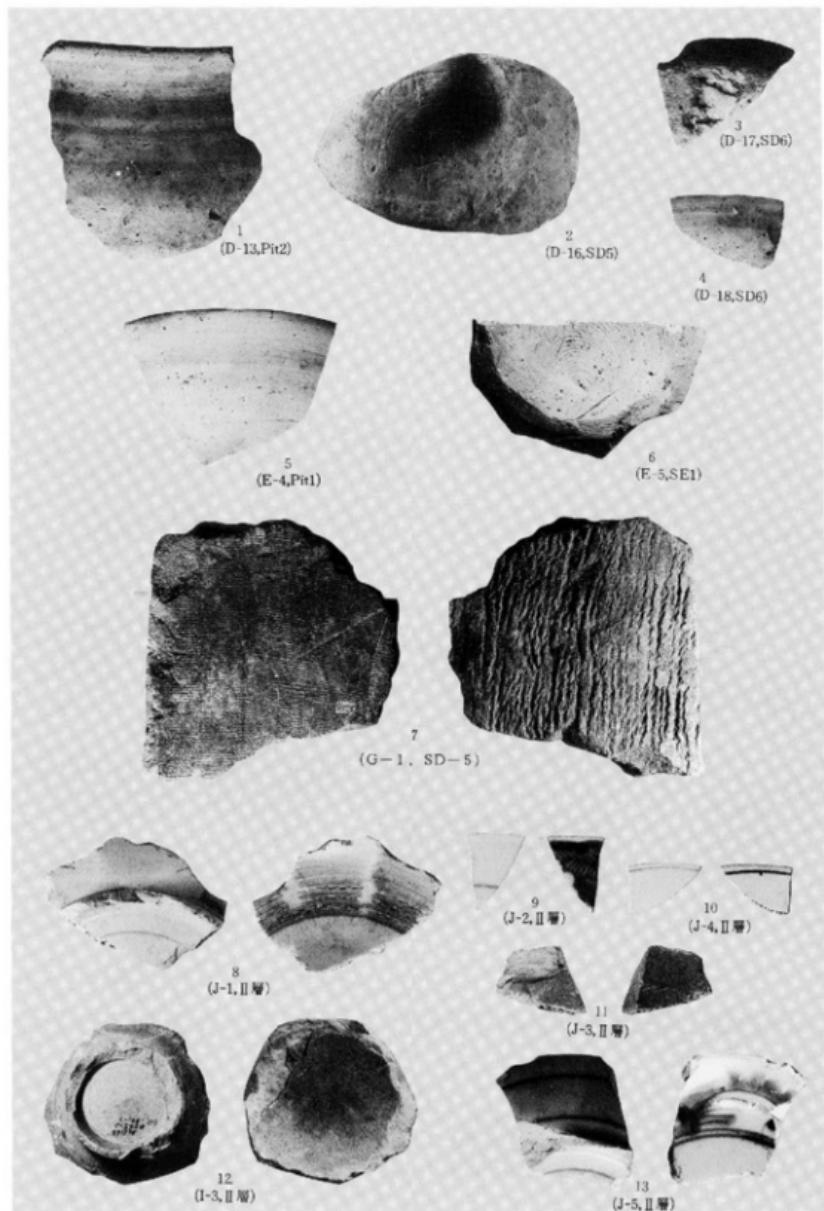


写真40 出土遺物 (3)

Scale : 約
7 mm

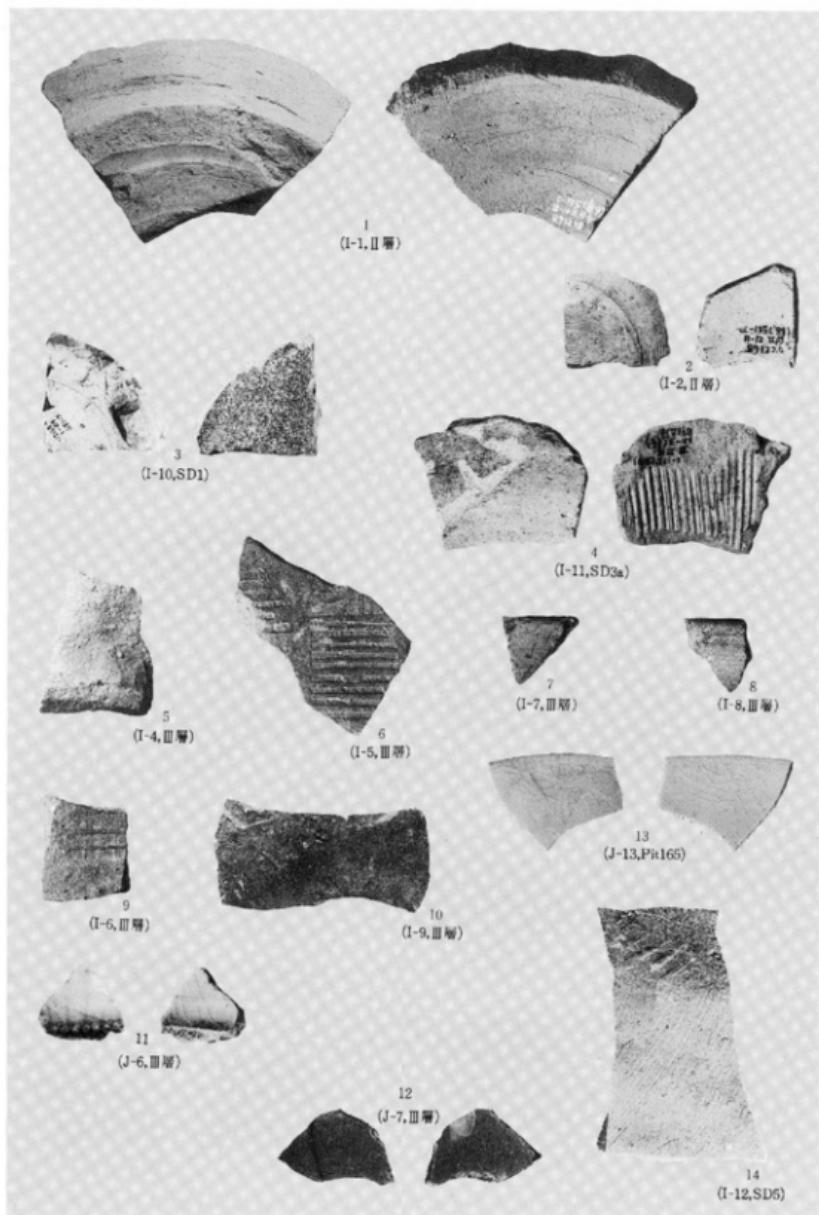


写真41 出土遺物 (4)

Scale; 1~10, 13, 14 約3cm
11, 12 約2cm

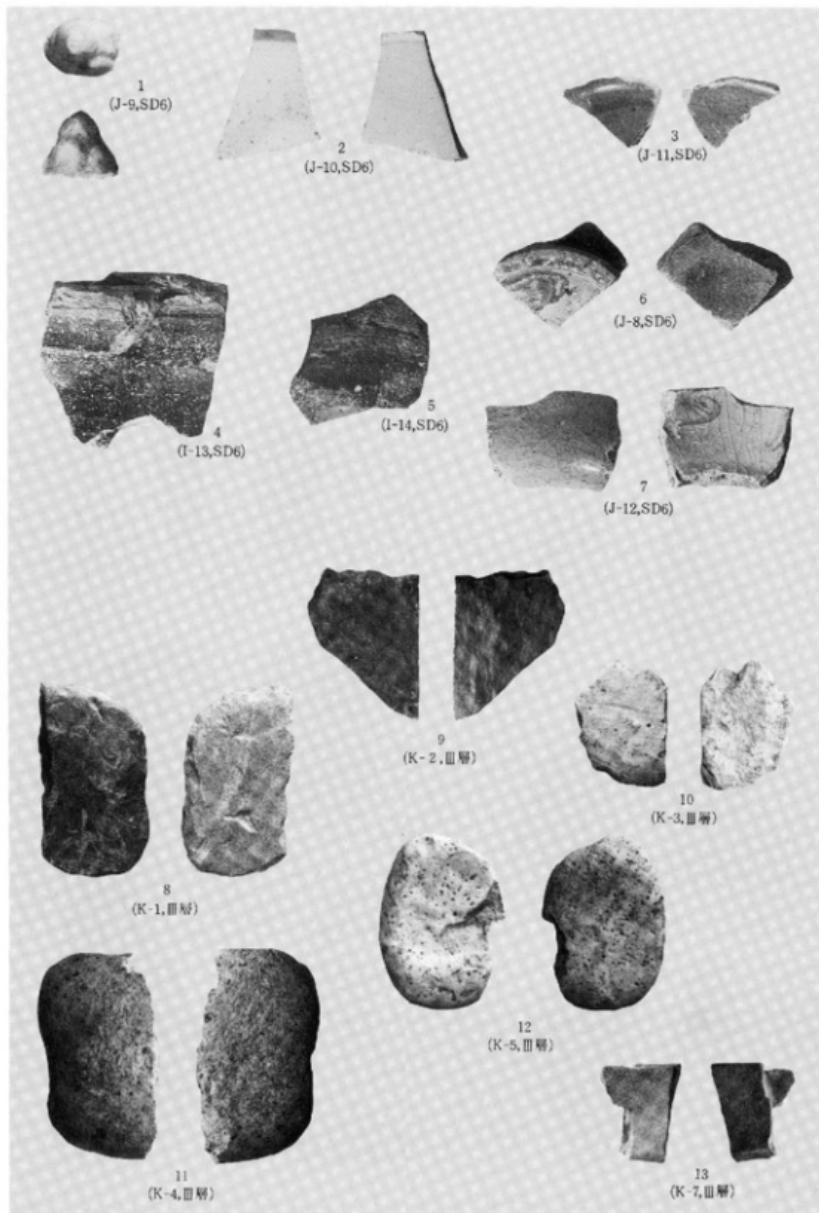


写真42 出土遺物 (5)

Scale: 1 ~ 3 約3/8

4 ~ 7 約3/4

8 ~ 13 約3/8

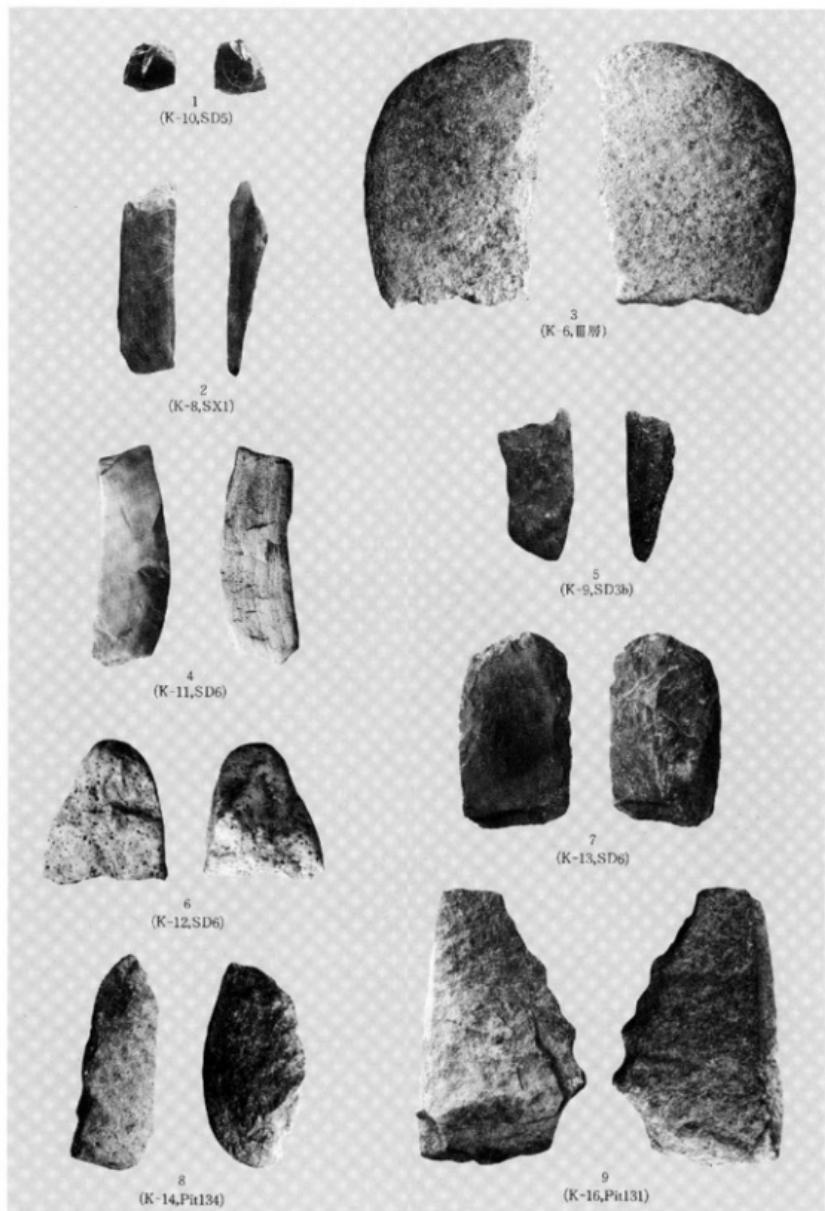


写真43 出土遺物 (6)

Scale: 1 約3%
2 ~ 9 約5%

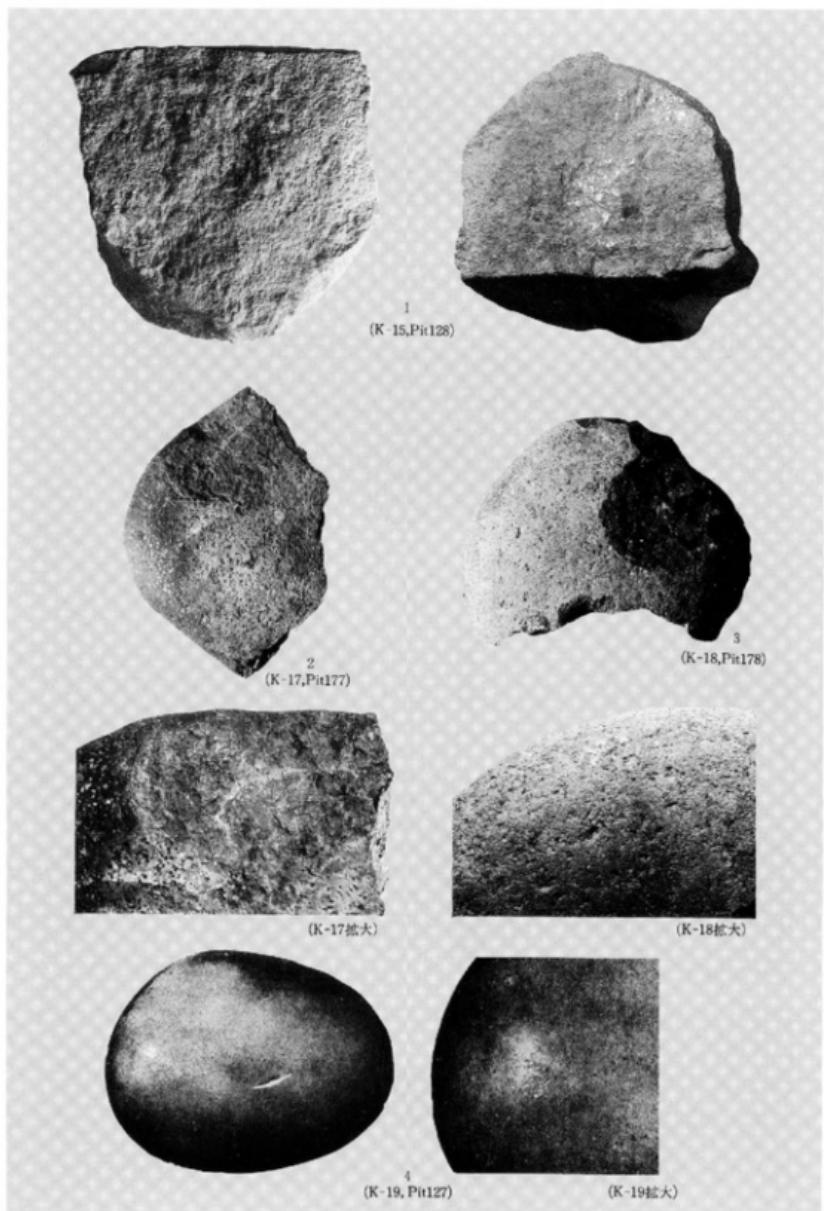


写真44 出土遺物 (7)

Scale: 約5

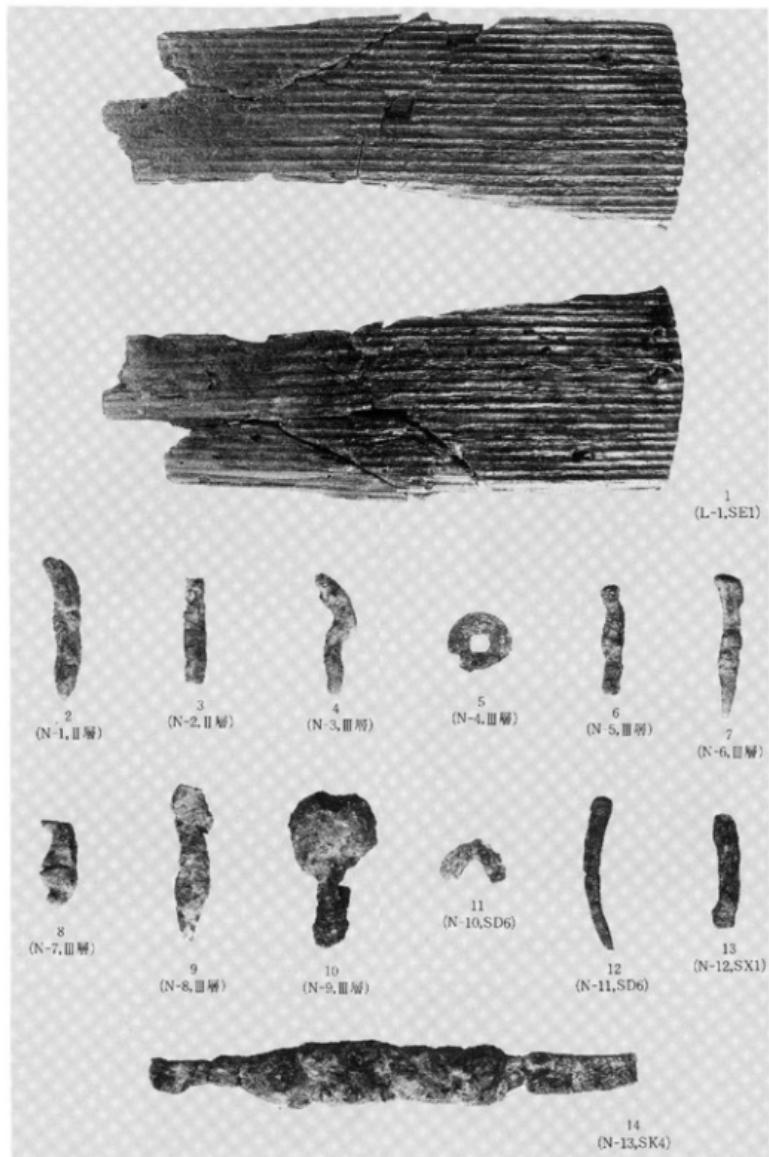


写真45 出土遺物 (8)

Scale: 約1/2

文化財課職員録

課長 早坂春一

管理係

調査第一係

係長 鶴田義幸

係長 佐藤 隆

主事 佐藤 洋

主事 白幡靖子

主任 田中則和

〃 金森安孝

〃 佐藤良文

教諭 太田昭夫

〃 佐藤甲二

〃 高橋三也

主任 篠原信彦

教諭 小川淳一

〃 庄司 厚

〃 木村浩二

主事 渡部弘美

主事 吉岡恭平

〃 工藤哲司

〃 斎野裕彦

〃 主浜光朗

教諭 五十嵐康洋

〃 長島榮一

〃 渡辺雄二

〃 工藤信一郎

主事 大江美智代

〃 荒井 格

〃 中富 洋

調査第二係

〃 平間亮輔

係長 加藤正範

教諭 高倉祐一

主任 熊谷幹男

主事 佐藤 淳

教諭 佐藤好一

〃 渡部 紀

仙台市文化財調査報告書第148集

鴻ノ巣遺跡

—第6次発掘調査報告書—

1991年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町3-7-1

仙台市教育委員会文化財課

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市青葉区立町24-24 TEL 263-1166

